

瑶族文化研究所

北極驅邪院醮壇給出給承弟子遊樂眾郷黔

太上奉行驅邪院川通閩梅二教三戒新承弟子

盤法

妻盤氏一娘

合同職位陞在

廣西

省南寧

府正印之職爲號。仰差唐葛週三將軍前云云程之中

禦關卡糖鋪，虔備軍糧馬料，無得違誤。如若不尊

送玉帝案前治罪施行。

須至牌者，佑牌不誤，

中華人民共和國公元一九八八年戊子歲十一月

第一号

通訊

目 次

『瑶族文化研究所通訊』発行によせて …… 1 廣田 律子	ヤオ族度戒儀礼調査に参加して…………… 24 佐川 潤子
ヤオ族文化研究所メンバー一覧…………… 2	今回の調査感想について…………… 25 李 利
主祭場平面図…………… 3	匯源郷瑶族の度戒儀礼と問題点…………… 26 広川 英一郎
度戒儀礼主祭場…………… 4	儀礼の映像と今後の課題…………… 27 三村 宜敬
度戒儀礼調査程序…………… 5	度戒儀礼に見出せる演劇性…………… 28 廣田 律子
祭司（師父）名簿…………… 6	張 勁松著『藍山県瑶族伝統文化田野調査』 「第四章 度戒」 岳麓書社出版 pp.131 ~ 254 翻訳 …… 29 佐川 潤子 広川 英一郎 三村 宜敬 李 利
会首名簿…………… 8	
文書・テキスト…………… 10	
度戒儀礼…………… 14 松本 浩一	
藍山県〈度戒〉儀礼を観て…………… 15 吉野 晃	
ヤオ族度戒儀礼調査の所感と研究課題… 16 丸山 宏	
調査参加記…………… 19 森 由利亜	
受戒と関門 —通過儀礼の宗教化における比較民俗研究— …… 20 佐野 賢治	
辣椒湯と漢語の禁忌…………… 21 泉水 英計	
初めての儀礼・文書・コミュニティ… 22 高城 玲	
藍山ヤオ族度戒儀礼調査归来…………… 23 蔡 文高	



『瑶族文化研究所通 訊』 発行によ せて

神奈川大学経営学部教授
 ヤオ族文化研究所所長
 廣田 律子

本研究所はヤオ族について儀礼を通した文化の研究を行なうことを目的とし神奈川大学内に 2008 年に設立した。まず湖南省藍山県に居住する過山系ヤオ族の伝承する宗教儀礼の中で最上級の通過儀礼である度戒儀礼の総合的な調査を行なう。度戒儀礼は文化大革命等の原因で久しく大規模には行なわれていなかったが、藍山県政府によって無形文化遺産の対象とされ、受礼希望者も見つかった為、実施が許可され 2008 年冬に実現の運びとなった。今回のような 15 日間にわたり宗教者や受礼者と夫人等 50 名以上が参加する大規模な度戒儀礼は今後の実施は不可能となると考えられ、実地調査の貴重な機会と言える。調査においては、儀礼全体の内容について詳細な記録をとることは無論だが、中でも儀礼の進行に必要な不可欠な儀礼文献・文書が儀礼的实践の中で、どの段階で、如何なる目的をもって使用されるか、記録することに重点を置いた。

ヤオ族の儀礼はある意図を持って動作と読誦によって構成され、礼拝する、足のステップを踏む、手の指を組む、符を書く、水を撒く、回転する、供物を捧げるといった動作と、儀礼文献の本文や、常用する曲詞や演劇的科白、神に向かってしたためられた儀礼文書、秘訣の呪文の読誦が同時並行で行なわれる。動作と読誦の両面を空間と時間にわたってしっかりした記録に留めることによって、今まで充分に行なわれてこなかったヤオ族の儀礼の全容が解明される。

その上で道教儀礼やその他の地域の民間祭祀儀礼等との比較が可能になる。また文献学的儀礼研究との接合も可能になり、儀礼史の上に体系的に位置づけることにも繋がる。歴史的な儀礼文献との比較を行なうことで、現代に到る道教儀礼の歴史的変遷をヤオ族の儀礼に通観できることになる。またヤオ族の儀礼にあって道教儀礼にない内容からヤオ族の儀礼の独自の面が明らかになる。

またヤオ族の家を単位として行なわれる通過儀礼の還家願儀礼及タイ北部のヤオ族の儀礼の調査を実施し、儀礼内容及儀礼文献の異同を確認し、ヤオ族の儀礼のバリエーションを整理するとともに、歴史的な位相のもとに置く為の検討を行ない、系譜関係も明らかにしたい。

補足調査を行ない、宗教者や施主への聞き取りを実施すると共に、調査の記録内容を儀礼実施者の宗教者に改めて校閲して貰い、総合的かつ緻密な調査研究を目指す。今回収集した文献資料及収録した映像画像資料は全てデータ化し、儀礼文献の現代語訳を付し、また儀礼内容の説明を付し、インターネット上で公開できるようにする。今回のプロジェクトは本研究所を拠点として実施するが、今後ヤオ族儀礼文献の研究センターとして機能させたい。

その他、バイエルン州立図書館及南山大学に収蔵されているヤオ族の儀礼文献を閲覧し、今回の度戒儀礼等の調査で収録した資料との比較を行なうと共に研究交流を進める。また研究所メンバーがすでに得ているヤオ族の儀礼文献との比較も行なう。他の種々な資料と対照することで更に深い理解と新たな発見が期待できる。

異なる研究領域の分担者が共同で研究を行なうことで、民俗学、文化人類学のフィールドワークの手法と宗教学・歴史学の歴史文献分析法のコラボレーションによってより充実した研究成果が期待できる。ヤオ族儀礼の総合的な調査研究が初めて実現するのである。研究所メンバーがこれまでに四川、貴州、江西、湖南、広西、台湾で調査収集した資料との比較検討作業を進めることで、明・清代に江南中国に広く流行していたと考えられる、道教の影響下に形成された祭祀儀礼の形式の復原が可能となると確信している。

更にヤオ族の儀礼の中で農耕・狩猟・漁撈の豊穰祈願に関わる儀礼はヤオ族の特徴と言えるが、日本の各地に残る豊穰祈願儀礼との比較を試みる。また日本の近世に行なわれた陰陽道の祭祀儀礼に使用された祭文及修験道の動作との比較を行ない、東アジアに通底する祭祀儀礼の特性を探る。

なお「ヤオ族の儀礼と儀礼文献の総合的研究」の課題で平成 20 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）を得て 2008 年～ 2012 年に活動を行なう。

本研究は湖南省文聯副主席張勁松先生をはじめ、藍山県政府及地元の方々の多大なご支援ご協力を得て実施しており、心より感謝申し上げます。なお資料の公開に関しては地元政府と協議書を交わしている。

ヤオ族文化研究所メンバー一覧

参加資格	職位	氏名
所長	神奈川大学経営学部 教授	廣田 律子
客員教授	湖南省文聯 副主席	張 勁松
客員教授	筑波大学図書館情報メディア研究科 教授	松本 浩一
客員教授	東京学芸大学教育学部 教授	吉野 晃
客員教授	筑波大学人文社会科学研究科 教授	丸山 宏
客員教授	國學院大學文学部 教授	浅野 春二
客員教授	早稲田大学文学学術院 教授	森 由利亜
研究員	神奈川大学経済学部 教授	佐野 賢治
研究員	神奈川大学経営学部 准教授	泉水 英計
研究員	神奈川大学経営学部 助教	高城 玲
研究員	神奈川大学歴史民俗資料学研究科 特任教授	蔡 文高
研究協力者	筑波大学 講師	蘇 素卿
研究協力者	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程	佐川 潤子
研究協力者	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程	李 利
研究協力者	國學院大學大学院文学研究科 博士後期課程	広川 英一郎
研究協力者	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程	三村 宜敬
事務補助員	IT 関連業務代行業者	岡本 浩一



度戒儀礼に用いられた切り絵。目次のイラストはこれをもとに描きました。

(編集担当：岡本)

度戒儀礼主祭場



主祭場外観



祭壇正面



主祭場上部の榜・聯



正面入り口



花楼



文台での儀礼の様子



書表師部屋の神位



祖霊旗

度戒儀礼調査程序

日付	儀礼名
11/26	安壇・做紙馬・撥三清兵・疏表兵・架橋・封小齋・奏封齋表・開天門
11/26 ～ 11/29	儀礼の文書・祭壇・用具準備
11/30	封大齋・撥加職補充兵・領席・開天門
12/1	鋪床・引睡・起早・封酒壇・巧婦・礼神・分掛吊・分紙馬・請聖出規・領席・礼神・請聖・撥功曹
12/2	礼神・上光・昇堂・初夜黄表・開天門・礼神・掛三燈
12/3	礼神・請中夜聖・奏疏文・磨刀・点灯・開天門・翻刀山
12/4	試刀梯・礼神・上光・還四府良願・上光・賀星拝斗・開天門・奏賀星表
12/5	請末夜聖・回功曹・掛大羅明燈・開天門・過水槽
12/6	上刀山・開天門・奏疏文・過勒床
12/7	捧火磚・遊郷・添名押字・問路・問職・当路・通報・合歛飯
12/8	開齋・分兵・開禁壇
12/9	開天門・帯兵帰壇
12/10	送船

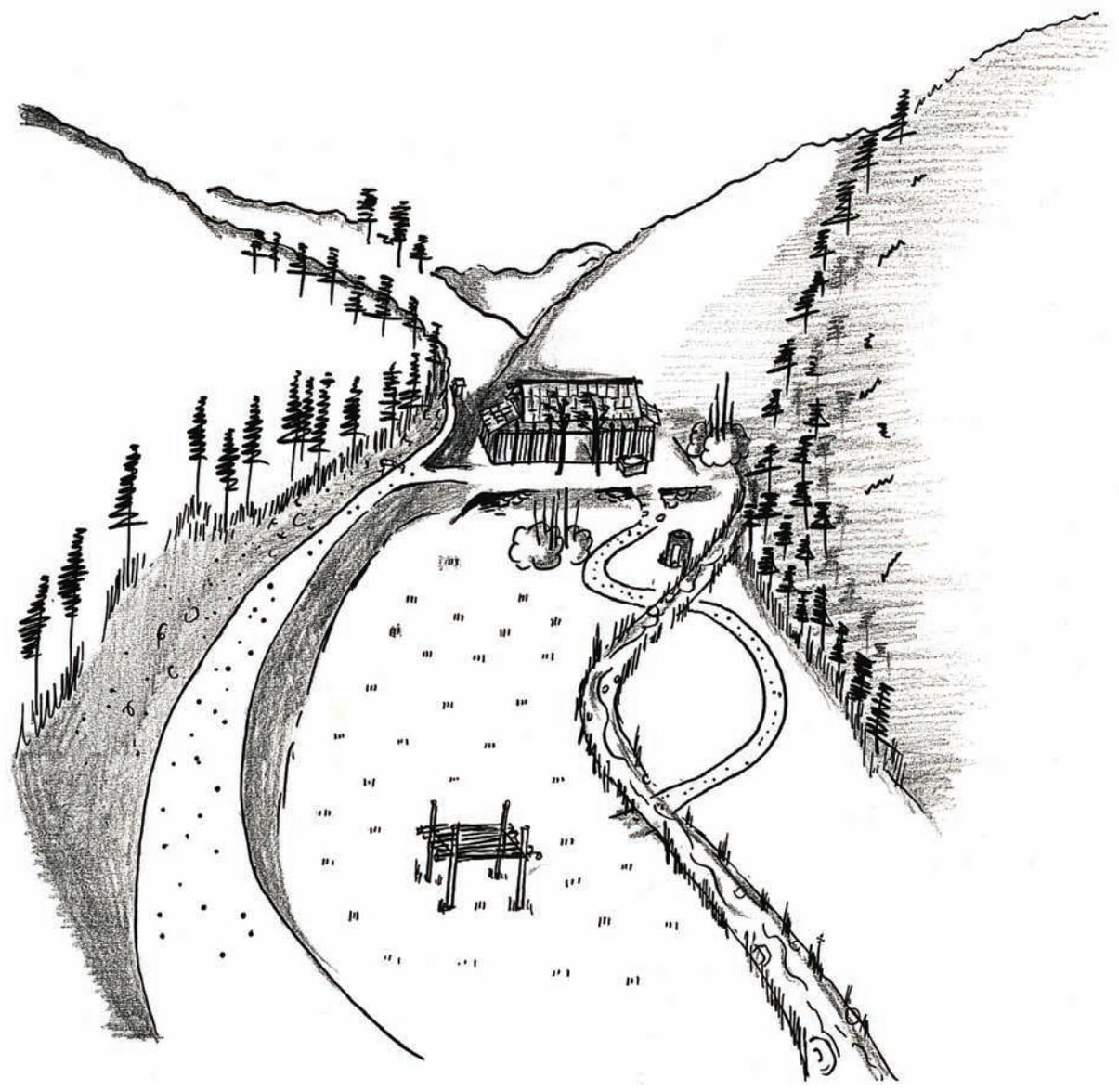
※儀礼名など未確認の部分もあるので、決定稿ではない。



このページは、インターネット上での公開に適さない情報が含まれていたため削除しました。

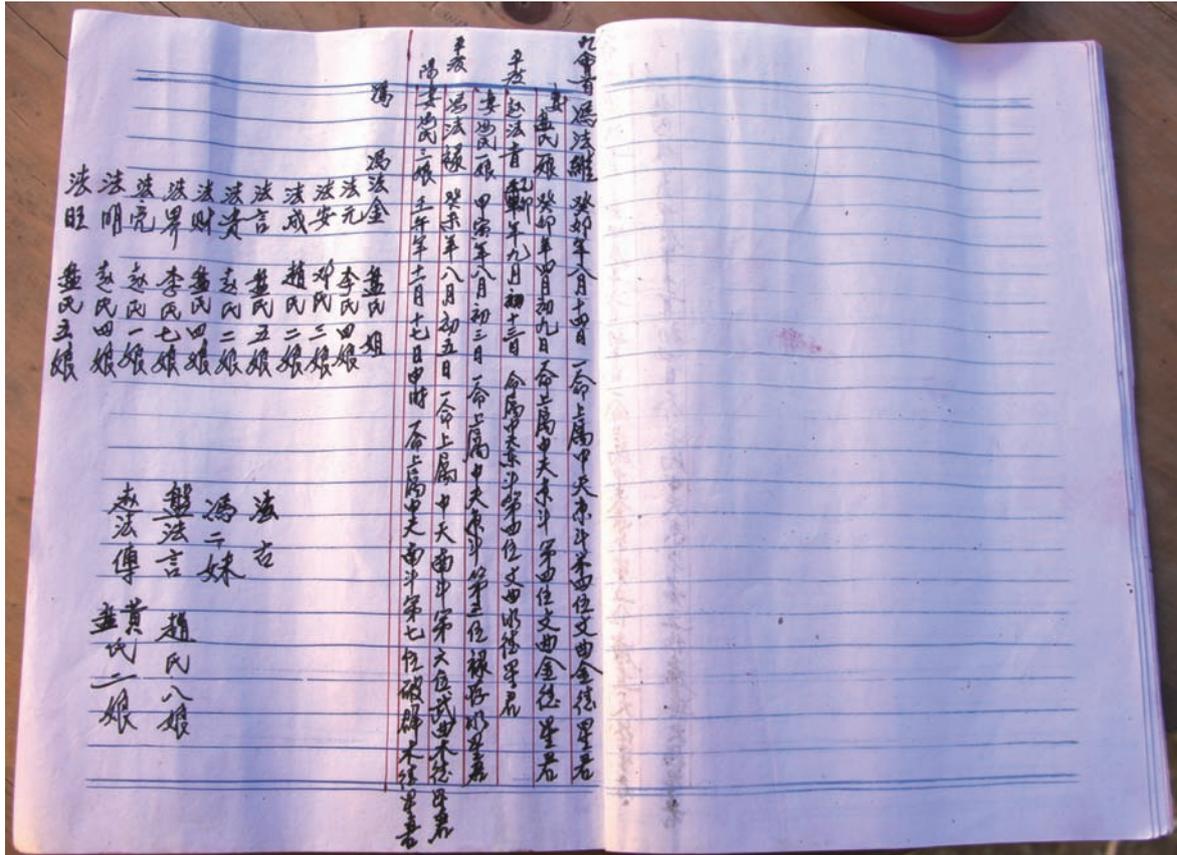
このページは、インターネット上での公開に適さない情報が含まれていたため削除しました。

このページは、インターネット上での公開に適さない情報が含まれていたため削除しました。



齋場見取り図
イラスト作成：譚 静

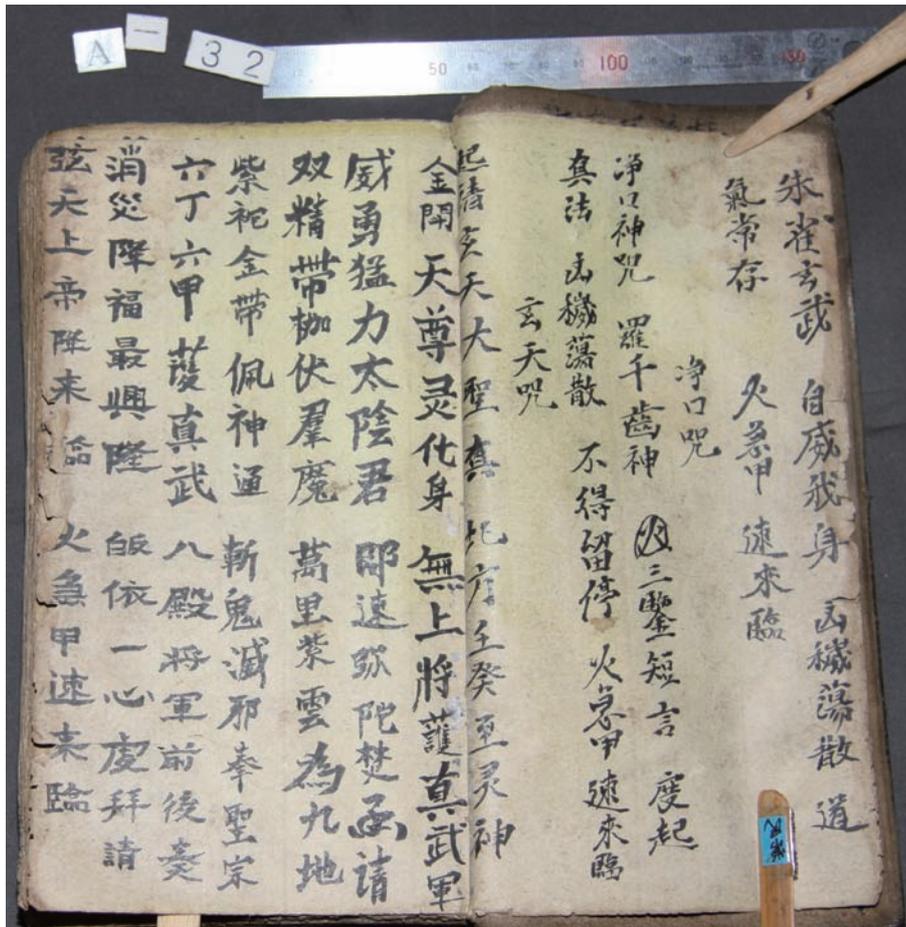
文書・テキスト



『醮壇人民單・衆姓醮主各家歷代祖宗名單』第九会首の頁



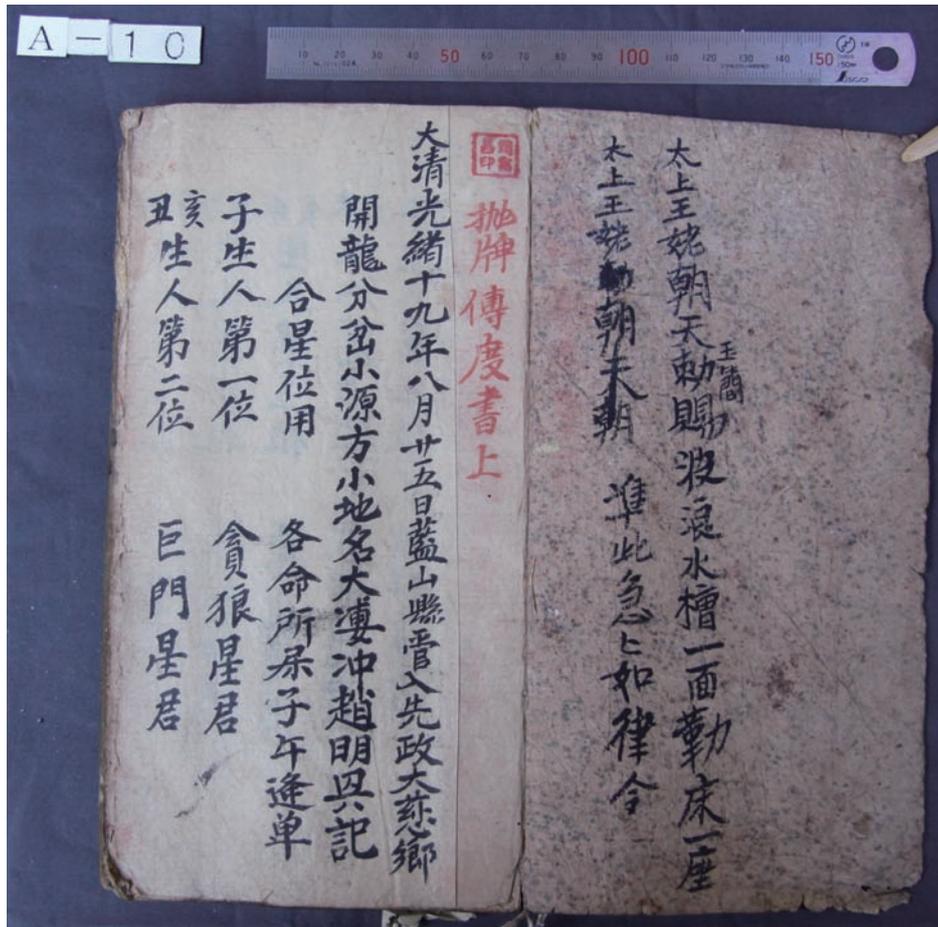
傳度白榜



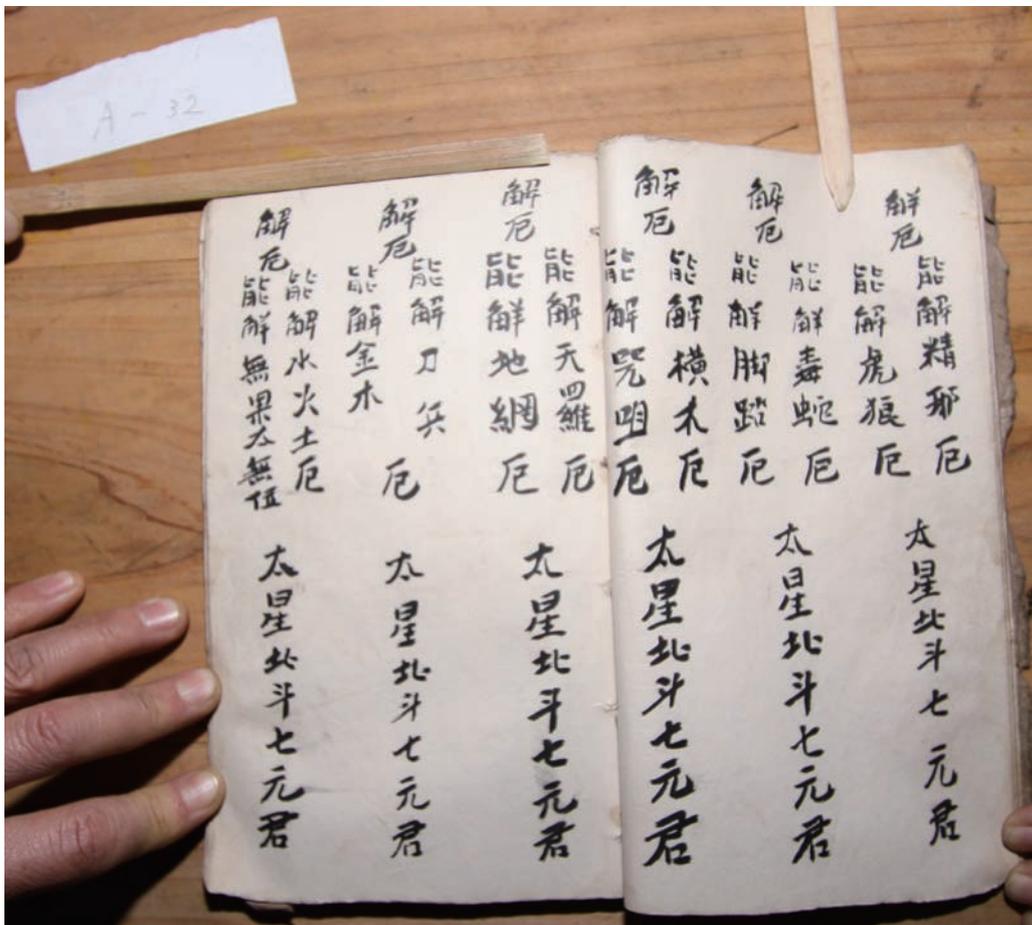
掛十二燈儀礼で読誦される「玄天咒」



掛十二燈儀礼 主醮師が文献「玄天咒」を読誦



『傳度書』



「解厄」

度戒儀礼

筑波大学図書館情報メディア研究科教授
 ヤオ族文化研究所客員教授
 松本 浩一

今回の度戒儀礼は、廣田先生の熱心なお誘いによって参加することになりましたが、なるほどあれだけ先生を夢中にさせるだけのことはあるというのが第一印象です。私たち第二陣は途中からの参加でしたが、初端から死と再生を絵に書いたような過水槽儀礼からはじまり、早速圧倒されました。私たちは結構ハイライトにあたる儀礼を見られたということでしたが、印象に残っているのは、この儀礼や刀のはしごももちろんですが、分兵の儀礼や隣でやっていた梅山の人たちの儀礼にも興味を惹かれまして、結構こちらの儀礼はビデオに撮りました。

今後はとにかく一つ一つの儀礼において、どこで儀礼書のどこを読んでいるか、それをきちんと把握することが、第一の課題になるでしょう。来年の調査では、この課題を解決することを目的としたいと思います。この調査を行うためには、張先生がすでに書いている報告を踏まえて、写真に撮ってきた儀礼書を、まず読み込んでおくことが前提になります。ですから来年の調査までに、この作業をまずやっておくことにしたいと思います。

そしてそれによって儀礼全体のストーリーを、自分なりに組み立てていくことが次の段階だと思いますので、それが来年の調査後の課題ということになりましょうか。次に今度は一つ一つの儀礼について、その全体の中での位置づけに注意を払いながら、それが持っている意味を聞いていく作業が必要となるでしょう。儀礼の中で気になっていることは幾つかあります。たとえば儀礼の中で繰り返し見られた、台湾のポエにあたるような小さな道具、あの原理がどうなっているのかはまず聞いてみたいことの一つです。

また私としては是非見てみたいのが、普段あの宗教者たちが行っている儀礼で、隣でやっていた人たちの儀礼についても、一通りは調べてみたいと思っています。調べたいことはいろいろありますが、あまり欲張っても中途半端になるでしょうから、ビデオや儀礼書を見ている間に対象を絞っていくことも必要になるかもしれません。

ここからは、「ビデオを見倒す会」が終わってからの印象ということになりますが、私たちが見ていなかっ

た部分の儀礼で、特に「掛三燈」と、もし車の故障がなければ見られたかもしれない十二の燈の儀礼、これは是非全体がどのような構成になっているのか調べてみたいです。そのあとで「掛三燈」で使われている経典を、いただいたDVDの中で探してみました。何種類かあるようなので、これらの校訂作業もやらなければいけないことに気付きました。その他にも結構写真に撮った経典の数は多いようで、しかもそれぞれいくつかのバージョンが見られます。9月に行く前に、これらを整理しておくことと、現在わかっている儀礼との対応関係をはっきりさせておくことは、やっておかなければならないと思っています。



掛三燈儀礼

藍山県〈度戒〉儀礼を観て

東京学芸大学教育学部教授
 ヤオ族文化研究所客員教授
 吉野 晃

藍山県の〈度戒〉儀礼を参観する機会を得られたことは大なる幸いであった。まず、我々の調査に御協力賜った藍山県政府と藍山県滙源郷のユーミエンの人々に深甚の御礼を申し上げたい。村の人々は、ビデオで儀礼の詳細を撮影するのを大幅に許していただき、更に、儀礼の次第や細目について我々が事細かく質問するのに対して懇切に答えていただいた。今回の調査は正に滙源郷の人々と我々の共同作業であった。準備期間（その中にも既に儀礼が入っている）を含めて二週間に及ぶ儀礼の調査は体力的に負担であったが、儀礼そのものに対する学問的関心と、儀礼実践に伴う高揚感とで乗りこえることができたのであった。

ユーミエンの儀礼を観るたびに感じることもある。中国から東南アジアに亘る山中において、かくも複雑で大がかりな宗教儀礼体系を維持してきたことに対する驚嘆である。この驚嘆は、中国の山中でもタイの山中でも大がかりな儀礼を観るたびにいつも感じるものだ。正味の儀礼期間だけでも十日ある〈度戒〉儀礼においては、膨大な量の経文を読誦し、無数の儀礼文書を用意する。儀礼の詳細な次第を心得ていることは当然ながら、儀礼中の祭司の所作も甚だ多様である。このような儀礼知識の量は想像を超える大きさになる。しかもそれを伝えてきたのは、専門家としての宗教職能者ではない。普段は農業などに従事しながら、必要に応じて祭司としての職能を果たす兼業宗教職能者である。この体制は、中国でもタイでも同様であった。日々の仕事の傍らで儀礼知識を学ぶことによって、道教的な宗教儀礼知識の総体が広い地域にわたり維持・伝承されてきたのである。これは、本当に驚くべきことだ。その複雑にして大量の宗教儀礼知識は、人類の文化遺産の一つとも言うても過言ではない。まず、このような膨大な宗教儀礼知識の総体を、経典、文書、言説、儀礼実践について明らかにしてゆくことが、我々の第一の課題である。そして、その豊富な儀礼知識が日々の生活の中でどのように伝承されてきたかの詳細についても探究する必要がある。

さらに注目すべきは、中国のユーミエンとタイのユーミエンとがそれぞれ持っている儀礼知識が、相当程度相同であることだ。これは、一つには、漢字経典があ

る故に、読誦するテキストが保持されやすいことによる。そのため、筆者がタイで見聞した〈度戒〉儀礼と今回藍山県で観察した〈度戒〉儀礼とに細部や儀礼の程序について異なる点があっても、儀礼の大枠は変わらないのである。しかし、儀礼の細かい程序や具体的な所作の型は、口頭コミュニケーションや身体コミュニケーションによって伝承される知識であり、日々の儀礼活動そのものによってのみ伝承保持されるものである。このレベルにおいては、広い地域に分布するユーミエンの間でいささかの相違が見られる。口頭・身体コミュニケーションによって伝承される知識は、個人の解釈や記憶の変容など、変差を生じる契機を多く伴っているからだ。藍山県のユーミエンの祖先と、タイのユーミエンの祖先が異なる移動先へ遷徙して長い時間が経っている。その中で、変差が生じるのは当然としても、一方で変わらない不易の部分も見られるのである。〈度戒〉を含むユーミエンの儀礼の地域間比較を行うことで、これらの儀礼における不易と変差の両側面を明らかにすることも、我々の探究の一つの課題となる。

このように、ユーミエンの宗教儀礼について我々が解明すべきことは甚だ多く、我々の力には限りがあるが、逆にやりがいのある探究作業である。ユーミエンの人々に教わりながら、一つ一つの探究作業を進めてゆきたい。



還四府愿儀礼

ヤオ族度戒儀礼調査の所感と研究課題

筑波大学人文社会科学部研究科教授

ヤオ族文化研究所客員教授

丸山 宏

2008年12月に廣田律子教授を代表とする調査団の一員として、ヤオ族の度戒儀礼を調査することができた。ヤオ族の儀礼が道教儀礼と密接に関係することから、以前よりヤオ族の宗教に興味を持っていたので、この調査に参加でき、実際に儀礼を見ることができたのは非常に大きな収穫であった。以下に、メモのような形でしかないが、私の調査で印象に残った点と今後の研究について考えるところを述べたい。

まず、私の調査の簡単な記録を備忘のために示すと、次のような日時でいくつかの重要な儀礼活動を見学し初歩的に把握することができた。

2008年12月4日、羽田発、上海経由、長沙着。

12月5日、長沙から藍山に到着。夜、過水槽を見る。

12月6日、11時30分頃、書表師の所で符にニワトリの血を付け、主醮師が短い儀礼をする。

同日13時から14時頃に、外の雲台で上刀梯があり、離れた位置から見渡す。夜11時頃から12月7日0時半頃に、過勒床を見る。

12月7日、午前11時頃、升職を見る。職位・法名を書いた黄色の紙条を太上老君の神画のうゑに貼り付ける。昼過ぎ、游郷から醮壇にもどるのを見る。夕刻に、老君飯を食べるのを見る。入門者の夫婦が対になり草席に座って飯を食べ、半分残した二人の碗を重ねて赤い布で包む。

12月8日、昼間一日中、書表師が多数の書類を作成する。陰據・陽據等を夕刻に焚火する。夜に白米をエプロンに受け止めることで象徴される分兵を見る。

12月9日、第七会首の自宅に移動し、宴会と接兵を見る。

12月10日、藍山から長沙へもどる。12月11日、長沙に滞在。

12月12日、長沙発、廈門経由、成田着。

以下に、私が興味を持った儀礼内容について二点述べたい。第一点は儀礼の中に意識を失わせる場面が用いられること、第二点はいくつかの重要な儀礼に男女の両性の参加が明確に見られることである。

第一点に関しては、通過儀礼や資格獲得儀礼が、構造的に①能力確認のための苦行・試練の段階と②能力授与ないし資格獲得の二つの段階を持つことと関わる。

そして、湖南藍山ヤオの場合、上刀山や捧火磚が、足が切れたり手が焼けたりする危険を乗り越えるものと見られるが、一方で翻刀山、過水槽、過勒床は、引率する宗教者や入門者の意識を失わせる場面があって、今回も、一人一人の程度は違うようであるが、ともかく12名の入門者が次々に昏迷状態になるのには驚きを禁じ得なかった。入門者を別の世界に行かせることが、公共的な儀礼の中において大量に組み込まれていること、しかもそれが実施され続けていることに感動を覚えた。12月7日に、前の晩の過勒床で、最初に過勒床をして、その後なかなか覚醒せず、しばらく涙を流して動揺していた引度師の盤庚華さんに対して、昨晩の過勒床の際にどういう状態だったのか聞き取りを試みた。盤庚華さんは、発功曹したら、陰下去（陰界に降って行く）するが、その時には人事不省で、何も覚えていない、そして覚醒する段階になると、急に強い悲傷感におそわれたので、泣いたのだと言う。またこの前の1989年の度戒儀礼の際に、こうした昏迷状態から覚醒できず、家に運ばれて亡くなってしまった人さえいたのだと話してくれた⁽¹⁾。この聞き取りは中国語により短い時間で行われたにすぎないが、今回の調査体験の中では実際に話をうかがえたことから強く印象に残っている。

次に興味深いのは、12月7日の合婚合伙、喫合飲飯である。合婚の演技はどの程度なされたか注意できなかったが、男性の入門者である夫と女性の入門者であるその妻とが、夫婦一対になって、12組の夫婦がそれぞれ一枚の奠座の上に座り二人で御飯を食べ、残した飯のはいつている碗を二つ上下に重ねて、赤い布で包むのを見た。この時に、古い道教の天師道の入門儀礼において、集団的に夫婦単位の形で籙（守護神たる官将吏兵の名簿）を受ける実践がなされていたことを想起させられた。私の知る現在の台湾南部の道教も天師道に属するが、しかし夫婦一対になって入門者として入門式に参加し、ともに資格獲得をし、かつ何らかの男女の和合を象徴する行為をすることまでは行われていない。ヤオ族度戒儀礼においては女性入門者にも印や陰據・陽據等の資格証明書が授与される。こうした事実から女性の位置は非常に興味深いものがあると感

じた。

次に、私の専門的な関心から、ヤオ族儀礼の文字資料（「儀礼文献」は科儀書を中心に、儀礼文書も含めて広義の文字資料全般を指し、「儀礼文書」はやや狭く、主に行政文書に倣って宗教者や入門者の名義で神、鬼、祖先、人等に発出される榜、疏、表、状、脚引、符等を指す）について研究課題を述べる。2月の研究会において、調査において撮影された静止画像の中の文字資料部分、すなわち儀礼文献（主として科儀書、書表師が参考にした模範例文集である文検の類を含む）および儀礼文書（書表師が作成し実際に使用した榜、表、引などの文書類）をCDに保存して配布して頂いた。データの分量は膨大である。端的に言えば、これをどう解読し、儀礼理解を豊かにできるかが大きな課題である。

調査からもどって、ヤオ族の儀礼文献について調べなおしてみると、湖南のヤオ族の文献の特徴について次のような見解があることがわかった。すなわち、Lucia Obi (1995:261) は、ヤオ族宗教文献の分類を行い、いわゆる荊門ヤオ (Jingmen Yao、藍靛ヤオ) の文献と尤綿ヤオ (Youmian、盤ヤオ、湖南のヤオはこちらに属す) の文献に二大区別をする⁽²⁾。荊門ヤオには道公と師公の別があって、特に道公の文献は漢族道教の影響が濃厚でかなり正統的標準的な道教を受容しているとされるが、師公の文献は民間宗教の驅邪儀礼の傾向が多く反映されているという。尤綿ヤオの場合には道公の伝統が存在せず、すべて師公である。尤綿ヤオの文献の特徴は、タイトルを「某某科」でなく、「某某書」と称するものがほとんどで、多くは押韻した章句と符呪、奏表および散文の章句が交互に出現し、いくつかの異なった文体が一つにあつめられ編集されていて、師公たちは必要な特定部分だけを選択して使っているということである。なお尤綿ヤオには掛灯による成年儀礼の伝統があるが、他の支系にはなく、また盤王歌の濃厚な伝統や過山榜の所持もこの尤綿ヤオの特徴であるという。ここで考えねばならないのは、湖南ヤオが尤綿ヤオであるから、その文献には相当に違った文体が混合的に含まれており、なおかつ正統的道教よりはむしろ民間宗教的であり、単純に道蔵や漢族の道教文献を基準にできるようなものではなく、複雑な処理をしないと簡単には読めないであろうということである。

表面的にはあるが湖南藍山ヤオの儀礼文献を見渡してから、あらためて白鳥芳郎 (1975; 1982) のタイ北部ヤオ族文書を見直し、特にその『安塚墓書』の読み方を参考にしてみた。先学の成果として首肯できる

部分も多くあるが、再検討を要する部分もあるように思ったところである。湖南ヤオとタイ北部のヤオが同じ系統であることからして当然であるかもしれないが、文書のスタイルや内容、表現の共通性にも気付かされる。焼き畑で移動して行ったから、両地があればほど離れていても同質の文献を保持していて不思議はないのであろうが、驚嘆すべきことである。以上の詳細は今後の研究会で報告して行きたい。

今回の調査では、儀礼文書に関して言えば、実際に作成し使用された儀礼文書一つ一つが、調査に従事した人々の大変な努力によりデジタルカメラで鮮明に記録できたし、また文書を作成するときに宗教者が参照した儀礼文献も撮影が許され、記録できたことは意義深い。文書作成の根拠や実際の状況に合わせた文書内容の形成を解明するデータを整えることが可能になった。特にヤオ族の儀礼文献のような民間で流通する規範化の弱い文献（例えば同音異字、衍字、欠字、異体字の頻度が高い）であればこそ、同一内容の複数の異本を比較する作業が不可欠になるが、そうした面でも豊富なデータを得られたと思われる。これらは今後の研究の道を開く大きな基礎になると思う。これから多くの文献・文書の解読に努めて行きたい。最後に付言すれば、儀礼で使用される文字資料に対する深い理解は、当該儀礼を実際に見たことがあるかどうかに関わっている。見たこともない儀礼の文字資料は扱いが困難である。その意味で今回の調査で儀礼を見る機会を持てたことは、使用された文字資料の解読にとって極めて大きな意義を持つものと思う。



過勒床

注

- (1) 参考までに、張勁松・趙群（1996: 62-63）によると、1989年の度戒儀礼の翻刀山の後、盤金林という入門者が、冥界で二人の女性（母および父の妾）から引っ張られて刀梯に引っかかってしまい出られずに、しばらく覚醒せず、病院に運ばれた事例が示されている。この事例から類推するに、入門者は意識を失っている間、冥界にあって危険な試練を受け、かつ先に亡くなった先祖の間で怨恨などが生じていると、その子孫である入門者が冥界の試練を通過するのに困難が増すと想定されているようである。
- (2) ドイツ、ミュンヘンのバイエルン州立図書館東方写本部に所蔵するヤオ族写本の目録（Höllmann, Thomas, hrg. 2004）には、尤綿ヤオの写本を含むけれども、量的には荊門ヤオの写本が多い。目録中で今回の調査と関係するのは、例えば、Cod.sin.558 伝度道場、Cod.sin.966 無題、Cod.sin.1014 上船歌書伝度用などがある。なお本目録はまだ第1冊であり、その所蔵の全貌を知り得る全体の目録は出版されていない。

参考文献

- 白鳥芳郎（編）、1975、『傜人文書』、東京：講談社
- 白鳥芳郎、1982、「傜族の祖先墓修復儀礼とその祈祷書“安汝墓書”——傜族の宗教と中国民間道教の影響——」、白鳥芳郎、山田隆治（編）、『伝統宗教と民間信仰』、南山大学人類学研究所叢書I、名古屋：南山大学、43-82頁
- Lucia Obi 及 Shing Müller、詹春媚（訳）、2005、「瑶族之宗教文献：概述巴伐利亚州立図書館之館蔵瑶族手本」、『民俗曲芸』第150期、台北：財団法人施合鄭民俗文化基金会、227-279頁
- 張勁松・趙群、1996、「湖南省藍山縣匯源鄉瑶族度戒科儀」、『民俗曲芸』第100期、台北：財団法人施合鄭民俗文化基金会、53-122頁
- Höllmann, Thomas, hrg., 2004, Handschriften der Yao, Teil I, Stuttgart: Franz Steiner Verlag



翻刀山



過水槽

調査参加記

早稲田大学文学学術院教授
 ヤオ族文化研究所客員教授
 森 由利亜

今回の調査で、私は11月26日から12月1日にかけて調査地での活動を行った。儀式で使用する諸々の文字資料をデジタルカメラで撮影することが主たる役割である。書表師の作業を追跡して、彼らが制作する榜文や対聯、およびそれらの範例である文検類等の文書を撮影すると同時に、他の法師たちが所有する文書類をも機会を見つけて撮影することに努めた。私にとって実際の儀式執行に立ち会う時間は限られていたため、儀場で使用される科儀書類については必ずしも十分な撮影を行うことはできなかった。また、神画の類も十分な撮影はできなかった。

文字資料という対象の性質上、儀式所作のように刻々と変化する動的な様相を記録するわけではないので、変化の様相をいかに記録するかという問題は、調査地に入る以前には脳裏をよぎりさえしなかった。むしろ、文字資料の撮影に際しては、法師たちから資料を見せていただけるのだろうかという、対人関係的な方面に対する心配があり、資料を見る許諾を得られさえすればとりあえず全てカメラに収めればよいとしか考えていなかった。しかし、今回の現場では、同じひとつの榜文にしても、最初に地の文字が書かれ、しばらくするとそこに具体的な事情を反映する人名が書き入れられてゆき、またしばらくすると朱点が入られてゆく、といった具合に完成に段階がある。これらをその都度カメラに収めるべきか否かについては調査を始めるまで全く考慮の外にあり、結果として取材方法にはばらつきが生じてしまった。しかし、このような文書の生成に立ち会えたことは、私個人にとっては実に得難い経験となった。とりわけ、書表師が文書に点を入れてゆく作業は、大変面白く感じた次第である。

更に驚いたのは、文書の一部がワードプロセッサによって処理され印字されていたことである。機械化は農村儀礼の様相をどこまで変えてゆくのであろうか。複雑な思いで見た。

今回の調査を通じて、私自身は右往左往しているばかりで、実際には院生を含む周囲の研究者の方々から文字資料の所在を教えていただいて撮影することが専らであり、経験のなさ、技巧のつたなさを痛感する日々であった。皆様のご教導に深く感謝する次第である。

今後の抱負についてであるが、自分自身の研究してきた領域との兼ね合いから考えると、果たしてどの程度プロフェッショナルな貢献ができるのか、心許ないことばかりである。ただ、これもプロフェッショナルな仕事とは言い難いものではあるが、これまで中国西南部の儺戲儀礼について若干の取材を行った経験があり、それを通じて「道教」というよりはむしろ、時として「梅山教」とか「閻山教」とかという名称上のインデックスとともに水面下から浮上してくる何者かを意識せざるを得なくなってきた。近世南中国におけるシンクレティックな化け物に取り憑かれつつあるようなのである。そんなものからは逃げ出したいという臆病な気持ちもないではないのだが、しかしなんだかこの魅力に負けている気がする。



還四府懸儀礼

受戒と関門

—通過儀礼の宗教化における比較民俗研究—

神奈川大学経済学部教授 ヤオ族文化研究所研究員

佐野 賢治

今回の藍山県瑶族の度戒儀礼の中で何よりも印象に残ったのは、繰り返し行われた擬死再生儀礼における受戒者の蘇生の表情、また儀礼後半それぞれの関所、関門を通過することにより無事、法師になった安堵の表情であった。度戒儀礼を受け、法名を受けることにより、正式に一族の成員として認められるこのような儀式を実見して、今後の調査・研究の視角、方向性を以下のように考えてみた。大枠としては、それぞれの民族のこの種の儀礼における、成人儀礼、祖先崇拜、成立宗教（たとえば儒・仏・道教）との関係性を比較対照し、藍山県瑶族の度戒儀礼の特徴が見出せるかとの視角の提示である。

以前調査した、浙江省麗水地区のショ族の学師儀礼は、もともとは成人式であったと考えられるが、祖先祭祀の要素が加わると共に、道教的要素が浸透し、儀式自体はトーテム入社式の痕跡を残しながら、成人加入の試練、擬死再生の要素が関門の通過、服装の変化などに象徴化されていた。この儀礼を経ることによって学師として認められ一族の正式な成員としての承認、先祖とのつながりの確認を受け、社会的身分転換が実現する。つまり、社会的身分が宗教的身分の外的表現によって確認され転換することになる。藍山県瑶族の度戒儀礼と浙江省麗水地区ショ族の学師儀礼は、ともに道教的色彩が強いことが使われる経典などから判明し、道教の影響の歴史的過程が一つには問題となる。

同様に、チベットのボン教をベースに儒・仏・道教をはじめ自然崇拜、シャーマニズム、祖先崇拜などが混交した納西族の東巴儀礼の中の「加威霊」は類似した性格を示す。加威霊とは、納西語の漢語への直訳で、威力を加えるという意味であるが、華神を招き普通の東巴に法名を与え、神の威力、霊力を付与する儀式である。この儀式を受けたことのない東巴の弟子たちのためや、更に上位の東巴を目指す東巴を対象に、加威霊を受けたことのある東巴大師が、神座を設け、最も尊い白い綿羊を犠牲に捧げこの儀礼を執り行う。東巴は一族の先祖祭祀を行う司祭者であり、かつては、族長が大東巴であった痕跡もうかがえる。

日本の修験道においても臍次、峰入り修行の多いものほど臍次が高く、その験力も高いということに類似

する。修験道における十界修行と民間の成人登拝儀礼や民俗芸能における擬死再生観念との相関関係も比較民俗学的視点から見れば新たな意味合いが看取される。

藍山県瑶族の度戒儀礼を、①成人加入の試練、②先祖との一体化、③道教民俗の視点から検討し、比較民俗学の俎上で取り上げてみたい。



辣椒湯と漢語の禁忌

神奈川大学経営学部准教授
 ヤオ族文化研究所研究員
 泉水 英計

「プートンファ！」と叫んだのは趙仁古さんである。今年一度戒を受けた第五会首である。非難の姿勢を作っているが、口元からは、次の瞬間に笑いが零れるのが明らかであった。まっすぐ伸ばした人差し指の先には背中を丸めて座った盤天福さんがいた。度戒では鼓楽師を務める。目線は卓を行き来し、狼狽の仕草であったが、やはりその口元には笑いが見えた。二人と一緒に卓を囲んで、先ほどまで鉦を叩いたり笛を吹いたりしていた数名がどっと笑い、ひとりが外から白い丼を持ってきた。羽交い締めにされた天福さんはそれを口元に押しつけられた。好々爺然として常に笑顔を保つやさない彼の眉間に一瞬、皺が寄った。中身は、刻んだ唐辛子を目一杯入れた液体であった。湖南省料理の辛さは有名であるにしても、それは飲料ではなく、罰として与えられる謂わば毒であった。

「プートンファ」とは言うまでもなく「普通話」で、つまり中国語という意味である。ミエンという民族語をもつヤオの人々ではあるが、学校や仕事では中国語を使うバイリンガルである。しかし、道教儀礼の期間中は主祭壇の間では必ずミエン語を使わなければならないとされている。だから、ミエン語が話せない者は一々外に出て話をしなければならない。もちろん、違反者へ中国語で注意を与えることもできないから、調査隊同士で日本語を使っていると、立てた人差し指を唇にあてて首を振られることも幾度かあった。規則遵守の方策が「儀式場内講漢語者、請君自飲辣椒湯三碗」という罰則である。これを書いた張り紙が入り口脇にあって、小さな棚の上には白い丼に入った真っ赤な唐辛子汁が三つ載せてあった。天福さんを苦しめたのはこれである。

罰則は厳密に適用されているわけではない。食後のひととき俄に盛り上がった遊びの末の天福さんの悲劇であった。彼らは互いに問いかけては相手に中国語で答えさせようとしていた。ミエン語を解さない私は推測するしかないのだが、うっかり中国語で答えてしまいそうな質問をあれこれ考えて興に入っていたようである。誰かの答えが中国語なのかどうかで言い争いになっていることもあったから、多分この推測に間違いはないと思う。

タイ国に移住したヤオについては竹村卓二氏や吉野晃氏が蓄積した業績があるが、そのなかで社会人類学の視点が精彩を放つのが民族アイデンティティの分析であろう。華南少数民族のなかで漢族と最も近接し長い交流の歴史をもったのがヤオである。その結果、漢字、命名法、道教といった漢族高文化の影響を強く受け、表面的に最も漢化が進んだ人々である。けれども、文化要素上の類似が集団意識の親近性を導いたわけではない。むしろ、例えば道教の加入礼といった漢族起源の習俗がヤオの成員権を定義するという逆説的な現象がみられるというのである。

「儀式場内講漢語者、請君自飲辣椒湯三碗」というのは奇妙な規則である。外来文化の際だつ空間でその起源と不可分な言語の使用が忌避されるというのは、喩えて言えば、東京ディズニーランドで片仮名言語を使ってはならないというようなものである。今年一度戒では書表師として活躍した馮栄軍さんの自宅で還家願儀礼を見学したときにも同様の張り紙を見た。この禁忌は一体どれくらいの範囲に普及しているのだろうか。また、この禁忌は歴史的にどれくらい込れるのだろうか。ヤオに道教を伝えたのが漢人であることは間違いないであろうが、なぜ彼らの言葉が禁忌の対象となったのであろうか。追求してみたいテーマの一つである。



羽交い締めに飲まされてる天福さん

初めての儀礼・文書・コミュニティ

神奈川大学経営学部助教
 ヤオ族文化研究所研究員
 高城 玲

私はこれまで主に東南アジア、タイの人類学的研究に携わってきた。タイ中部の農村社会コミュニティにおける人々の微視的な相互行為に着目し、様々な場の行為を通じて社会やコミュニティが形作られていく過程を記述・分析することを主な仕事としてきた。そこでは、上座部仏教や精霊信仰という宗教的な儀礼の場の行為も取り上げているが、どちらかという宗教的側面以外の日常的な場の分析が主であった。

そうした私のこれまでの研究からすると、今回の中国湖南省におけるヤオ族度戒儀礼の調査は、まさに初めてづくしの経験である。ヤオ族の村を訪れることが初めてである以前に、中国という国に本格的に足を踏み入れること自体が初めての経験であった。そうした私が今回、ヤオ族のコミュニティを訪問できたことは幸運としか言いようがない。現地に居住していても滅多に遭遇できない度戒儀礼とそこで多量に使われていた儀礼文書に接することができたのは、非常に貴重な機会だったと感謝している。

中国語の素養もなく、現地コミュニティに足を踏み入れるのも初めてで、ヤオ族の儀礼や文書に接することもなかった言わば門外漢とも言える私にとって、全てが初めてづくしだったが故に、今回の調査は非常に印象的であったとも言える。

雑駁な印象ではあるが、コミュニティでの儀礼に限定して言えば、膨大な時間と労力をかけて、あれほどまでに大がかりで盛大な儀礼が、現在においても行われていること自体にまずは強い印象を受けた。

また、儀礼で使われる文字や文書の過剰とも言えるほどの氾濫は、東南アジア、タイ平地での調査経験からすると驚き以外の何ものでもなかった。もちろん、タイの上座部仏教コミュニティにおいても仏教経典という文書は存在する。しかし、それは文字や文書自体が重視されると言うより、むしろ口頭で経典を詠唱するための素材に過ぎないという印象が強い。だからこそ僧侶個人の声の良さや節回しの巧みさが在家信者の間でもてはやされ、文書そのものにはそれほど注意が払われない。

それに対して、中国ヤオ族の儀礼文書は、比喩的に言えば、文書でもって世界と対峙しているかのような

圧倒的な文字の力が感じられた。文書を核とする儀礼が遂行されることによって、まさにヤオ族のコミュニティが再構築され、維持されていくような、強力な文字文書の力が強く印象に残っている。

では、そのような儀礼と文書をどのように捉えていけば良いのだろうか。残念ながら、初めてづくしの私は、言語などの分析手段を十分に持ち合わせていないので、ここでは、現時点で考えられる簡単な方向性のみを示しておきたい。

それは、確かに盛大な儀礼であり、膨大な数の文書ではあるが、儀礼や文書そのものを対象とするのみならず、それらを社会やコミュニティとの関係性の中に捉えるという研究の方向性である。つまり、儀礼や文書そのものの解釈のみで分析を完結するのではなく、文書を介した儀礼という人々が凝集する場とコミュニティとの関連にも着目する方向性と言い換えることもできる。

今回の儀礼の場は、儀礼執行者や受礼者のみならず、コミュニティ内外の観衆も介在し、村外の行政役職者から我々国外の研究者までもが参加する社会にひらかれた場所でもあった。圧倒的な文書を核としながらも、そうした重層的で多様な存在と力がせめぎ合う社会的な行為の場所としてこの儀礼のコミュニティを捉える方法を模索できたらと考えている。



藍山ヤオ族度戒儀礼調査归来

神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科特任教授
ヤオ族文化研究所研究員
蔡 文高

中国の数多くの少数民族の中、私は前から祖先起源神話が非常に似ているショウ族とヤオ族の民族文化に関心を持っていました。主に福建省東北部と浙江省南部の山間部に居住しているショウ族の場合には、私の主な調査対象の客家と深い因縁を持ち、その習俗や言語など客家と似ているところがたくさんあるといわれているからです。いっぽう、ヤオ族の場合には、費孝通と夫人の1930年代の広西ヤオ族に関する調査報告を読んでヤオ族文化の神秘性に惹かれて、さらに「紅頭ヤオ」や「藍靛ヤオ」、「過山ヤオ」などの名称を見てわかるように、その支群が多く、しかもベトナムやタイなど東南アジアの国々にも居住しているので、その民族文化の豊かさを想像したからです。しかし、この関心は、ただ「持っている」段階に留まり、今まで彼らが生活している地域に訪ねたこともないし、深く勉強したこともありませんでした。今回廣田先生をはじめ、諸先生方のお蔭で、長年の悲願を実現し、やっとヤオ族地域に訪ねるチャンスを得ました。ここで、皆様にお礼を申し上げたいと思います。

今回の調査で見た度戒儀礼は、内容的でも調査の方法でも私に大きな刺激を与えました。今まで私の中国における本格的な調査はほとんど漢族地域であり、調査中に様々な祭祀儀礼を見たことがありますが、儀礼の期間がこれだけ長く、しかも複雑な儀礼を高度にシステム化している度戒儀礼のようなものを見ることは今回初めてでした。とくに到着当日の夜に見た「過水槽」という擬死儀礼（勝手にですが、私はこう呼びたい）は、私にいろいろと考えさせ、とても印象的でした。度戒を受ける者は、儀礼期間中様々な試練を乗り越えなければならないが、一度「死」して「換骨奪胎」して甦って次のステージへ向かうというこの擬死儀礼は、何て素晴らしいものだろうと思っています。

自分の今までの調査は、ほとんど「一匹狼」の行動のようなもので、一人の視点で見るとはできません。たまに3、4人くらいの「集団」でやっても、やはり別々に行動しそれぞれ個人の視点で見えています。この方法では儀礼（または事象）の全貌を把握することはほとんどできません。今回の調査には、周到に準備した集団での調査による、儀礼の過程を様々な角度からほぼ

漏れなく記録し、映像資料を細かく分析しその結果をもとにして補足調査を行なっていくという方法を採用しているが、これは今後自分の研究調査にも大いに活用できるものだと思います。

度戒儀礼は、ヤオ族であれば、儀礼の細部には地域差があるものの、どの支群でも行なわれているものです。これに関する報告も数多くありますが、これらの報告は、だいたいの場合、ヤオ族の男性が儀礼中でのいろいろな試練を受けて宗教的な「資格」を得て「一人前」の男になっていくというような、つまりこれがヤオ族的、道教的な通過儀礼だとして紹介されています。しかし、実際に現場で儀礼を観察してみると、確かに今まで指摘されている傾向が強く現われていますが、いっぽうでは、儀礼の中では「家先壇」が主祭場に設置されて様々な神と一緒に並んで祭られ、子孫や兄弟が生前に度戒を受けていない「家先」（亡霊）を「一人前」の祖先に祭り上げるためにその度戒も代わりに行っているなど、祖先祭祀に関連する要素も多く見られます。このため、私は今後「度戒儀礼にみるヤオ族の祖先崇拜」というテーマで調査していきたいです。具体的には、今回の度戒儀礼にあった「家先壇」の詳細と「陰度」をした人・家に聞き取り調査を行ない、度戒儀礼以外の祖先祭祀の様子やこれに関連する親族組織なども明らかにしたいと思っています。



上刀山

ヤオ族度戒儀礼調査に参加して

神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士後期課程

ヤオ族文化研究所研究協力者

佐川 潤子

今回ヤオ族の度戒儀礼調査に参加したことは、韓国の民俗芸能を扱う私にとって、中国の民俗芸能に触れる良い機会となった。調査に参加するに当たって、中国語の文献を翻訳したが、中国語の知識が乏しいため、わかりやすい日本語文を作ることにたいへん苦勞した。しかし、これも調査のために必要な作業であり、よい経験であった。

韓国であれ中国であれ、対象とする芸能に関する文献を事前に読み、理解しておくことは調査の基本である。私の韓国での調査には、この事前作業が欠けており、調査とは言い難いものであった。そのため私にとっては、自分の調査方法を見直し、学び直す機会ともなったのである。このような機会を与えてくださった先生方には、心から感謝している。

今後の課題は、この体験をどのように処理していくかということである。当初は専門が韓国の「農楽」という芸能であるため、無理矢理農楽との共通点を見出して、自分の研究につなげようとしていた。そのため自分自身の中に、何をどのように扱うのか混乱が生じた。それは帰国してからもしばらく続いていたため、一度農楽と切り離して、ヤオ族の度戒儀礼に対する理解をもっと深めようと考え方を変えた。度戒儀礼自体を理解する過程で、農楽との共通点を見つければよいと考えるようになったのである。

また、度戒儀礼の中で、何か一つに焦点を当てて考えることも大切である。あまりにも大規模な儀礼であるが故に、全体を把握することは難しい。そのためには焦点を絞るということが必要となる。現在のところ私自身が韓国の楽器を練習していることもあり、楽器や儀礼音楽に焦点を絞り、そこから度戒儀礼を見ていこうと考えている。

楽器は民俗芸能には必要不可欠なものであり、儀礼音楽によって演技者たちは日常を離れ、自分ではない“モノ”へと変わっていく。度戒儀礼を見て、このように感じるものが幾度かあった。農楽においても同様であると思う。農楽の中で楽器がどのような役割を果たしているのか、また音楽によって農楽隊のメンバー達はどのような精神状態になっていくのか。度戒儀礼における楽器や音楽の役割を考えることで、農楽の中で

のそれらの役割について理解していくことが可能であろう。

今回の調査を単なる物見遊山で終わらせることなく、諸先生方のお知恵をお借りしながら、まずは楽器と儀礼音楽から度戒儀礼を分析し、自分の研究につなげていきたい。



掛三燈儀礼

今回の調査感想について

神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士後期課程
 ヤオ族文化研究所研究協力者
 李 利

今回のヤオ族度戒儀礼のフィールドワークは、調査の対象や調査方法など、私としては初めて経験するものが多くありました。今回の調査を通して先生方からフィールドワークの態度や手法を大いに学ばせていただき、その魅力もたっぷり感じました。特に、儀礼文書や映像資料、音声資料を採集しデータベース化する作業がたいへん重要かつ有効な研究資料の収集手段であることを改めてつくづく感じました。

私の今まで行っていた調査は聞き取り中心のもので、特に今回のような長期間にわたる大型の儀礼の調査を行なったことがありませんでした。そのため最初のころは、自分はどう動けばいいか、どういうタイミングで何を撮るべきかも分かりませんでした。廣田先生や吉野先生などの先生方の指導のお蔭で、だんだん慣れてきて、後半ころには自ら考えて、より積極的に行動できるようになりました。これは、今後自分の研究テーマのフィールドワークにも活かすことができる経験になったと思っています。

恥ずかしながら、中国出身の私のはじめてヤオ族の歴史や文化に出会ったのは今年の5月、調査準備のためにヤオ族文化勉強会で使う基礎資料の張先生の著作『藍山県瑤族伝統文化田野調査』を翻訳した時です。それまではヤオ族に関する知識は皆無に等しい状態でした。翻訳の時には理解できていない内容も少なくありませんでしたが、現地に来て、いろいろ見て、聞いて、ヤオ族の文化や歴史、食べ物、人のあたたかさなどを感ずることができ、今まで分からなかったことも漸く少しずつ分かるようになりました。今回の調査を機にこれからはもっとヤオ族のことを勉強しなければならないと思います。

今回の調査で得た貴重な経験は自分の将来の研究調査にもたいへん大きな糧になると確信しています。ここで改めて、関係者の方々に感謝を申し上げます。

今回の度戒儀礼に用いた供物には、食べ物や飲み物、線香、紙銭など様々なものがありました。なかでも食べ物が一番多く見られました。これからは、祭祀儀礼に用いる食べ物（供物）また儀礼食が普段食とどのような関係をもつか、どういう基準で供えられるものと供えられないものを使い分けているのか、さらに自

分の研究テーマである「医食同源」の考えをヤオ族の人々も持っているか、どういう風実践されているか、などを調査していきたいと思います。



匯源郷瑶族の度戒儀礼と問題点

國學院大學大学院文学研究科博士後期課程

ヤオ族文化研究所研究協力者

広川 英一郎

・瑶族文化へどう接近するか

2008年11月末から中国湖南省藍山県匯源郷において行われた瑶族の度戒儀礼の記録調査においては、様々な衝撃を受けた。初めて日本国外の文化事象を調査・研究する機会を与えられた喜びとともに困惑も大きい。私がこれまで学んで実践してきたような、同一基層の文化の上に成り立つと仮定された日本の民俗事象を比較対照する手法で理解しようとするには、瑶族の道教的な儀礼についての私の知識は乏しい。加えて現地においても参加の先生方からは、今回の度戒儀礼は道教儀礼の中の一つとして、あるいは瑶族文化の一環として考えるべきではなく、あくまで「匯源郷瑶族の一儀礼」として遇さなければ本質をみうしなってしまうだろう、という議論が盛んになされていた。

瑶族の度戒儀礼を類似の事象から把握するのは難しい。一つ一つの儀礼の、現地における意味を明らかにしなくてはならない、という事は研究所の内でも繰り返し確認されている。ましてや日本の事例に引きつけて何かを論じるには相応の手続きを慎重に踏まなければならないが、ここでは儀礼を現地で通観した上での個人的な感想として、来歴不明とされている日本の儀礼との類似性を確認してみたい。

・土中の厄災

今回の儀礼では、12月8日の「開齋」に続いて、衆位家先堂の下で主醮師が唱え事を行いながら剣で紙銭を丸めた塊を土の中から取りだしていた。「開禁壇」に相当する儀礼であると考えられるが、残念ながら今回の調査メンバーは「落禁壇」の儀礼を直接確認できていない。ただ、家先堂の下の地面に「禁壇」を設けた埋め跡が最初に確認されたのは12月2日の午前9時頃であり、前日12月1日の深夜から日付をまたいで午前4時頃まで行われた儀礼の終了後から早朝にかけての時間帯に行われたものと推測される。とすれば、禁壇は7日間の間設けられていたことになる。

張勁松氏によれば禁壇は邪悪な祖師の霊や悪鬼を封じ込める儀礼であり、これを行う際に誤って生者の魂魄まで封じてしまう事を避ける為には（特に瑶族以外には）見せないものであるという。「開禁壇」にお

いては唱え事をしながら「紙捻」を一つ一つほどこき、最後には焼いていた。度戒を終え、これらの邪師悪鬼を再び解放しているということになるだろうか。



家先堂下の「埋め跡」(12/2撮影)

表面上、類似しているように見えるのが、儀礼の由来・歴史等の多くの部分が不明である愛知県稲沢市の国府宮神社で旧暦の正月14日に行われる夜儼追神事だろう。選ばれた神男が背負って走り、途中で神職の祝詞とともに土中に埋められる「土餅」には、現在では国中の厄災が搗き込まれているとされる。神男の背負う土餅に拝観者から投げつけられる「つぶて」は柳と桃の枝を紙に包んで捻ったものであり、これを掃き集めて焼いた灰が次年度の土餅に搗き込まれていると考えられている。(註)

災いを餅で包んでいる点について、紙銭と同じく供物としての性格が共通していると言えるが、神男の存在をはじめとして、儀礼の構造そのものはまるで違っている事は念頭におかなければならない。しかし、災いを土中に封じるという考えと、その為に踏まれる手続きという視点から、何か度戒儀礼の「禁壇」には示唆を与えてくれそうな可能性を感じることができる。

(註) 茂木栄『「国府宮裸まつり」構成の持続と変化』1991年 日本文化研究所刊

儀礼の映像と今後の課題

神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士後期課程
 ヤオ族文化研究所研究協力者
 三村 宜敬

今回の度戒儀礼調査は張勁松先生が執筆された度戒儀礼の翻訳から始まった。中国語やヤオ族に関してほとんど知識もなかったが、廣田先生の指導の下翻訳を進めていく内に文章から儀礼を思い描くだけでなく、この目で儀礼を見て、映像に残したいという思いが強くなった。

度戒儀礼に関する映像は、儀礼の準備段階から撮影が可能であったという事が貴重であると思う。杉と竹で建てられた醮壇が参加者の手によって完成され、一連の儀礼を経て、最終的にはその聯、榜や花楼の装飾を燃やしてしまうという情景には、えも言われぬ寂しさがそこにはあった。

この儀礼の準備段階ですら、私たちはビデオ片手に走り回っていた。気がつけばどこかで何らかの準備を行っている、という事がしばしばあったためである。醮壇内右側の部屋では、書表師が儀礼に使う文書を書き、その向かい側では紙縁師が紙馬を延々と作っている。醮壇から離れた場所では手分けをして雲台を建てていたりもした。いつ何が始まるともわからない状況で、些細な事にもビデオを向けていた事は、現在の段階で改めて貴重であったと思う。ビデオのデータ量は相当なもので、度戒の準備や一連の儀礼を始め、豆腐作りなども記録されている。

中でも興味深かったのは、泣いている赤ん坊の額へ呪を書きマジナイを行っているというものである。これは度戒儀礼とは直接関係がないかもしれないが、このマジナイが何のために行われているのか、日常的に行われているものであるのか是非明らかにしたい。

また私が儀礼の中で印象深かったのは、「捧火砖」儀礼に見られる娯楽とも言える内容である。「捧火砖」儀礼では、赤く焼いた鋤先や石を主醮師や会首は笑いながら持って走り回っていた。このような宗教者の力を示すパフォーマンスとも言えるものは、刀の梯子登りを行う「上刀梯」もこの同系統にあたると思われるが、「捧火砖」はその内容から想像されるほど緊迫しておらず、仰々しくない印象がある。

「捧火砖」はまず、主醮師が桶に水を入れたものに唱えごとをしながら剣で呪を書き勅変させ、塩を入れる。そしてこの塩水に手を浸けてから赤く焼けた鋤先を持

ち、花楼の周りを走り回る。この主醮師の動作を会首はまねるのだが、皆嬉々として行い、まるで、この危険な行為を楽しむかのようなのであった。儀礼の内容からは「娯楽」と位置づけられそうにないものであるが、実際に行われている様子は娯楽としか言いようがないものであった。私は度戒儀礼の中で「娯楽」として位置づけられる儀礼について分析できないかと考えている。

現在撮影した映像は、儀礼ごとに分けられるという段階にきている。この作業が困難を極めるのは師父たちが同時に別の儀礼を行っているという状況が多いという事である。「時間短縮のため」という理由からこのような状況でしばしば儀礼の同時進行は行われた。当初考えがたい状況であったが、それは醮壇内だけに留まる事はなく、外でも行われた。

この複雑な状況の度戒儀礼をわかり易く伝えるためには、映像と文章による儀礼の解説が非常に良いものであると思う。今後映像の編集に関しても課題としていきたい。

末尾ではあるが、この度戒儀礼調査にご尽力された団長の廣田律子先生、現地との調整や交渉を行って下さった張勁松先生、調査団の諸先生方に改めて御礼申し上げたい。本当に素晴らしい調査にご同行させていただきました。



写真：捧火砖

度戒儀礼に見出せる演劇性

神奈川大学経営学部教授
ヤオ族文化研究所所長
廣田 律子

今回の度戒儀礼の送船を除く全行程を参観することができ、当初の計画を実現することができた。一連のヤオの祭祀儀礼を実際に見ることができ、文化的学術的価値の高さにあらためて驚き、感心している。これも準備段階からずっとご尽力下さった研究所客員教授の張勁松先生、藍山県の政府の方々、法師や会首等直接儀礼に携わった方々をはじめとする中国側の全ての協力者のご支援の賜物と感謝している。

歴史学・文化人類学・民俗学・宗教学等各方面の専門家が参加している今回の調査に関しては多方面の考察が可能だが、筆者としては度戒儀礼の中に見出せる演劇性に注目してみたい。宗教者としての資格を得させる「掛三燈」において、宗教者は受礼者に対してドラの敲き方や牛角の吹き方や法具の鈴の鳴らし方やマジカルなステップの罡歩の踏み方や舞等を手取り足取り教え、宗教者としての法術の伝授を行なう。更に受礼者の階位を上げる「掛十二燈」において、宗教者は受礼者に高度な儀礼とされる開天門の作法を伝授する。

この宗教者から受礼者への法術の伝授に於いて行なわれる真似るという行為、学修して再現するという行為がまさに芸能的要素の萌芽といえるのではないかと考える。演劇化へと進展がはかれる為には、更に繰り返し演じられ、その観賞性を増す必要がある。現に度戒儀礼の中では、度々宗教者達によって、角笛が吹かれ、鈴が鳴らされ、罡歩が踏まれ、法具をとって舞いが舞われる。

掛燈儀礼に見られる法術の伝授、模倣と再現は、芸能の発生を示唆しており大変に興味深い。宗教者の所作を真似ることは宗教者としての能力を獲得することを意味し、神との種々な通信手段を得ることになる。この真似ること自体祭祀性の強い段階の芸能における重要な表現方法といえる。

掛燈儀礼の他に、受礼者が経なければならないとされる試練においても、宗教者が手本を見せた上、同様のことを受礼者が真似て行なう。もちろんこの試練は象徴的には生まれ変わりの意味を含んでいる内容といえるが、翻刀山・過水槽・過勒床・上刀山・棒火磚等の試練を行なうにあたり、まず宗教者の主醮師や引度師がトライし、受礼者はそれに続いて行なう。宗教者

は自ら実践することで指導を行ない、受礼者はそれを模倣して行なうことで、宗教者としての能力を獲得する為に必要とされる経験を経ることになり、また宗教者に加わることになる。宗教者の継承において、同じ経験をする事は不可欠であり、先達の真似をすることから始まるといえる。

儀礼の中には、宗教者の模倣だけではなく、演じる要素も見出すことができる。例えば、鋪床引睡では、受礼者が布団に入り、あたりを真っ暗にし、いびきをかいて寝ている演技をし、ソーナが鶏の鳴き真似をし朝を告げると、皆起き出す。日常から非日常の儀礼の空間と時間へと移動したことを表わすと考えられるが、きわめて直接的現実的な演出といえる。

また無事に試練を経た受礼者は職位を授与されたことを公表するパレードを行なうが、その途中で道ふさぎがあり、職位がチェックされ問答が行なわれる。実際行なわれていた高官の道行きと関所でのやりとりが彷彿とさせられる場面であった。こうした現実が反映された演出からも度戒儀礼の中に演劇的な要素を見出すことができる。

「還四府愿」において、財を表わす笹葉をもった宗教者と主醮師が戸口を挟んで外と内で問答をする場面は、神に対して紙銭を届ける見返りとして財がもたらされることを意味し、大変に興味深いやりとりといえる。このような問答等の台詞も詳細に分析する必要を感じている。

さらに宗教者は文献の読誦の際にふしを付け歌うが、この詞章は、七言で二句上下句を1つの単位として構成されており、詩讚系の様式を取っている。神と交信する時には、七言の調子が用いられることは、現在他の地域で伝承されている儺戯に登場する神々の歌や宝巻の流れを汲む鼓詞等にも見出すことができる。詩讚系七言の詞章が芸能のプリミティブな様式であることをあらためて確認することができた。

今回度戒儀礼の中に芸能の発生に繋がる要素がきわめて多く存在することが確かめられた。今後、祭祀儀礼と芸能の関係に関わる視座から考察を進めたい。最終的にはヤオ族の祭祀儀礼を通して東アジアの芸能の特徴を明らかにする試みができれば幸いである。

張 勁松著『藍山県瑶族伝統文化田野調査』
 「第四章 度戒」
 岳麓書社出版 pp.131 ~ 254 翻訳

訳指導

丸山 宏

訳・校正

佐川 潤子

広川 英一郎

三村 宜敬

李 利



一、儀式の基本資料

1. 度戒の歴史を遡る

私たちは匯源郷瑶族で広く度戒儀礼の經典の写本を求めたが、最古の写本で清の咸豊六年すなわち 1856 年（經書部分発見）のものを発見した。瑶族宗教研究の専門家張有隽教授の説は、過山瑶は道教の信仰を主とする。調査中に盤氏族譜を発見した。記録によれば、彼らがかつて福建から広東に移り、それから広西に移り、その後ベトナムに入り再び十万大山に戻り、現在に至るまですでに 21 代を経ているとある。

三代を除き、全て法名をもっている。もしそれぞれの代を 25 年と計算するならば約 400 年あまり経っている。これにより彼らたちは古くは 400 年前の明朝中葉の頃から道教の影響を受けたと考えられる。

フランスの Jacques Lemoine 教授の説では、“瑶族の道教は本世紀に到るまで六朝時代（222～589 年）の漢民族の道教で行われていた集団的度戒の伝統を保持している”とある。調査の状況と専門家の意見によれば、道教は過山瑶に伝播してすでに大変長い歴史があり、過山瑶に早期の伝統が今なお保持されている。

つまり私たちは道教史の生きた化石を研究しているのである。ただし、具体的な伝播の時期については調査と研究が待たれる。

2. 度戒の主要機能

匯源郷瑶族の度戒は、農曆の 10 月以降に行われる。儀式は始めから終わりまで半月を要する。この宗教的機能について現地の巫師を訪ねて話し合った時に、単一のものではなく、多重的なものであるとわかった。

（1）成年儀礼に似た機能：以前は当地の習俗的規制に基づき、どの代も青年たちは必ず全員が度戒をしなければならず、ある一家で 3 代にわたって度戒をしなければ、先祖たちが子孫を認めることもなく、また子孫を加護することもなく、一族断絶の危機におちいる可能性もあった。度戒を受けた青年は、一族の中で正式な成人男子として認められ、結婚して独立することができ、社会活動に参加する権利を他人からも認められたのである。度戒をしていない男は、結婚し、子供を育てることはできたが、還暦の年になっても、一族の成人として数えられることはなかった。

以前は度戒をうけてない未成年者は村の長の選挙等の重要な社会活動に参加できず、さらに村のおもだつての任につけなかった。度戒をせず法名を持っていなければ、将来子孫から年長者として認められず祀られなかった。それゆえ 1950 年代以前は、匯源郷瑶族の大多数が度戒をした。家庭経済は困惑していても、いろいろと手を尽くし度戒の資金を得ようとした。

実際には度戒のために資金をだせない者は少数で、本人の後の世代の人がこのような人のために後から補ってやってあげることができる。例としては馮榮軍の父親は度戒をしていなかった、馮榮軍が 1989 年に度戒した時に、父親の分も補って度戒が行われた。

今日度戒の成年儀礼としての機能は依然存在する。しかしすでに儀礼は廃れており、度戒者が一般に家庭の経済状況が比較的良い者に限っていることにもあらわれている。

現在匯源村の 1400 人あまりの瑶族の中で、度戒を終えたのは 26 人だけであり、若者の度戒に対する意識は希薄である。1989 年の度戒では、50 歳以上の老人が多くを占め、あわせて 11 人いた。これは度戒を

行った者の73パーセントを占めて、最年少者ですら29歳だった。

(2) 生前に陰護を受け、死後仙官となることを度戒の信徒は皆認識している。度戒によって太上老君の印と三清に管理される最高級の陰兵を得ることができ、太上老君印と陰兵を得てはじめて、ただの人ではなくなる。陰兵は鬼を追い払うことができる。山上には鬼が多いため、度戒後、昼に出かけ、晩には山に入り、鬼に出くわしても、すぐに兵馬で打ち払える。兵馬によって僻邪をし、家人の平安が保て、五穀は豊かで、六畜は盛んに増える。度戒者は、自分の死後天にのぼり官人となれるとも信じており、度戒した際すでに太上老君の認可した封職を得ているので、生きていうちに死後天官になれる一切の手続きが終わっていることになる。

生前に度戒を行ってからはじめて、死後先祖としての神格に上がることができ、祭祀を受けられると考えられている。もし度戒をしなければ、死後ただ野鬼となり陽州（死者信仰での冥府）へ行くしかない。この地域の習俗規制によれば、度戒者は死後4人の宗教者に法事を要請し、死者の亡霊を超度して昇天させる（もっとも資財のない人は法事ができないため、夜間になるとすぐに死体を密かに埋葬する）。超度儀式の中で度戒の陽牒と太上老君の印を棺内に入れ、棺の封をし、宗教者は天門を開ける。これによりこの度戒者がこの世から送られ、牒文書と印を持って天にのぼり官になり、神仙の生活をおくとされる。要するに度戒を受けた人はただの人ではなく、一族の人々が目を見張らざるを得ず、生きていう間にいっそうの尊重を受け、“天に帰る”のも盛大に行われ、生きていう時も死ぬ時も特別扱いされる。

(3) 師となる儀礼：地元の宗教者は度戒が必須でありそれを経て、はじめて最高の等級になれ、独自に大きな法事のできる宗教者となる。それでなければ何年宗教者をして、どんなに歳をとっても、正式な宗教者として認められない。例えば、ある宗教者は財力が足りなく、度戒儀礼が行えなかったため、彼が大きな法事をするならば、必ず度戒した人をここに招請し、行ってもらうことで天の門があげられる。

匯源の度戒は一人前の師となる機能があるので、度戒はかつて“抛牌”といわれた。これは、現在の湖南の漢族で宗教者の一人前の師となる儀礼を抛牌と称するのと同じだ。この漢族の儀礼と違うところは、漢族の儀礼の重点は師匠が弟子に鬼神を駆る神器や法術を伝授する他に、儺戯を演技することで、宗教的な宗教者の行為が十分突出したものであるとされる。匯源瑶族村の宗教者の儀式では様々な機能が重層し分離することができない。そこに原初性が明らかに示されている。

匯源瑶族では当地の社会で認められる宗教者であるには度戒が必須であるが、度戒者は必ずしも宗教者にならなくてもよい。1989年の度戒者名簿を下の表に示す。

表 1

姓名	法号(名)	学歴	年齢	居住地(住所)
趙 天貴	法官	初等小学校三年	60	藍山県匯源郷黄竹埂村
馮 富金	法銀	私塾二年	57	藍山県匯源郷大団源村
馮 富貴	法安	私塾二年	54	藍山県匯源郷大団源村
趙 天龍	法都	私塾二年	69	藍山県匯源郷黄竹埂村
盤 根癸	法聖	高等小学校	29	寧遠県九嶷山郷

馮 求古	法天	中等専門学校	42	藍山県匯源郷鄧脚嶺村
趙 子華	法琳	私塾二年	56	藍山県匯源郷黄竹埂村
趙 子成	法喜	私塾二年	52	藍山県匯源郷黄竹埂村
馮 栄飛	法湘	私塾三年	52	藍山県匯源郷沖口村
馮 栄軍	法龍	大学	38	藍山県匯源郷鄧脚嶺村
馮 賤仔	法香	中学校	31	藍山県匯源郷沖口村
馮 二保	法添	私塾二年	54	寧遠県九嶷山郷天鷲壩
趙 興貴	法升	私塾二年	65	藍山県所城鎮高良頭村
盤 金林	法林	私塾二年	62	寧遠県九嶷山郷黒沖
盤 紅保	法延	私塾二年	62	寧遠県九嶷山郷新屋地

(訳：三村 宜敬)

3. 度戒の中断と回復

1957年以前、匯源郷瑶族の宗教活動は、民間での伝統的なやり方によって行われた。1957年、政府は迷信を排除する政策を提出し、同年9月17日から19日まで開かれた第8次民族代表大会の中で、度戒儀礼と還盤王願を迷信活動のリストに入れる方針を出した。1966年から76年の文化大革命の間、政府は命令によって一切の宗教活動を禁止した。これによって1957年から81年に至るまで、匯源郷瑶族は宗教活動のすべてを停止させられた。ただし宗教者を呼んで読経し酬神するというような、小規模な民間信仰活動はひそかに行われたが、銅鑼を打ったり、太鼓を敲くというような人を騒がせるようなことはなかった。1979年以後は、宗教政策が実行されたが、回復当初は民間でのひそかな活動によって、民間信仰は回復へと向かった。1982年匯源郷瑶族は、中断以後第1回目となる度戒儀礼を行い、開催者は見張りを立てながら行った。1989年に行われた第2回度戒儀礼の際には、民衆の心にはまだ不安が残っていた。現在匯源郷瑶族は宗教活動をすべて回復し、しかも伝統的やり方によって行われている。しかし経済の急速な発展と現代文化の発展で、若い世代の宗教意識の変化や民間信仰の希薄化がおこった。例えば、以前からの習俗では度戒を受ける会首は若者が中心であったが、1989年の度戒儀礼での最年少の「会首」は29歳で、ほとんどは老人であった。

(訳：佐川 潤子)

4. 壇班伝承

(1) 祖壇

匯源郷瑶族の度戒儀礼における壇班については、清代の經典の写本によると正一、闕山、梅山等の教派を祖壇としている。有る書には“太上正一鳴揚伝度加職保安清醮”とあり、またある書には“太上奉行正一先天闕梅諸司府駈邪院三戒弟子”とあり、またある書には“太上奉行北極駈邪院川通闕梅二教三戒法師”等の言葉が見られる。民国年間の写本には“叩誠巫教久奉”等の言葉が見られる。度戒儀礼のテキストにも匯源郷瑶族の度戒の祖壇本宗の内容が単一でない事が見て取れる。これはおそらく過山瑶族の度戒儀礼の実況と符合している。

瑶族は歴史的に頻繁に移動を繰り返していた流動民族であり、彼らの移動範囲は北から南まで、中国の大半に及んでいる。彼らは一つの土地に移るごとにその周辺の文化を吸収し、その中には自然と正一派の道教や、閩山系、梅山系の支派もあったのであろう。これはおそらく、匯源瑶族の度戒儀礼のテキストに正一及び閩・梅二教が祖壇とされる原因である。

度戒の経場と儀礼の場を大まかに分析すると、匯源瑶族の度戒儀礼と、先に述べた三教派の関係を見出す事が出来る。神壇に祀られた神祇と凶像は、ずいぶんと道教の初期の神が見受けられる。度戒儀礼の中の符図と齋醮儀範はあまねく正一派の特色を具えている。度戒儀礼では三清神を中央に置くこと、還四府願の儀礼、十二伝度巫師を設けること、儀礼の中の開天門、遊郷、簽押、法術を授ける“上刀梯”及び度戒儀礼で受礼者が自らを“師男”と呼ぶこと、これらは閩西南地域の道教閩山派の永福における伝度儀礼の三清神を主とすること、四府神を請い、十二考官を設け、科儀の中で開天門、遊郷、簽押、伝法儀式で“上刀梯”が行われること、度戒を受ける者（受礼者）が“師男”と自称することに類似している。またいくつかの面で、度戒儀礼の原初的な内容も顕れている。度戒儀礼で梅山神を呼ぶ時の“梅山神を招くための歌”“梅山の呪文”“梅山の訣（手訣）”等があり、また梅山神の軸もある。ここからは梅山教との関係を見出せる。以上のような事から、匯源瑶族の度戒は南方の古層の道教の生きた化石といった側面を持つ。

更に、匯源瑶族の度戒儀式と瑶族の伝統的な信仰、および巫教の関係もある。度戒儀礼では、瑶族社会の原始宗教の要素をたくさん見ることができる。鷄公尾花・綿花・茶花・五谷神等が、切り紙に切られる。これは植物や農業神への崇拝であり、切り絵の中には蜘蛛、^{スッポン} 団魚、^{ムカデ} 鯉、蛇等も見られる。男根もしくは女陰の象徴、あるいは多産の生育神信仰も見られる。また、狩猟と焼畑の生活を反映した祭祀歌舞は、瑶族の原初的な文化である。^{かみま} 神請ぎのテキストの中には、瑶族の巫教の神等が見られる。これらは瑶族がかつて封建王朝時代の国教とされていた道教を吸収したものの、実際には自分たちの基層的な宗教の内容に加える事によって元々もっていた信仰の必要な部分を満足させていった。道教が各地の民間に入り込んでいった状況は大体このようなもので、我々はこれらの現象を常に巫道の流れを一にするとか、混ざり合うとか言う。巫と道が一になる状況は匯源瑶族の村では郷源では特に顕著である。彼等には巫師と道師の区別は無く、すなわち、巫は道であり、道はまた巫であると考えている。おそらく、民国年間の写本テキストの中に「巫教をもって祖壇と為す」所以である。巫道が合流した実際の状況からいって、匯源瑶族の度戒儀礼が民間道教であると認識できる。このことから儀礼を取り仕切る者は道士と呼べるし、また巫師とも言える。また更に“師・道公”等と呼べる。

（訳：広川 英一郎）

（2）師弟関係

匯源瑶族の宗教活動をとり行う者は、道士¹と師公²の区別がなく、1人の宗教活動者が道教の儀礼をやれたり、巫教の儀式をしたりするため、彼らは“^{しお}翁”と呼ばれる。すなわち漢族の師公と同じである。彼らは日常の労働をしながら、ただ人に頼まれた時に宗教儀礼を行う。

¹ 道教を信奉し、道教の戒律を受けて、道教の經典読誦や儀礼の執行にあたる宗教者。仏教の僧侶、神道の神官に相当する（『道教事典』p.447 1996年 平河出版社）

² 民間宗教者の通称として幅広く用いられる

宗教者としての職は息子に受け継がれることができるが、異姓の者にも伝授することもできるため、一族以外の者に伝える場合は“認師授徒”と称する。まず初めに師に拝礼をし拝師の礼を行い、師を“開教師”と呼ぶ。

吉日を選び師父の家に線香と紙銭をいくつかさしあげ、何回か礼を行った後、師父は神龕に線香をともし、弟子のために一席もうけ、師父はその弟子を正式に弟子として認めることを表わす。師父の妻は“師母”と呼ばれる。旧時（1949年以前³）匯源瑶族では師弟関係は大変重要視され、通常、拝礼の儀礼を行った開教師を実の父親のようにみなし、師父は弟子を我が子のように見なす。年越しと年中行事においては、弟子は師父に食事をごちそうし、師父も弟子にごちそうする。元旦に弟子は師父に新年の挨拶をしなければならぬ。別のケースとしては、父親が子に自分の跡を継がせることで、父親は篩翁^{しおう}になる。幾人かの息子がいる場合にはその中から聡明な1人を選んで、学ばせ師公にする。認師授徒であれ実の跡とりであれ、同様に経場⁴と法場⁵の両方を学ぶ。学習時、少しの空き時間にも字を学びながら、テキストを読呪するが、文字が多いので晩には開教師の家の竈の側で学び、労働時にも唱えて覚え、字のわかる人に会えばすぐに尋ねるし、地面に書いて練習する。開教師の所有する全てのテキストを暗記するか、筆写し終えるまで続けられる。盤老二や盤苟仔等の師公の話によると“実の父親は息子に対してさらに厳しい。元旦でも息子に勉強させて、紙と筆を準備させ、テキストの文字に照らして一角一角確認しながら書いて写させた。旧時に匯源瑶族には学校がなかったが、宗教者が生徒に字を教えていたために、ある者が達筆であったのは、この人が平素鍛錬に励んでいた結果である。

法場の方では、師父が外で法事をやる時に、弟子は一緒についていき助手を務める。テキストを読呪するのを助けたり、銅鑼や太鼓をたたいたり、舞を舞ったりして、それらを全て師父の指示の通りに行い、現場での指導を受けるのである。弟子は文書を暗唱できるようになると、法場の面では目で見て心でよく覚えることを通じて、また神を招き神を楽しませる一連の儀礼の秘訣を掌握する。開教師にかわって単独で一つ法事を行うことができるようにする。開教師は弟子が十分に学んだと認めたら、段階的に伝度儀礼を行い、1人の正式な師公とさせる。今や現代の経済、特に市場経済の衝撃を受けて、青年は多くのお金を得るためにある者は出稼ぎに出てしまい、巫師として学ぶような青年は極めて少ない。このようにして弟子に対する要求は昔の様に厳格ではなくなり、現在では師匠が弟子を探すような現象がみられる。

匯源瑶族の師公は師匠のもとを出た後、独立することができる。ある瑶姓あるいは幾つかの瑶姓の人々のために宗教活動を行う。彼らは主に法事の儀式を行う時には自分の開教師を招くが、ただ開教師のさらに先生にあたる様な人は招かない。このようなケースは漢族において直系の師父を招き、さらに師父より上の何代も前の師を招く作法に比べると異なっている。匯源瑶族は1代はただ1代の師のみを招き、弟子は自分の開教師だけを師としている。この様な宗教における習俗と生活習俗の様相は一致している。例えば、当地の瑶族では娘を嫁がせる時、結婚の祝い酒を飲める権利があるのは新婦の父母の1世代の親戚だけである。祖父母にはこの酒を飲む権利がない。旧時の当地では孫は祖父母を養わなかった。

匯源瑶族では開教師だけを敬い、祖師を祀らない。つまりこの地では教えを代々受け継ぐような観念をもっておらず、宗教が法脈によって伝承されるということはない。

³ 中華人民共和国政府成立以前

⁴ 文献を読誦すること

⁵ 儀礼の実践の場

(3) 壇班道士

匯源郷の瑶族巫師の伝度儀礼とは度戒のことである。度戒儀礼はまた度法、度身、抛牌とも言われる。度戒儀礼を行って掛十二盞灯儀礼を経てあの世の職務につき、度牒と太上老君の印をうけて、またあの世の兵とあの世の將軍を従える事ができるようになり、現地の瑶族の正式な師公に認められる。

この前にはまだ二つの段階がある。第一は、占いをして先祖に認められて、法名を獲得して、補掛三盞灯儀礼をしていない人に開天門の儀礼が必要無い儀礼をする。第二は、還家願と補掛三盞灯儀式を行う。言い換えれば代々血統を継ぐ成人式のことである。この儀式を通過してはじめて一人前の瑶族として認められる。補掛三盞灯儀礼の時に、自己の法名を三清像の前に持って行って、三清に認められてから、これを済ませた人に開天門を行わないようなレベルの法事をする事ができる。還家願をして補掛三盞灯儀礼を済ませない人は、最高級の巫師になるために、度戒儀礼中に補掛三盞灯儀礼を行って補わなければならない。

1989年の度戒儀礼が行われる中で6人が補掛三盞灯儀礼を済ませた。ただし、度戒儀礼をうけた人が必ずしも巫師であるわけではない。ある人は巫師でなくとも度戒にあずかる。その目的は生前に巫師という職位を得ることによって、死後天界に昇って、一つの地方を担当する正式な神になることを求めるからである。瑶族の諺には“不求今生、但求来世(現世で求めず、来世で求める)”というものがある。1989年の度戒儀礼において、参加者(儀礼を受けた人)は15名であり、そのうち5名のみ巫師になった。その他の10名は巫師とはならなかったが、巨額の投資をし、様々な試練をうけた。これはまさに来世での幸福を求めたからである。

匯源瑶族の度戒儀礼は集団的な伝度儀式である。壇班は主醮師(或は主度師、前度師とも呼ぶ)、引度師、証盟師、保举師、書表師、紙縁師、総壇師、同壇師(又は坐壇師⁶とも呼ぶ)、吹笛師、鼓楽師、茶酒師、執香師等12名の巫師によって構成される。

巫師はいずれも1人弟子を伴って、合わせて24名で、各自の職務をつかさどる。主醮師は、度戒儀礼の全権を掌握する主宰者である。引度師は、主醮師⁷に協力して儀礼を進める。書表師は、度戒儀礼に必要な文牒疏表を謄写する役割を全うする。

保举師、証盟師は、三清神に対して、新たに伝度する受礼者の職席を保証し、推薦する役割を果たす。総壇師と同壇師は、神を招き、神を楽しませるための総ての内壇儀礼を担当する。紙縁師は、専ら紙馬、錢箆をつくる者である。吹笛師、鼓楽師は、儀礼の次第に応じて演奏を行い、いつでも必要な時に祭壇内外の雰囲気盛り上げる者である。茶酒師、執香師は専らお茶、お酒、線香を補給する者である。12名の巫師の他には規縁師もある。厨房の責務、雑務一般、接待の他、儀礼活動に対して“規則”を出して来る(これを出排盞とも称する)。

およそ儀礼を行う前に必ずでてくる巫師の数にしたがって規縁師はお盆をささげて来て、お盆には酒と杯と豆腐を置いておく。巫師にむかって礼を尽くして巫師をうながすと、巫師はお盆を受け取り、その酒を飲んで、豆腐を食べて“領席”と称す。“領席”後に儀礼を行う。

⁶ 2008年の度戒儀礼においては主に「坐壇師」の名称が用いられていた

⁷ 本文では主度師となっている

儀礼は、規縁師が“規則”を出さず、巫師が“領席”しないならば、儀礼を開始することができない。また2人の磨刀師は、刃物を研ぎ、刃物を梯子に据え付け、刃物の切れ味を試し、刀架(カタナカケハシ)をかつぐというような任務を行う。巫師のなかでは、主醮師、引度師、書表師、紙縁師、保挙師、証盟師を主として、この6人の巫師は、必ず度戒儀礼を受けている三戒弟子で構成され、この職位があることで初めて開天門を行うことができるのであり、それぞれが開天門という儀礼を行うため、お互いに交代することはできない。その他の巫師は掛三盞灯儀礼を経ていればいいのだが、彼らは開天門の儀礼を行えず、一般的な儀礼を分担して行う。

弟子は修行の身である。開教師に導かれ、言葉と動作により教えをうけ、儀礼に参加することを通じて伝習し、度戒儀礼の全過程に関わることで後に度戒科儀をする基礎を築くのである。

今回の主催と執行に携わる巫師は全て瑶族であるために、瑶師と呼ばれている。匯源郷の瑶師以外、主醮師である盤老二、紙縁師の盤冬生、総壇師である盤喜古等の原籍は匯源郷の下山戸⁸であり、書表師である盤日吉、保挙師の盤孝古、同壇師である趙喬生等は一つ山を隔てた寧遠県九嶷山瑶族郷の出身である。

度戒儀礼を行う瑶師は出身地は異なるが、瑶族の文化と宗教は行政区画によって隔てられているわけではないので、一つの民族性を現している。そのため、藍山と寧遠県に住んでいる過山瑶族らは、族源が親戚関係にあるため、その文化や宗教が同じであると見られている。

12名の瑶師、12名の弟子、15名の会首及びその妻とも同じ祭壇にいる。臨時に集まったのであり、別々の土地から来て、それぞれの役目も異なるけれども、しかし彼らはそれぞれの役割を遵守し、それぞれがなすべき事を行い、互いに協力し、非常に密な関係となつて、親しくなり、瑶族としての強烈な同族意識を持つ。

匯源郷の瑶族の巫師は教派の別がなく、度戒儀礼をうけた巫師も等級の別がなく、専門的な職があるわけではない、だから度戒儀礼の中では、それぞれの役割は会首の要請によるものである。例えば、1989年度戒儀式では、趙子鳳が引度師であり、盤苟仔が証盟師であり、盤孝古が保挙師であった。しかし、1995年の度戒儀礼では、三人がそれぞれ主醮師、引度師、証盟師を分担して務めた。匯源郷の瑶族で度戒儀礼を行った瑶師は、その地で行われるすべての宗教儀式と儀礼が執行できる。度戒儀式も、環家願儀礼も、環盤王願儀礼及びその他の小さな儀礼も全て行う。これは瑶族の民間信仰における特徴の現れである。

表2

姓名	法名	職務	学歴	年齢	附注
盤老二	法念	主醮師	私塾一年	76	1956年度戒
趙子鳳	法靈	引度師	私塾二年	57	1982年度戒
盤日古	法香	書表師	私塾三年	62	1982年度戒
盤冬生	法林	紙縁師	小学二年	56	1982年度戒
盤苟仔	法玉	証盟師	私塾二年	67	1982年度戒
盤孝古	法富	保挙師	私塾二年	58	1982年度戒
盤喜古	法良	総壇師	小学二年	54	

⁸ 地名

趙喬生	法現	同壇師	私塾二年	64	
趙日保	法才	執香師	小学四年	48	
趙喜古	法天	茶酒師	小学四年	48	
馮友古	法財	鼓鑼師	小学四年	32	
趙生貴	法裁	吹笛師	高小二年	43	

表 2 は 1989 年伝灯度戒を行う時に法師が分担した職位のものである。

(訳：李 利)

二、道壇構造

1. 壇場の構造と禁忌

匯源瑶族の度戒儀礼は、集団的な伝度活動に属することである。儀礼の場は必ず野外で行わなければならない。どこで儀式を行うかは随意に選択してはいけない。風水先生に依頼して決めてもらった場所で行わなければならない。1989 年儀式の齋場は、入り口に向かって三面が山に囲まれていて、その一面が開いていて一方向しか出口がない。また溪流のあるような土地で三面の山の上には木が青々と生い茂り、活気に満ちあふれているところである。話によればこの場所を決定するにあたって 3 人の風水先生が見ており、3 人が 3 人とも度戒儀礼を行う場所として適していると言った。

この山から原料を取り、竹を用いて瑶族の住んでいる住居と同じような大きなフロアをもつ家を組上げる。この家は 300 平方メートルあまりもある。

フロアは五つの部屋に仕切り、三つの部屋を正室とし、それぞれ両脇を脇部屋とする。部屋との間は、杉の皮を用いた低い壁で隔てただけである。壁の高さは人の腰程にすぎない。向かって正面の一番広い部屋を醮壇とし、科儀活動を行う重要な場所である。醮壇の左側のひと部屋を前後二つに仕切り、前の部屋は書表房とし、後の部屋は紙縁房とする。書表房は、書表師が文詞を書いたり印鑑を押したりするところであり、孔子の神牌を設けている。紙縁房は、紙縁師が“紙馬”、“錢箆”を準備するところである。醮壇の右側のひと間は、厨房と倉庫がある。正面向かって右側の部屋は“女禁房⁹”である。度戒儀礼の受礼者の妻のために設けられた部屋である。左側の部屋は“男禁房¹⁰”である。度戒儀礼の受礼者のために設けられた大部屋である。

“男禁房”、“女禁房”を設けるのは齋戒のためである。規制により、儀式の前に七日度戒儀礼の受礼者は夫婦で同食することができない。齋戒が始まった後は、度戒儀礼の受礼者は女禁房に入れず、妻及びすべての女性と話してはいけない。度戒儀礼の受礼者の妻の方も男禁房に入れず、夫と話すことはできない。度戒儀礼の受礼者及び妻にはそれぞれ 1 人ずつ陪郎(付添い男性)、陪姑(付添い女性)がつく。もし夫婦の間で告げなければならないことがあれば、陪郎と陪姑を通じて伝える。その順番は、受礼者⇄陪郎⇄陪姑

⁹ 女性のみが入れる部屋

¹⁰ 男性のみが入れる部屋

⇨妻になる。

儀礼の場の禁忌は、“男禁房”、“女禁房”を設ける他に、儀礼の場（特に醮壇）で漢語を話すことは許されないことがある。厨房には、2杯の辣椒水（唐辛子で作った水）が準備してあって、故意か過失かに関わらずに、禁忌をおかしたら、この辛い水を飲んで罰せられなければならない。いわば、この禁忌は環盤王願儀礼に由来するものである。環盤王願儀礼は瑶族が行う厳粛であり閉鎖的な始祖祭祀であるから、以前は漢族は壇に入れず、漢語を話すことも禁止されていた。

2. 醮壇の設置

度戒儀礼は大型の清醮科儀に属するものである。醮壇は道教的な科儀の手順にしたがって手配され、内壇と外台に分けられる。大部分の科儀は内壇で行われるが、ただし度戒儀礼の開始と終了の時に、何度も行われるところの“開天門儀礼（天の門を開く）”、“上刀梯儀礼（刀梯登り）”、勅印の儀礼等が外壇で行われる。このため、醮壇の設置の際は内壇、外台という構造から成る。

（1）内壇

内壇は、すなわち科儀の場である。度戒儀礼を行う主な場所であり、面積が広く、飾りつけも立派であり、荘厳で厳粛な雰囲気である。

A. 十二宮門

内壇の後の壁には12幅の神像の描かれた軸を一行に並べてあり、それぞれの神軸の前には竹ヒゴで半円形の門をつくり、その門の上に“対聯”を貼り付け、神像の半分が拱門内に見えるようにしてある。天の神が住まう宮殿であるので“十二宮門”と称する。宮門の前に香案を設けて神牌を供える。また、線香を立ててお茶と酒を供える。青木香という香木を焚き、香の煙がうずまき、その香りがかすかに香っている。12の神の軸は左から右までの順番で以下の通りである。

海番張趙二郎刀山祖師、九天東厨監齋把醮大王、上元学法張天大法師、黄趙二聖真君、龍虎財縁二庫判官、中天星北極紫微大帝、玉清聖境大羅元始天尊、上清真境玉震靈宝天尊、太清仙境混元道德天尊、昊天金厥至聖玉皇上帝、上穹勾陳十殿承天啓化青華長生大帝、李天大法師君、觀音泗洲上帝、天地水陽四府、三元三官大帝。（註：p. 15の図参照）

それぞれの宮門の上に、赤い紙を切って作った五谷神の像とその上にはトウモロコシの図案と下には猫と香炉の図案が切り紙で切っている。

B. 十二宮袋

“宮袋”は、各宮門の受理する文牒疏表を入れて置くために用いる袋であり、長方形を呈していて、1枚の縦60センチの紅紙を折って長方形にし、下は底を閉じて、上は口を開くようにし、小さい縄で取手をつくり、袋状にし、外に黄紙の簽条を貼り、神の名前を書いて、宮門中に掛けておく。内壇の法事で各宮門に送り届ける文書は、読み終わった後に、この宮袋に入れ、送聖の時に一緒に焚きあげる。十二宮門の全てに宮袋が設けられるので“十二宮袋”と称する。

C. 花楼

花楼は、花壇であり、“師壇”とも称し、“随縁祖本衆師之神位”を供奉する。作り方は奇特で、方形の机を台にし、細く割った竹によって方形の机上に切り細工をし、二層の楼廓の形に作りあげる。上に七つの切り紙の太陽を貼り、その他は、切り紙の量であり、一番頂上の所には白い鶴を挿す。正面に拱門を設け、両側に対聯を書く。聯には、「老君壇前行正教、衆師降臨収邪神」とあり、横幅は“聖駕降臨”である。壇内に祖本衆師之神位を供奉し、経書は、またここに置いておく。

D. 家先堂

家先堂は、瑶族家庭の家先堂であり、その位置は内壇後壁の右角上方に設け、“衆位家先神位”を供奉し、また“衆堂”と称す。度戒に参加する会首が壇に入る時、必ず各自の家先神祇を請来して、壇場を護衛してもらわねばならず、衆堂の上に安置する。巫師が持って来た神軸兵将もまた先に衆堂内に入れなければならない。衆堂はまた往来する天神と陽兵陰将たちの休憩地でもあり、各路の聖神がやってくるのを迎え入れるための壇場である。

(訳：李)

E. 功曹位

功曹は天に昇り地に入り、あの世へ出入りし、情報を伝達する使者である。正門の左壁の内に功曹の位牌、神軸を掛け、宮門を立て、祭壇を設け、いつも祀っており、醮壇から派遣の依頼を受ける。

F. 過往神童位

正面の左外壁に“合庚太歳過往神童位”の神牌を設ける。過往神童は、俗に“遊仙”といい、順番に担当するグループを作り、天曹地府の神霊を見まわる。度戒儀礼と直接の関係はなく、招かれて礼拝をうける神霊の中には入らない。神牌を設けて賓客として接待するのは、各方面の協力を得て、功德が円満であることを求める。

G. 天橋、陰橋

天橋とは、1丈4尺の白布を用いて敷き架ける。衆堂から醮壇の正面まで至り、正面の外の右側に置かれた“黄幡”に結ばれて、白布の上は72名の神像が描かれた神軸が置かれている。これは天の神がここで馬車を停めたり馬を降りたりして、醮壇に入るための“通道”である。

陰橋とは、1丈2尺の白布を用いて敷き架ける。功曹神位から醮壇の正面の左側に出し、“白幡”と結ぶ。これは地の神がここに馬車を停めたり馬から降りたりして、醮壇に入るための“通道”である。

H. 榜文

榜文とは、天の神、地の神に告げ知らせるもので、人や神に知らせるための文書である。これが醮壇の上の方に掲げられる。このことを“掛吊”と呼ぶ。伝度黄榜、伝度約束榜、補充黄榜、加職黄榜及び湯花榜、茶花榜、酒花榜、井露花榜、醮花榜と十二花牌がある。

「祭文」

(訳：三村)

補充黄榜。補充黄榜は、今回叙任候補者の父親世代に官職を与えるために特別に設けた榜文である。文に曰く、

「祭文」

加職黄榜。加職黄榜は度戒科儀の中で、叙任候補者の祖先のために発布する“加職（職を与える）”の誥諭を公布するための榜文である。文に曰く、

「祭文」

花榜。花榜は五つの供物ごとに榜を並べて神に献ずる。これは儀礼的な短冊式の榜文である。醮壇の名義で発布し、“伝度黄榜”の後に懸けられる。

湯花榜。文曰く： 「祭文」

茶花榜。文曰く： 「祭文」

酒花榜。文曰く： 「祭文」

井露花榜。文曰く： 「祭文」

醮花榜。文曰く： 「祭文」

(訳：佐川)

I. 花牌

花牌は道教の主旨と道壇の行為を宣揚するところの信条である。瑶族の老巫師は七言体によってこれを書き、“埠老花牌”（埠老は瑶族の老巫師である）とも呼ばれ、各条は八句で構成され、また八句子ともいう。花榜の後に懸けられる。

第一条（黄紙を使う）	「祭文」	／	第二条（白紙を使う）	「祭文」
第三条（白紙を使う）	「祭文」	／	第四条（白紙を使う）	「祭文」
第五条（黄紙を使う）	「祭文」	／	第六条（黄白紙を使う）	「祭文」
第七条（黄紙を使う）	「祭文」	／	第八条（白紙を使う）	「祭文」

第九条（黄紙を使う） 「祭文」 / 第十条（白紙を使う） 「祭文」

第十一条（黄紙を使う） 「祭文」 / 第十二条（白紙を使う） 「祭文」

榜文と花牌の端は全て民間で行われる切り絵の図柄になっており、蜘蛛、^{スッポン}団魚、^{ムカデ}鯉、蜈蚣、雄鶏の尾羽の立派なもの、綿花、茶花、盤王印等がある。工芸的には技術が高いとは言えないが、一目見ただけでよく分る。

また補充加職花牌もある。補充加職花牌は、単独で短冊に書かれるのではなく、補充黄榜と加職黄榜の後に書かれる。

（訳：広川）

J. 対聯

対聯は醮壇の見た目にして画竜点睛のような役割を果たす。あまり広くない醮壇は、大小 20 幅あまりの対聯が連なって飾り付けられ、荘厳に見える。内壇の十二宮門は、12 幅の小さい対聯で飾りつけられ、宮門は大きく、神聖な威厳をもち、強い立体感を現している。大門には、1 幅の七言対で“大道巍巍登王座、世真浩浩出瑶台”を用いて、醮壇の用途が明瞭に顕されている。

（2）外台

外台は、野外に設けられている。これは“開天門”、“上刀梯”の際、直接天神に奏上する壇場である。大きなものは“雲台”と称し、接聖、送聖、上刀梯を行い、小さいものは、“文台”と呼び“開天門”、“奏青詞”の儀礼に専ら用いるところである。

A. 雲台

雲台は、主醮師、引度師が叙任者を導いて刀で作った梯を上るところである。今回の度戒儀礼は、雲台は醮壇から 1000 メートル離れている沖口に設けられた。ここは比較的広く、民衆が剣の梯子登りを観やすい。雲台は舞台に似ているが、装飾がない。雲台は刀梯を上って、即ち半ば雲に入るという意味を現すため、“雲台”を称する。

B. 文台

文台は、特に“開天門”、“奏青詞”のために設けられた小型の木の台である。作り方は簡単で、2 本の短い木の上に木板を敷いて出来ている。巫師は天門を開き、青詞を奏する時に、文台の上に立つ。意味は雲や霧の下に立つという意味で、神々へ直接角笛を吹いて奏上する。今回の度戒儀礼では 2 ヶ所の文台が設けられた。一つ目は醮壇の黄幡の前に、1 条(3.3 メートル)あまりの長さの文台を設けており、青詞を奏するために用いる。二つ目は雲台の前に、小さな文台を設けて、ここは保挙師が接聖、送聖を行うのに専ら用いる。

C. 疏篋

疏篋は、開天門、奏青詞を行う際に、疏書・紙馬・錢篋を入れる特別なものである。山から豊富に産出

する楠竹（孟宗竹）を用い、長さ1公尺（1メートル）の円筒の筒に切り、一方の端を尖らして地面に挿す。もう一方の端を均等に割って10本の竹ヒゴにして、縦ヒゴがつくられる。また横ヒゴを用いて、ラッパの形の掛け籠にする。開天門、奏青詞を行う時に、疏書・紙馬及び紙、墨、筆、硯等を入れ、奏上した後に一緒に合わせて焚かれる。

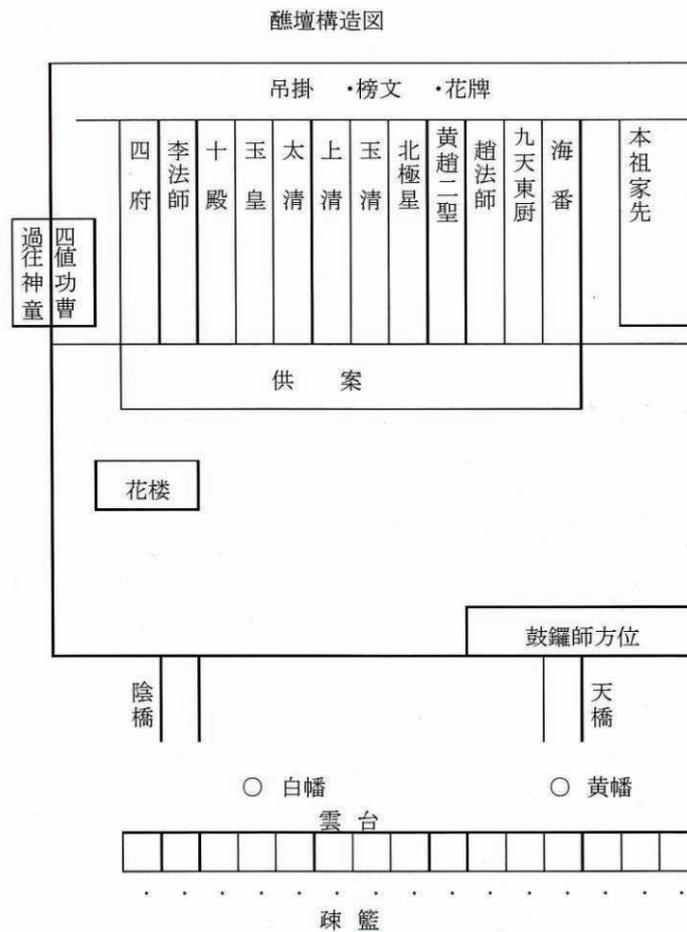
D. 黄幡、白幡

幡は、清醮道場の象徴である。度戒科儀には二幡を立てられ、醮壇の門外に並べられる。右は黄幡で、左は白幡である。

黄幡には“黄幡号”を書く。その文曰く：“太上回天執符御曆含真体道金闕高空上聖玄穹九天御曆万道無為通天大殿三十三天昊天金闕玉皇大帝”。

白幡には“白幡号”を書く。その文に曰く：“一心奉請浩浩荡荡天真降駕冥冥地府来臨王王赫赫龍庭請聖衆列在祭典諸庙城隍神祇来臨赴玄穹掛起七昼七夜滿散信財容洪恩納受”。

黄幡、白幡は天の神、地の神が馬車を停めて馬から降りて醮壇に入る通路である。いわゆる天神は黄幡から天橋をわたって醮壇に入り、地神は白幡を経て公曹位を通過して醮壇に入る、界線（天と地の境界）が明らかに分かれている。



(訳：李)

三、度戒儀礼の過程及び構成

1. 儀式前の準備

度戒儀礼前の準備は二つの段階に分けられる。一つは、儀礼前の準備であり、二つは正式に儀式が進行する前の準備である。

度戒儀礼を受礼したいと思う人は、まず提議してから他人の反応を見る。12人の会首を募り、受礼者とする。1人の人望のある人をリーダーと選び、“大会首”と称す。今回の度戒儀礼の召集人となる。会首が確定した後、各自家に戻り、宗教者に頼んで日を選んで願をかける。願かけてこそ度戒儀礼の正式な構成員となる。

各会首が家でぬかずいてかける願は、会首個人の心願であり、度戒儀礼への誠意を表わすものである。1人の巫師を家に招き、家の広間の入口の隅（家先堂と向かい合っておらず、斜めの角にある）に四角いテーブルを置き、盆を用いて7個の糯米糍粑（少数民族が食べる餅）、7杯の茶、7つの灯り、5杯の酒と1本の線香を置き、そして、5碗の齋供を陳列しておく。すなわち、龍眼、荔枝、菊、木耳及び米粉である。家庭で行う小規模の“四府宝書良願”は、合樂先師、鑑齋大王、天斗星君、七星姉妹および四方の神々を招く。願かける重要なものは、紙馬、錢籠を捧げることを約束し、平安が保たれるように祈る。

各会首が家で願をかけた後、正式な度戒儀礼の構成員として確定する。大会首は構成員を召集し、主醮師を招く事を協議して、この時から大会首は“鹽信”（竹を用いて鹽〔食塩〕をひとつまみ包む、これは宗教者を招く礼儀である）を持って、主醮師の家に行き、彼に度戒儀礼を行ってもらうように頼む。主醮師は“鹽信”を受けて家先堂にのせて引き受けることを表す。良い日を選び、大会首の家に行き、その日その場所で“開天門”をして、大型の四府宝書の願かけをしてぬかずき、三清、玉皇、張天師、李天師、天地水陽四府及び合樂仙師、鑑齋大王、天斗星君、七星姉妹を招く。それぞれの神々に紙馬の刷り物 120部、求財 60部、保佑 60部を与え、再び、一座の青山学堂という醮壇の祭りを約束しますと願かけを行って、度戒儀礼の時に願ほどきをする。

願かけの後、主醮師および会首たちは一緒に協議をして、その他の巫師のメンバーを決める。人選をして、主要な会首がそれぞれ手分けをして“鹽信”を持ち私邸を訪問して要請を行い、一つ一つ確定する。書表師は“鹽信”を受けた後、すぐに文牒疏表の書写に着手し、度戒儀礼のあらゆる文書を準備する。その他の人員には度戒儀礼の分担にしたがって、必要な準備をしておく。

度戒儀礼を行う時期は、一般の瑶族の“盤王節”の前後で、具体的な時間は大会首の生年月日（生辰八字）、時間と四柱に基づき推算して出す。儀式の始めと終わり、上刀梯、奏青詞は、いずれも吉時を選んでいる。吉日を選ぶのは、大会首が自らが推算した方がいいが、大会首が推算できない時には、主醮師あるいは他の巫師に依頼して選定する。吉日が適切に当たっておらず、意外な事故があった際には、吉日を選んだ人が公正でなかったと往々にして後悔される。例えば1989年の度戒儀礼の大会首であった趙天貴は、度戒儀礼からわずか2年後にこの世を去った。これについて選日をした人が度戒儀礼の日を誤って選んだと名指しで非難することがあった。

儀式が正式に行われる前の準備は、祭場に入る前に整えておかなければならない重要ないくつかの事を指す。一つ目は、祭場を組み立て、食事と寝起きをする場を準備しておく。二つ目は半月間につかう柴を刈っておく。三つ目は、規縁師は各会首に財務帳を書いて出す。度戒儀礼を行う期間に使う布団、米、野

菜、米酒（もち米やアワで作った蒸留酒）等、必要な物をそれぞれの会首が人に頼んで祭場に運ばせる。度戒儀礼の受礼者が祭場に入った後、小齋戒に入り、祭場で7日間の精進を行い、ここにおいて、正式な度戒儀礼の前に必要な一切の準備を終えたことになる。大齋に入った後、儀式の場の全員が儀礼活動へ全力を集中し、気を散らすことは許されない。

匯源郷瑶族の度戒儀礼は道教の中の、伝度受戒の清醮類に属するため、そのテキストは度戒を“清醮”とする。度戒儀礼は15日間程かかり、前5～7日間は始めの段階で、中7日間は伝度儀礼の段階で、後の3日間は終わりの段階である。儀礼の内容は三夜道場に分かれる。即ち、初夜道場、中夜道場と末夜（また丹夜と称する）道場である。

三夜道場は神々を3回に分けて勧請することを基本とする。儀礼の内容は主に内壇で完成させ、外台の活動を内壇で補い、内と外が結合して総体となる。

吉日を選んで入壇を行うのは、度戒儀礼の開始日である。1989年の度戒儀礼は11月4日であり、すなわち、農曆の10月5日である。その時、度戒儀礼に参加する会首は、祖先、親戚、友人及び家人に別れをつけて、旅支度、日用品と家で願かけを行った“四府願”の紙捻¹¹を持ち、陪郎（俗称を撐傘仔）を連れ、度戒儀礼の壇場に駆けつける。半月の時間の経過を要する度戒儀礼で“生涯”を過ごす。規縁師、規縁娘は前もって到着して、会首と主醮師、引度師、書表師、紙縁師も入壇し、全ての準備作業をしておく。

（訳：三村）

2. 立堂

度戒儀礼の会首が揃ってから、1人の宗教者でもある会首が“衆位家先堂”を建てる。度戒会首は一姓、一家族、一村に住む村民ではないので、多くの姓から成り、数十里離れて暮らす村民が自主的にあつまってつくった臨時の共同体である。臨時組合の共同体には信仰の主体が必要であり、この主体は“衆位家先堂”である。まず各自の家の先祖とその兵馬を落ち着かせる。今回の立堂は、何年も法事を行い、大小の法事科儀に精通した9会首¹²である馮榮飛が法事科儀を執行した。

3. 落兵

会首は当日の午後に入壇する。その時度戒儀礼の中心となる主醮師・引度師・書表師・紙縁師は、必ず時間通りに入壇して度戒儀礼の前段階の準備をすべて終えていなければならない。彼らはすべて度戒儀礼を受けた“三戒の弟子”であり、来る時にはそれぞれが神軸・本壇兵馬・宗教文献・法器・神杖・神頭・羅帯と道服、及び荷物を持って相次いで壇に着く。醮壇に着くと、規縁師が会首たちを代表して銅鑼をたたいて迎える。タバコを吸ってお茶を飲んだ後、規縁師が“衆位家先堂”の前に香案を設け、おのおの落兵落将、安壇落馬を行い、まず神を衆堂に安座してもらい、その後神に訴える。例えば主醮師は、自らが主催する度戒儀礼の中で、受け持つ法事任務をひと通り申し述べ、神に保護を求める。その他役割を持った人も、各自責任を負う法事の役割についてはっきりと引き継ぐ。兵を降ろした後、書表師・紙縁師は各自部屋に戻って仕事を始める。紙縁師は紙馬・錢籠を作り、書表師はまず孔子の位牌を設け、机の上で“至聖孔子譽録二司之神位”と書き写し、左右対の聯には“把筆童子、掌稿郎君（筆を持った童子と稿を持つ

¹¹ 文書でなく紙銭の如きものか

¹² 大会首から数えて9番目の序列の会首

た郎君)”と書き、神龕の中に貼る。規縁師は線香とお茶と酒と1羽の丸鶏の供物を捧げ持って孔子を祀る。書表師は本を開いて“度戒黄榜”を書き写す。

度戒の中では紙縁師が作った紙の馬が重んじられる。すなわち紙の馬は紙であり馬であり、紙は紙銭であってまたあの世の銭でもある。紙銭を作るには“(道は常に通じてはるか故郷へ通じる)”という文字を使い、この12字は黄道・黒道に分けられ“之”がつくものは黄道といい、その他は黒道という。紙銭を作る時には黄道を多く、黒道を少なくする。馬はすなわち馬板で、紙と同じ長さの角材の四つの面に彫られた騎馬武士の神符である。必要に応じて油墨を塗り、紙を用いて騎馬武士の神符を印刷する。その後、1枚の紙銭に1枚の騎馬神符を挟み、4枚の紙銭に四枚の神符を合わせてたたんで120部とし、2枚の神符に2枚の紙銭を合わせてたたんで60部とする。120部の銭は過去に度戒を経た男性神が受け、60部の銭はいまだ度戒を経していない男性神と、度戒を経ている女性神が受に対して焚火して送り使ってもらふ。度戒の中で紙縁師は、冥銭をもっぱら作り、紙の馬を配る職である。

(訳：佐川)

4. 封小齋

齋戒は、道壇における清醮儀礼において必ず行わなくてはならない儀礼である。度戒儀礼では前後2回の齋戒を行う。1回目は封小齋で、主醮師、引度師、そして度戒に参加する受礼者達が最初に行う齋戒である。2回目は封大齋であり、度戒儀礼に参加する全ての人々にあまねく行われる齋戒である。

封小齋は、度戒儀礼を司る主醮師が入壇した後に初めて主催する一つの儀礼である。これは“立起小位齋門(小位齋門を立てる)”と呼ばれる。封齋の時、祭場では生臭ものは見ることも許されない。すなわち鶏や鴨や魚や豚、及び卵やニンニク等である。規縁師は“衆位家先堂”の前にテーブルを設け、線香、お茶と酒、精進料理の供物を並べる。主醮師は神に奏し、大位神明を招いて曰く：

「祭文」

主醮師は兵を率いて壇に出てきて、その時、文台で開天門を行う。その“請神呪”に曰く、

「祭文」

(すなわち供物を一つ一つ確かめながら、神に受領してもらふ)

これらをいちいち供物を点検して挙げた後“御名意者”と“馬頭意者”を唱え、その後紙馬を渡し、橋を架けて兵を送り、神を宮殿まで送る。天門を閉めて、主醮師が文台を退き、再び転じて“衆位家先堂”に戻り“慶陽疏”、“封齋疏文”を上奏する。

慶陽疏は受礼者(大会首)の祖父と父親の名義で奉上するところの“慶陽伝度大酒礼”の疏文である。自らを“奉真祈保慶陽阻伝度謝恩完灯積福保安醮主”と称し、子を“信士”と呼び孫を“新度師男”と呼ぶ。その目的は次のようである。

「祭文」

封小齋は、“封齋疏文”を奏上して、“太上閻梅鳴場伝度封齋完灯奏名鼓楽清醮”という儀礼を行って、大会首の名義で次のように申し上げる。

(広川)

「祭文」

5. 一次撥兵

主醮師は“封立小位齋門”を行った後、規縁師は香案を撤去して、客間のなかに長い机を置き、三つの香案を設けて撥兵し、それぞれの香案に線香を焚き、1杯の酒、1杯の水を並べ、他に三つの盆を用いて、それぞれの盆に1斗2升¹³の米、1丈2尺¹⁴の白布、赤い紙のおひねり、三元六角の銭を入れて香案の上に置く。主醮師、引度師、書表師は各々一つの香案の前に壇を開いて撥兵する。今回の撥兵は、主醮師が三清兵馬、三清兵将を遣し、引度師が刀梯橋梁兵を遣し、書表師が疏表兵を遣して、それらの兵により醮壇と受礼者の安全をはかる。

6. 封大齋

封小齋を行った5~7日の後、準備が全て整って開始となり、正式な度戒儀礼の段階に入る。この日は証盟師、保拳師、総壇師、同壇師、吹笛師、鼓楽師、茶酒師、執香師は次々と壇につく。規則によれば規縁師は、受礼者を代表して銅鑼を鳴らしながら人を迎えて、煙草と茶で接待した後に、“落兵落将”、“安壇落馬”を行う。受礼者の妻は、また荷物を持って、陪姑（撐傘女）について壇場に入り、度戒儀礼に参加する。

この夜は、総壇師、同壇師が“初整華堂（はじめて華堂を整え）”、“張懸聖像金容（聖像金容を張懸する）”をし、壇に道場を設けはじめ、“封立大位祭門（大位祭門を封立する）”を行う。証盟師は男性用の《封齋表》を奏し、総壇師は女性用の《封齋疏》を奏する。

封大齋の時には一演目である“寄魂”という場面で做作¹⁵儀礼がある。俗にいうところの“封酒甕”である。その手順は次の通りである。新たに度戒儀礼を受ける受礼者がおのおの1枚のむしろ、1幅の神軸を持ち、上着を脱いでパンツ一丁になる。会首は順々に三清像の前に立ち、むしろを敷き、神軸を枕に、その上に熟睡しているように装う。その妻は三清像の後の壁に、一つの酒甕を準備しておく。巫師たちは長さ1丈2尺の白布を用い、一方の端を受礼者の頭の下にあて、もう一方の端を三清像の上方から後にいる受礼者の妻に向かって放る。

即ち“白布の金の橋”が架けられた。全て用意が整い開始となり、灯火を消され、しんとして物音ひとつなく、ちょうど夜が更けて人が寝静まるようで、一面が蕭然とする。しばらくすると受礼者はイビキをかき熟睡の様を表す。吹笛師はチャルメラで鶏の鳴きまねをし、3回笛を吹くことで、まさに真夜中の三更の刻¹⁶を表している。ここで新たに度戒儀礼を受ける受礼者が“起床”をする。彼は白布の一方の端を持ち、

¹³ 1升が1リットル、1斗は升の10倍

¹⁴ 1丈が10尺、1尺が0.33メートル

¹⁵ 「わざとらしい、作為的」という意

¹⁶ 夜の11時から1時

彼の妻は三清像の後で力を入れて白布を引き、白布を全部引いてしまうと酒甕の口に被せられてきつく封じられることになる。これは受礼者夫婦の三魂七魄を三清殿の下の雲中に宿らせることで、邪魔悪鬼の急襲を免れ、体は人間界に留まり度戒するという意味なのだ。做作儀礼をする時、夫婦は無言のうちに息を合わせて行い、精進開けの時を待って、はじめて酒甕を開けることができる。

封大齋の後、主醮師、引度師は新たに度戒儀礼を受ける受礼者を連れて静かな所で集中的な訓戒を行い、齋戒の規律を重ねて言い渡す。これを“骂槽”（即ち叮嚀〔繰り返し言い聞かせる〕）と称する。

7. 二次撥兵

撥兵儀礼は前回と同じであり、証盟師、保挙師が出席して儀礼を司る。証盟師は加職兵をわけ、保挙師は補充兵をわけ、兵をわけるといことは受礼者の先祖のために加職兵を遣わし、父の世代のために補充兵を遣わせるのである。

（訳：李）

8. 串壇迎聖

封大齋、二次撥兵の後、1日ばかりで“重整華堂（重ねて華堂を整える）”をし、醮壇の装飾を一新する。“串壇迎聖”儀礼は、内壇、外台で交互に行われる。内壇では、主醮師が神に奏上した後、醮壇で「勅変」を行う。これにより醮壇内の物品や法具がみな等しく変じる。例えば壇が変じるといのは次のようである。

「祭文」

外台で証盟師はまず先に“雲台”の下へ行き、次に“文台”の上にあがり、“大開天門”をする。天の神の一行聖衆が醮壇に降りてきて、全ての人のために証をなすように招聘する。新たに度戒儀礼を受ける受礼者は、神頭を被り、羅帯を巻きつけ、道袍をまとい、杓を片手に持ち、もう一方の手に銅鈴を持ち、道士のような気風が飄然とみえ、内壇に立って神を迎えるのを待つ。主醮師、引度師は新たに度戒儀礼を受ける受礼者を雲台の下へつれてくる。鼓楽師、吹笛師が、銅鑼と太鼓を打ち鳴らし、“雲雷鼓鑼（雷が鳴り響くように太鼓と銅鑼をならす）”の音が沸き起こる。しばらく、銅鑼と太鼓を叩いた後、主醮師、引度師は新たに度戒儀礼を受ける受礼者を引き連れ、壇を歩き回り五方を拝する。東から始め、東南西北中の五方五位に従い、それぞれの方位に線香を挿し、線香の周りを廻り拝む。拝みながら、一方位を拝する。主醮師はひと節の歌を歌う。すなわち“拝五方歌（五方を拝する歌）”である。

「祭文」

太鼓を鳴らし、五方を拝み、開天門をし、三清神々が祭場に降りて下さるように請う。巡る間ずっと太鼓と銅鑼を鳴らし、それに笙簫が付き添い、神を迎えて醮壇へ戻る。醮壇の前には主醮師、引度師が受礼者を連れて、黄幡、白幡を巡り、壇を回り、醮壇へ入って花楼に戻り、再び3回歩き回る。これで、串壇迎聖儀礼がこれで終了となる。

(訳：三村)

9. 請初夜聖

請初夜聖は“恭迎聖駕（神々とその乗り物を恭しく迎える）”であり、壇に到った後、証明師、保挙師、総壇師、同壇師が神頭をつけ、道袍を着て登場し、神々を拝み見る道壇科儀である。まず“大堂神明”を招聘して座位につかせ、自ら“御名意者”を奏上して地元の関心事を伝える。その後“説明意者”を用いて、まず度戒のこのたびの理由、すなわち叙任候補者が集まり、巫師に依頼して願掛けをして、吉日を選んで願ほどきを約束し、巫師に壇に来て主宰してくれるよう依頼したことを続けて3回述べ連ねる。第一遍は全過程をことばで説明し、第二遍は理由と会首が集まったことについては省く。第三遍は入壇後、儀礼の全課程を詳細に述べる。3本の線香を焚くことでこの“拝見”の礼が終わる。

4人の法師はしばらく休み、香案の上に新しく線香とお茶と酒を供える。4人の法師が再び登場して一緒に唱える。

まず“浄身呪”、“浄口呪”を用いて自らを清め神呪を用いて神に訴える。それは“三清呪”“玄天呪”“玉皇呪”“弥羅呪”等である。

「祭文」

再び上壇に兵馬“閻山神”、下壇に兵将“梅山神”と福江盤王四廟あるいは三廟聖王をおこして、花楼祖本二師位という位牌に集める。

その後“勅水”を行い、水と酒で醮壇を清める。“大法角”という法具の角笛を用いて七度鳴らし、師に頼んで兵を並べて壇に戻るようにさせる。“伝度三清贊”で三清神を誉め諸々の神々を招聘する。唱えて曰く：

「祭文」

(訳：佐川)

巫師達は続いて誠心誠意“十二献”を行うのに続いて、すなわち明香、明水、明灯、明茶、明酒、明花、明果、明瓶、明皿、明台、明馬、明疏を一つ一つ献じる。一つの物を献じるごとに歌唱えごとを一段ずつ唱える。

神招は壇を回ることによって終わる。師父は傍らにあつて“大先鋒”を唱え、弟子は手に刀や斧を持ち、出兵・進軍を表す刀舞の動作を花楼から黄幡の前まで連続してこれを3度行う。その動作は活発であり、歌声は浪々として、打ち鳴らされる銅鑼の音は揃い、神が喜び人が楽しむ太平の雰囲気を作り出す。“大先鋒の歌”は1人の道楽者の反省は万金にも換えがたいという故事を物語っている。その歌詞は以下である。

「祭文」

10. 落禁壇

“落禁壇”は“下禁”とも呼ばれ、主醮師が度戒儀礼の期間中に邪師邪神の影響を受けるのを防ぎ、醮壇の安寧を維持する為に設けられる“禁閉”儀礼であり、人気の静まった真夜中に実施され、見たことのある人は少ない。今回の度戒儀礼においては、我々は主醮師の行うこの儀礼を見ておらず、彼に聞いても笑って答えない。事情を知っている者を探して尋ねると、やっと我々に教えてくれたところによれば、下禁は人に見せてはいけなく、特に外からの人間は見る事が出来ない。これはその辺の邪師悪鬼を捕まえて中に閉じ込めなければいけないので、それが正常な人間の魂魄まで、間違えて捕まえてしまってトラブルになるのを怖れるためである。下禁を見たところ大変簡単で、衆壇の地下に師刀で穴をあけて、手を使って紙をもみながら唱え事をし、最後に紙を一つ丸めて地下に埋め、これで度戒儀礼が終わるのを待って掘り出す。

“落禁壇”は主醮師こそができる場所の秘術で、一般人に対しては伝承せず、それによって非常に高度な法術である事を示している。我々はバラバラになっている手書きで記録されたテキストの中から“下禁壇”に関する資料を発見した。これを見ると全ての儀礼の内容は3段階に分けられる。

(訳：広川)

(1) 設禁井

設禁井は“画羅城（羅城を画く）”と一般的に言われる。先ず自身が勅変をして、また一方の足を踏み、指を差し出す。曰く：

「祭文」

(2) 収邪師

人には真偽があり、師にも正邪がある。これは社会生活のありさまをうつしている。昔から邪は正を侵さず、これは発展の法則である。自身の安全を保つ為に、先ず邪を抑え、邪を除くことをしなければならない。ここでとらえる邪師は次のようである。

「祭文」

同時に、風、虫、鼠をとらえ、醮壇を清浄に保つために、とらえたものは白幡の下に埋められる。

(訳：李)

(3) 下禁壇

下禁壇ではすべて呪語¹⁷、密語¹⁸を用い、罡歩と手訣を同じく施す。ここに数段を収録する。:

¹⁷ 古い道教が由来であり、巫術の言葉。言葉を発する事によって力を発する（言霊）の思想を基とする

¹⁸ 一つのグループ内で通用する言葉。隠語と言ひ換えられる

「祭文」

度戒落禁壇は、三段階の作法に基づいて収禁を行う他、この北極驅邪院醮壇の名義で“入壇落禁”のひとくくりの疏文を發する。

(訳：三村)

1 1. 發功曹

發功曹は、道壇科儀になくてはならない科儀の内容で、度戒中の發功曹は引度師と紙縁師が主宰し、功曹位で功曹を發する。

「祭文」

功曹を招聘した後“通意”を行い、“説明意者”を用いて今回の度戒の経過を明らかにする。角笛を3度鳴らして功曹を發する。功曹は招聘状を持ち運んで走り、天を通り地に達し、あの世へ出入りする。ここに“天府功曹脚引”と“天府請状”を書き写す。脚引は、

「祭文」

天府請状は、

「祭文」

(訳：佐川)

1 2. 上光・奏表

度戒儀礼の請聖科儀において、招いてくるのは“大位神明(位の高い神々)”であり、儀礼の執行者は、ただただ頭をたれて“礼聖”を行い、“天を仰ぎ神々を望む”事は出来ない。これは神聖不可侵の等級差があり、畏れ多いという心理状態を表しており、それが醮壇の厳粛な場面を作り出す。しかして“上光”はすなわち光の字を用いて、師父の貴重な、神妙で幻想的な形式で書物を述べる神を楽しませる科儀である。演者は儀礼の進行に基づいて、動きを活発にして、自在に知性を發揮して、一幕、一幕と芝居的な熱気のある場面を演出する。つまり“神を喜ばせ人も楽しむ”である。儀礼は上光、猜光、引光、献光、脱童の諸段に分けられ行われる。

(1) 上光

上光は師を拝する儀礼で、師郎(学徒)は“上光童子”の身分で師を拝し法を学ぶ。請師は、拝師の後に道袍を着、道帽を戴き、然る後に神頭を戴いて“神頭歌”を唱え、羅帯を身に帯び“羅帯歌”を唱え、神杖を持って“神杖歌”を唱え、銅鈴を持って“銅鈴歌”を唱える。正式な登場に際して、まず以下のよう唱える。

「祭文」

続いて唱える：

「祭文」

罡歩（七星罡を行う）を行った後、いわゆる上光童子の魂は師父に宿り、天曹地府に遊び、夢幻世界に進む。罡歩の時に以下のように唱える。

「祭文」

上光歌を唱える：

「祭文」

（訳：広川）

（2）猜光

光の強弱に依って、師郎の陽剛正気を現す。陽剛正気を以って師道興隆を際立たせる。正気を助け、邪気を抑えて、正教を執行する。問答形式によって光の強弱を表し、人の体と魂になぞらえる。曰く：

「祭文」

（訳：李）

（3）引光

“引光”は“上光童子”が法を学ぶ故事を述べる。法を学ぶ者を導いて“幻境”に入らせる。唱歌で述べる。

「祭文」

（4）献光

献光は“引光献”とも言う。これは引光童子献功曹使者に献ずる故事の一段であり、瑶族の歌体を用いて叙述する。

「祭文」

（訳：佐川）

（5）接師接聖

引光童子が功曹に献じた後に、功曹が手紙を伝奏して、師父を呼び出し、三清やその他の神々を呼び出すという歌があり、それを「功曹判」という。まずに師父を迎え《師父歌》、《祖師大尉歌》、《李十二》、《李十一》を唱え、その後三清を迎え《上壇三清歌》を唱え、下壇を迎え《下壇歌》を唱え、盤王を迎え《盤王歌》を唱え、海番を迎え《海番歌》を唱え、張天師を迎え《張天師歌》を唱え、李天師を迎え《李天師歌》を唱え、雷霆六師を迎え《雷霆歌》を唱え、四府を迎え《四府出世歌》を唱え、李王を迎え《李王歌》を唱え、四州神を迎え《四州歌》を唱え、観音を迎え《観音歌》を唱え、唐葛周三將軍を迎え《三將軍歌》を唱え、黄衣使者を迎え《黄衣歌》を唱え、竈王を迎え《竈鬼歌》を唱え、家先を迎え《家先歌》を唱え、土地神を迎え《土地歌》を唱え、本命を迎え《本命歌》を唱え、土主を迎え《土主歌》を唱え、元宵を迎え《元宵歌》を唱え、上元を迎え《管干歌》と《上元歌》を唱え、仙娘を迎え《仙娘出世歌》を唱え、公王を迎え《公王出世歌》を唱え、大堂白馬を迎え《大堂白馬歌》を唱え、白象を迎え《白象出世歌》を唱え、麒麟を迎え《麒麟出世歌》を唱え、獅子を迎え《獅子出世歌》を唱え、猛虎を迎え《猛虎出世歌》を唱え、南蛇を迎え《南蛇出世歌》を唱え、犀牛を迎え《犀牛出世歌》を唱える。

(6) 賞師運銭

師を迎え、神を迎えた後、師父に感謝して歌うのは《賞師歌》である。紙の馬をそなえて唱えるのは《紅銭呪》《紙馬呪》で、紙の馬を納めた後に運銭童子に銭を運んでもらう事を頼んで歌うのが《運銭齋》である。

(7) 脱童帰去

脱童は、引光童子が上光した後に、天曹地府に遊んで、師を拝して法を学んで人間界に戻って来た一番最後の儀礼である。その際に《脱童歌》を歌う。

(訳：広川)

(8) 奏表

上光はこの後に行われる道壇科儀のために師を招き、神を喜ばせることである。今回の上光は、《初夜神知黄表》を奏上して施設する。上光“脱童帰去”の後、主醮師、引度師によって醮壇の外の“文台”の上で開天門をして、黄表を奏す：

「黄表」

1 3. 請中夜聖

初夜黄表を奏して、初夜道場の終わりを宣し、中夜道場に入る、規縁師によって“排盞（並べた皿）”を出し、証盟師、保挙師、総壇師、同壇師にうけとってもらった後、請中夜聖を行う。請聖の順序、内容、做作は“初夜聖”と大体同じで、度戒儀礼のポイントとなる段階に入るので、“鬼名”を呼んでそろえる。“過牙相請、過牙相催”と3回唱え、そして陰卦によって神がやってきたかを一つ一つ確認する。それにより神々を招聘することの敬意を表す。

請聖は、先ず各自“御名意者”を用いて自己紹介をし、身分を説明する。その後、証盟師、保挙師が“碼

頭意者”を用い、「中夜道場」以後の法事の手配、度戒儀礼の理由、会首が召集されたこと、入壇の経過、初夜道場の手配（すでに済ませた儀礼は再述しない）を神々に通知する。

証盟師、保挙師は度戒儀礼を行ったことのある“三戒弟子”であり、“開天門”の儀礼を行う資格を持ち、天の神と直接に意を通じることができ、今回の新度師男に対する証盟、保挙の責任がある。したがって、“大位神明”を請う時には必ず証盟師、保挙師がお辞儀して請う。

総壇師、同壇師は掛灯儀礼を行ったものの、度戒儀礼を行っていない巫師である。道壇法事について比較的詳しいが、“開天門”の資格を持ってない。彼等が“大位神明”を必要する時に、証盟師、保挙師がその場において、はじめて請え、神の権威の尊厳なことを表している。

14. 升刀

昇刀は、又“昇刀山”とも言い、“攀刀山”のために準備する模擬儀礼である。

主醮師、引度師によって登場して科儀を演じる。貸りてきた13本の軍刀を醮壇の真ん中に積んでおいて、祖本宗師を礼拝した後、それぞれ側に立って、「取刀」、「試刀」、「磨刀」、「運刀」、「架刀」、「封刀」等の模擬動作をする。

毎回各々2本ずつ刀を取り、片手で刀の峰を持ち、もう片手で刀の柄をもって、ひざの上において刀の良し悪しを試みてから、刀を磨ぐような動作をして、そして刀を“衆位家先堂”の前に運んできて、地上に横にして、3回往復する。12本の刀で6段のステップのある梯をつくる。一番上に横に並んでいる保命刀はまたの名を“祖師刀”とも称する。

引度師は朱丹を用い、それぞれの刀の上に子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥という12の時刻を順に書くが、保命刀の上には字を書かない。

主醮師は秘語を念じ、手で字を画く。令勅して壇、梯、刀を変化させる。これを刀山一座を升起させるという。

15. 攀刀山

攀刀山は、また“攀刀”、“翻刀山”とも称し、度戒儀礼の中で三戒の試練の一つであり、受礼者が“以身試法（身を以って法を試す）”の第一度である。

刀を登る前には、親戚によって受礼者を受け止める準備をする。6人で梯隊をつくり、両側3人で向い合って立って、2人で手と手を交差して繋げる。

主醮師、引度師は背に袋を負い、受礼者は道服を着て、道帽を被って、主醮師、引度師にしたがって壇を回る。

この時、太鼓と銅鑼を一斉に鳴らし、壇を回って跳ねながら前進し、花楼、十二宮門を経て、刀山のところに到り、主醮師はぐるぐる回りながら以下を念じる。：“天府功曹、地府功曹、陽間水府功曹、急急伝放陰放陽功曹、急去急回一時間。”念じた後に、即ち受礼者を担ぎ上げて、刀山の上を乗り越えさせる。

6人の梯隊は受礼者が刀山を乗り越えてくるのを待ち構えていて受け止めて、自分のサポートする人がくると助けてささえてやり、イスに座らせ、冷たい水を飲ませる。これは受礼者にこの世に帰らせて覚醒させる意味である。

攀刀山の順序は、先頭は主醮師であり、第二番手は引度師であり、第三番手は大会首であり、以後は会

首の順序によって1人1人刀山を登って行く。

刀山を登った後、すぐに醮壇の中心にひざまずいて、主醮師が出てきて刀山法を授ける。

(訳：李)

16. 磨刀

およそ上刀儀礼は全て主醮師、引度師によって自ら登場し、念入りに儀礼を行う。2人はそれぞれ一方に立ち、両手には刀を持つ。刀を磨ぐというなかで送刀、磨刀、封刀、紮（たばねる）刀、試刀と架刀の6つの場面の模擬動作を行った後、磨刀師に渡して持って行かせる。

(1) 送刀

主醮師、引度師は13本の“攀刀山（刀の山によじのぼる）”で使った軍刀を白い布で2包みに包んで、送刀舞踏科儀を行う。俗に“耍刀（刀をあそぶ）”と称する。刀をあそばせた後、包みにくるんだ刀を2人の磨刀師に渡して、磨刀師は背負って、隠れた山の中の流れのあるところへこっそり行き、隠れて刀を研ぐ。

(2) 磨刀

磨刀は2人の磨刀師が具体的に完成させるが、主醮師、引度師は常に観察し、刀を研ぐ指導をする。刀は刃こぼれが残らないように鋭く研がなければいけない。上刀梯の時、刀を踏んでも脚が傷つかないためである。

(3) 封刀

磨刀師が刀を研いだ後、やはり白い布で包み、それを持って醮壇に戻り、“衆壇”の下に置いておく。主醮師は外部の人が気がつかないうちに、封刀術を行う。しかる後、再び磨刀師は刀をたばね、そして主醮師が再び呪法を用いて勅して刀梯を変化させる。ここに幾段かの公にされた法語を抄録した。以下のものである。

「祭文」

(4) 紮刀

紮刀はすなわち梯子に刀をたばねることである。主醮師は1回目の「封刀」の後、磨刀師は初めて刀梯をたばね始める。紮刀梯は一般に“雲台”の側、或いは隠れた山の入り口で行う。刀梯は約2.5メートルの杉の枝を用いて主な骨組みとして、12本の刀を交差して用い、6段の刀梯をつくる。梯子の上の横に置く1本の刀は保命刀である。まず竹ヒゴでしっかりと固定する。それから長さ4メートルの2枚の白い布を刀梯の刀の柄と刀の峰を巻きつける。長さ1枚4メートルの白い布で刀を覆うと、刀梯ができあがる。

(5) 試刀

主醮師は再び勅して刀口と刀梯を変化させた後、磨刀師は刀梯を立ち上げる。先に自ら試しに刀梯を上

る。試刀は故障がでなければ、磨刀は成功だといえる。もしも故障が出たなら、もう一度磨刀、拵刀を行って、主醮師が再度封刀をし、試刀が成功するまで行う。試刀の後、主醮師は1本の刀ごとに“霊符”を貼り、第3回目の封刀を行い、日の目を見ないように白い布を被せる。

(6) 架刀

刀梯が仕上がった後、主醮師は受礼者を引き連れ、雷のごとく太鼓や銅鑼を打ち鳴らし、刀梯を迎えて壇に戻り、磨刀師は刀梯を醮壇へ担いで運んできて、醮壇の大門の上に横に架ける。ここまでで磨刀儀礼は、最後に完成したと言える。

(訳：三村)

17. 上光

この度の上光は“四府良願”の願ほどきのためであり、また神を喜ばせるためでもある。上光科儀は主醮師・引度師・証明師・保拳師の弟子が出演する。上演の順序は前の上光と同じで、“意”を説く時に重点的に“四府良願”を述べる。師父が祭場に降りてくるように願う。

18. 還四府願

度戒の人員が確定すると、各々真心を表すために、宗教者に依頼して家において“四府宝書良願”の願掛けをする。念じて曰く：“恭しく四府群仙聖徑位の前にひざまずいて、供物を供えて叩頭して3年の良願の願掛けをします。神恩の加護を蒙り、災から逃れ、家が安泰であるように。願掛けにおいては願がかなえば、白紙・銀錢120分をささげ、度戒の時すべて奉りお返することを約束します。”

“四府願”をほどく儀礼は度戒科儀の順序に入れるが、これは度戒中願ほどきをするためである。“家の星めぐりが悪いことを恐れて、謹んで度戒中にお礼をします。さらに家族全員が真心をこめて、うやうやしく線香とろうそくとその他の供物を整えます。今月△日において万事うまくいくように。”主醮師がまず《還四府願大疏》を奏上し、さまざまな願をほどく。願ほどきは香案を設けず、1人1人の会首が家から米の箕を1個用意し、“四府願”の願ほどきに用いる。願ほどきの時、各会首が用意した箕を長いテーブルの上に並べ、1個の箕に10個の飯椀を用いて酒を盛り、7個の粽を入れる。その後、主醮師・引度師・証明師・保拳師が各々責任を持って会首が持ってきた“四府願”の願ほどきを担当する。願ほどきの後、酒を功曹・四府に献じ、埠老をつかまえて願ほどきを検証させる。埠老をつかまえる法術は、まず3杯の酒をテーブルに並べ、1杯の酒を飲み、1段の歌を唱え、法名を呼ぶ。酒を衆壇の上に置き、第1、2位の埠老には掛灯儀礼の法名を用いることができる。第3杯目で叫ぶ埠老の名は、必ず度戒を終えた法名でなければならない。その第3段の歌詞は次の通りである。

「祭文」

(訳：佐川)

19. 上光

今回の上光では、書表師が“合星拝斗”の儀礼を行って、上光を行い神を楽しませるのである。書表師

の弟子を登場させ演じさせ、儀礼の内容は前回とほぼ同じであるが“造表上星”を主として奏する点が異なっているが、その他の儀礼は大体同じなので、ここでは述べない。

20. 合星拝斗

度戒儀礼において、ただこの“合星拝斗”のみが書表師により単独で行われ、2段階に分けて進行される。

(1) 合星君

度戒儀礼に先立って、各会首は自分の生辰を書表師に書き送っておく。書表師はそれを本にして北斗七星の中から一つの星を決める。1989年の度戒儀礼における“賀星疏”には書表師は以下のように書き記している。

「祭文」

書表師は会首がきちんと書いた生辰に照らして、受礼者の夫婦に1枚ずつの“星辰牌”を与える。そして紅い紙を用いて“星辰大牌位”を書く。

(2) 拝北斗

書表師は先に醮壇の前に据えさせた“文台”で角笛を鳴らし、天門を開き、道場に神々が来臨するように請う。醮壇から花楼にもどり“修設太上正一完灯三戒奏名清醮一供”の儀礼を行う。まず先に《賀星疏》を奏し、受礼者は順番通り1人1人壇の前で跪き、恭しくこれを聴く。次に“星辰位”を拝する。各弟子たちは手に“星辰牌”を持って、北斗星君を拝する。その時に書表師は以下のように唱える。

「祭文」

21. 補掛三灯

決まりによれば、度戒に参加する者は、必ず各自の家の中で還家願儀礼の掛三盞を掛ける儀礼を行っていただなければならない。今回の度戒儀礼においては6人の者が未経験者であったため、補って行われなければならない。掛三盞は“小羅明灯”とも言われ、黎十六、李十二、李十一の3人の大法師を敬うという事である。第一の灯は家が、子々孫々にその灯を伝えるという未来を意味する。第二の灯は祖先から代々継承するという事である。第三の灯は三位の法師の教えを伝えるという事を表す。竹を用いて作られた品の字形に灯台を受礼者の前に据える。受礼者は特に設えられた“老君こしかけ櫂”という椅子の上に座る。掛灯師は3杯の杯を用意しておいて、灯心と茶油を満たして火を付けた後、師と弟子が2人で盆を大門の外へ持ち出し、天と地に対して《昇灯詞》を奏する。これを昇灯と呼ぶ。昇灯の後、盆は受礼者の前に運ばれ、順番にしたがって台の上にのせられる。掛灯師を奏する。これを掛灯という。掛三盞は家の祖先に捧げられる。その後3尺6寸の白布を間にわたし、掛灯者に撥兵（米を用いる）、撥法（卦を用いる）、鎮法（刀を用いる）、分兵（米を用いる）、伏罝（ステップを踏む）、伏訣（印を結ぶ）を与え、最後に掛灯者は

《紅錢呪》《紙馬呪》《小運錢》を念じて紙銭を燃やし、師に感謝の意を表す。

2 2. 掛十二盞灯

十二盞灯は“大羅明灯”と称され、掛灯儀礼の内では最高位のものである。主醮師によって主宰され、《伝度完灯進星延生保安清醮道場一供》が設けられ、《伝度完灯星辰大疏》がひと通り奏せられる。

「祭文」

儀礼のかたちは掛三盞儀礼と同じで、掛灯者は“老君櫓”に座して、彼の前に立てた灯台には12皿の油の灯明が置かれる。15人の受礼者の都合、180皿の灯が同時の燃える様は星のまたたきのように、明るい光を放つ。

(訳：広川)

2 3. 開天門

開天門は開大天門と開小天門の2種類に分かれている。大天門を開くにせよ小天門を開くにせよ、両方とも度戒儀礼を経た三戒の弟子によって行わなければならない法事である。小天門を開くのは必要とする科儀の中で行う。度戒科儀の中に13回の小天門を開くことがある。毎回の開天門ごとにまず壇内で先に師の加護を願う。師に守ってもらうように、道服を着、帽子をかぶり、法器を手に持って祭場を歩み出し、用意した“文台”の上に立ち角笛を鳴らして天門を開く。角笛を吹くことは“発角”と称して、《大発角》、《小発角》に分けることができる。ここに記録したのは《大発角》である。

「祭文」

7回角笛を鳴らした後に天門を開いて、神々を迎え、兵を並べる。《御名意者》、《埠頭の意者》を奏して、天門を開く理由を説明し、それから“送聖回宮（聖を送り宮にかえ回す）”を行う。念じていわく、

「祭文」

それから紙馬を渡し、兵を派遣し、水を勅し、剣を勅し、米を勅し、幡を勅し、旗を勅し、橋を架け、神々を送って橋を渡して宮に送り、礼拝して天門を閉ざす。今回の開天門は、引度師が受礼者をつれて開天門を学ばせ、高穹上聖に受礼者をはじめて会わせるという科儀である。受礼者はみな法服を着て、法帽をかぶって、法器を持って、“文台”の上に立ち引度師がどのように天門を開くか見て、これは度戒儀礼の中で天門を開くという法を伝えるという科儀である。

2 4. 上光, 奏表

この科儀は証盟師、保挙師が出演して演じなければならない。先に上光を行い、その後で奏表する。神に礼拝をした後に《中夜黄表》を奏して、“修設太上鳴揚完灯三戒補職醮一供”を道場で1日2晩の儀礼を

行い、1日3回歌舞し朝度を行う。とりわけ天門は遙か遠く通信が困難であることを恐れて、謹んで文表を用意して招聘を行う。

「祭文」

師男は歌舞を行って神々を迎接する。“正果師童撥法”が今回の奏表の目的であり、また中夜道場の終りである。

科儀の中で《補充黄表》と《加職黄表》を奏して、受礼者の父親のために神職を補充し、祖先のために神職を封じて、父、祖父の二つの世代にすべて“郎”位まで進める。

(訳：李)

25. 請末夜聖

証盟師、保挙師、総壇師、同壇師が祭場に現れ請末夜聖を行う。請末夜聖を始めることを宣言する。儀礼は前の2回の請聖と同じである。法事の手配は、ただ末夜道場での活動回数を奏し、初夜、中夜で行った法事は、重ねて上奏することはできない。度戒儀礼の請聖と他の儀礼の請聖は、大体同じだが、ただし、度戒儀礼の三夜聖中では、「伝度三清賛」という一節が必ず増える。節は以下の通りである。

「祭文」

26. 回四府功曹

引度師、紙縁師によって功曹を戻す、という儀礼が行われる。この儀礼は功曹を発する儀礼と大体同じであり、その目的は《四府統関》を発し、“四府の群神を招聘し、速やかに壇に赴き、伝度を証明する事を頼む”という儀礼を行う。

27. 度水槽

度水槽とは、三つの試練の二つ目である。その試練の前に、桶を作り、桶を祭る神秘的な過程がある。桶を作るのは引度師の弟子がやることである。入壇後、時刻を選び、伐採道具を持ってひそかに山に行き、硬くない冬瓜木を探して1本切り、割ってからその中を一段えぐり、木桶とする。それは瑶族の家で水を入れる水桶に似ている。実は、これは度戒儀礼中に渡り船として、弟子を度するのに用いるものである。水桶をえぐり終えた後、山に隠しておいて人に知られないようにしておく。法事をやっている中、引度師の弟子が水槽を担いで戻って来て三清位の下に隠しておく。主醮師によって、香が焚かれ、桶を祭り、近くに隠しておき、使う時に再び醮壇に運んでもどす。

水槽は、木製の船形で、長さ約80センチである。度水槽の時、醮壇の片側に、むしろを15張（受礼者ごとに1張）敷いておく。水桶は、三清位側に隣接させて置き枕として用いる。度戒儀礼を行う時、受礼者は2人に支えられて銅鈴を振りながらぐるぐる周り、花楼に至り陰橋を越えて、そこで意識がなくなり、支える2人は受礼者を担いでむしろの上に仰向けに寝かせる。水桶を枕にして横になり、体の上には長さ約2メートルの“太上老君朝簡賜波浪水槽一面”と上書きされた“老君棍”を置く。頭のところに1人が

立ち、手に水壺を掲げているのは、海水の波を象徴している。脚部のところに1人が立ち、竹筒を手にもっているのは、船を漕いで川を渡ることを象徴している。主醮師、引度師らの、12名の師公¹⁹は皆“師棍”を手に持ち、1人1人その脚を跳び越える。そして“榜上有名”と唱え、再び受礼者を運ばせる。このように1人1人順番に試練をくぐらせる。度水槽の後、主醮師は発水槽の法術を行う。

度戒儀礼中の三度の試練は攀刀山（刀山によじ登る）、度水槽、度棘床を指し、3回とも全て“放陰”の法術を用い、受礼者を正体不明にさせ、“陰度”して冥界に赴かせるという事は、主醮師が秘かに行う一つの法術である。攀刀山を行う時、主醮師は、先頭に立って刀山を登り、受礼者を率いて串壇を行い、花楼から十二宮門に至り、陰橋に近づいた時に急ぎ“天地水陽四府功曹、急急伝令放陰功曹、急去急回一時間（天地水陽四府功曹よ、急急に放陰功曹に伝令せよ、急去し急回すること一時の間なれ）”と念じる。すると受礼者は正体不明となり、度師は彼に刀山を登り越えさせる。しかし度水槽、度棘床では、すなわち“兼控の法術”を取り入れており、“上班定条梁”と称す。これは瑶語の篩話である。漢語に訳せば、“上界定陰陽”であり、“女は陰である”という概念を用い、“王姥”が陰陽を司っていることにより、広い範囲で“陰界に下る”手段を施して三戒の儀礼を行うのである。この儀礼は、主醮師が1人で行い、他人に教えない。私たちは知っている人を探して雑談をし、知り得たところによれば、主醮師は1本の小さな木の枝を用い、家庭で使用する小さい秤に模して、木の秤を“天秤”の替わりにして、勅変の後に“天橋”の上にかけて、秤の鉤にひ掴みの茶葉（茶と查の発音が同じであることを利用している。つまり禁で「查」の意を表している。）をかけ、秤の尾に1個の分銅をのせて陰陽のバランスを定めると言う。再び呪語を用いて点化して神聖な物に変化させる。その呪語は知りようがないが、引度師の秘本に以下のような2段の文字を発見した。

「祭文」

（訳：三村）

28. 上刀梯

2名の磨刀師が刀梯を醮壇大門の上から下ろして受け取る。前方では梯子を担いで、鳴り物は後からついてくる。主醮師・引度師が度戒者²⁰の関係者一同を引き連れ、度者夫妻は、夫が前で妻が後に立ち、頭の上にゴザ1張をいただき、しずしずと“雲台”の脚下に行列し到る。ゴザを広げ、夫妻が傍らに立つ。

磨刀師が担いできた刀梯を“雲台”の東側に斜めに架け、白布を取り去ると、真っ白な鋭い刃が現れる。刀梯の両側に書表師が勅変の護符を貼るが、これは12枚の刀梯の護符である。鶏血で祭ってから刀口を封じる。刀梯の右側には1枚の虎に乗った梅山祖師の神軸を掛け、左側には1枚の刀梯祖師である海番張趙二郎の神軸を掛け、“雲台”のあたりは厳粛な雰囲気を表している。

証明師は“文台”で開天門をし、師と神を迎え、これら師・神は現場で法術を助け、＜刀山黄表＞を唱える。保拳師が水椀を手を持ち刀梯に向けて、“白鶴神水”を吹き付ける。主醮師・引度師は＜変梯法＞＜変刀法＞を念じ、度戒者はゴザの上に座り、靴下を脱ぎ去る。主醮師・引度師はまず度者の足の上の甲に少し間をとって符を描き、呪を念じ、手訣を結ぶ。最後に自分の足に符を描き、呪を念じ、手訣を結ぶ。

¹⁹ 原文では「師道公」となっている

²⁰ 受礼者に同じ

主醮師は<上刀梯歌>を唱え、一步一步“雲台”の上に上るが、<上刀梯子歌>の歌詞は次のようである。

「祭文」

引度師は体を3丈6尺の白布で縛って邪気を祓い、陰度者²¹を背負って、二番目に刀梯を登る。その後、度者の会首が1人1人順番に上刀梯を行い“雲台”に登る。引度師が雲台の上で大天門を開き、天神地祇・祖本宗師（宗教者の祖先）に対して上刀梯の成功を助けたことを感謝する。度戒者は“雲台”の上で牛の角笛を吹き、<御名意者>等の法事用語を述べるができる。

29. 抛老君印

抛印は“抛牌”ともいい、上刀梯に続く科儀である。度戒者全員が刀梯を終えると、しばらく休息し、引度師が開天門を行うのを見る。その後梯子の後から降りてきて、歩いて刀梯の前に到り、主醮師が“抛印”を行うのを待つ。主醮師は“雲台”の上に立ち、まず印に勅してから、その後抛印する。度戒者である会首の順序にしたがって夫妻同時に刀梯の前に立ち印を受ける準備をする²²。主醮師がまず“太上老君”印を男の度戒者に投げ、あとで“太上王姥”印を度戒者の妻（厠女）に投げる。いずれも前掛けで受け取り、投げ落とされた印が表を向いていれば吉であるが、裏を向いて字が見えなければ不吉とされ、再度抛印する必要がある。主醮師は抛印をしながら、同時に“勅印歌”を歌う。歌詞は次のようである。

「祭文」

抛印のあと、主醮師が刀梯を降りて刀を取り除き、一步降りるたびに手で刀梯の両側にかかっている白布を取り払う。刀梯を降り終えると、白布はすべて取り除かれ、木の骨組みと刀が現れる。刀に貼った護符は多くの人に剥がされるが、それは魔を祓うために用いられる。刀梯を取り去る前に、刀梯を終えた度戒者が刀梯に跪いて、主醮師が刀を祓うのを待つ。この時刀山法を伝授される。撒刀の前に主醮師・引度師は対句を述べるが、これも伝法の内容である。その詞は次のようである。

「祭文」

（訳：佐川）

30. 度棘床

度棘床は三つの試練の最後の一つである。方法は以下の通りである。醮壇のある片側の土の上に四角に四つの碗を伏せる。その中間に12枚のゴザを敷き棘床をつくる。受礼者は象徴的に紅布でくるまれた7本のサイカチの棘を肩にかける。銅鈴を手に持ち揺り動かしながら、花楼から陰橋を経て棘床にいたる。精神が即刻に喪失状態になり、銅鈴を落とし、いわゆる“下陰”の状態となる。人に支えられて、サイカチの棘から解き放たれてかつがれて仰向けに棘床に寝かされ、頭の方で1人が水壺を持ち、脚の方に1人が

²¹ 度戒者の父の世代でまだ度戒を受けておらず、ここで代度してもらうのである。小さな令旗はその靈魂を表す

²² 2008年の度戒儀礼では妻のみに行われていた

朱筆でかかれたおよそ6尺の長さの木牌すなわち“△△△会首太上老君賜棘床一座”と記したものをもち、受礼者の胸のところに置く。12人の巫師が登場し、その職務の大小に応じた順序で1人ずつ受礼者の脚を“神杖”に寄りかかって土の上に突いて身をささえながら跳び越える。その時“榜上有名”と唱えた後に担ぎ出す。先の“拳刀山”“度水槽”の二つは会首の序列通りの順で試練を乗り越えて行ったが、この「度棘床」の順序は順逆となっていて最後の会首から先に渡すのであり、大会首は最後に行くという順序である。その意味は不明である。

3 1. 棒火石

棒火磚については次のように説明しなければならないであろう。すなわち山里に特有のもので、石があっても磚が無い場合、ただ“鵝卵石”を火磚の代わりにするしかないのであると。よって火石と呼ばれる。火石は主醮師の弟子が山中に行き、丸く滑らかな鵝卵石をさがして丁寧に磨き上げ、袋に入れて背負って来る。三清殿の下にかくして、主醮師が勅変した後、規縁師に渡す。この祭儀に先だって規縁師は醮壇内で火を起し、こっそり石と鋤先を火にくべ、火を大きく燃え上がらせる。夜中になるのを待って、儀礼は行われず、人々はその場をはなれている中で、主醮師、引度師が受礼者達を連れて火を囲み、主醮師は打火堂呪を唱える。手には法水を持ち、引度師はゴザをもって灰を扇ぎ、主醮師は法水を口に含んで吹き付け、「祖師急急来度法」と一声唱える。水の碗を置き、火中の石を捧げ持って花楼を数回まわった上で引度師に渡す。引度師はまた数回まわって弟子達に与え、弟子達は師匠のやったように真似をする。まず“雪山水”で手を洗い、1枚の紙銭をぬらして、素早く前の人がまわして来た石を受け取って手の上で転がし捧げて、手が少し熱さを感じたら次の人に持たせるために渡す。火石の温度が下がって青くなって、もはや捧げ持てなくなるまでは続けなければならない。

3 2. 奏迎兵表

引度師によって天門が開かれ迎兵表が奏せられる。これは3種類あり、一つは《日里午迎兵黄表》である。

「祭文」

あとの二つは補充迎兵表と加職迎兵表である。この二つの様式は似ており、以下の通りである。

「祭文」（この奏表は奏青詞の時にあわせて焼かれる）

3 3. 游兵游将

游兵游将は奏迎兵表に続く儀礼で、現地の人々は“游郷”と呼ぶ。引度師によって主宰される外の儀礼である。まず醮壇で神兵の出兵を訴え、執香師が頭上に漆塗りの茶盆に3本の線香、三つの旗を立てた香炉を押し頂いて醮壇から出游し、先に進む。1人が“行兵大火牌”を持ち道開きをし、引度師は受礼者とその妻に陪郎、陪娘をつきそわせて引率し、それぞれ対になり、白い紙の扇と“職位火牌”をそれぞれの手にもたせる。火牌には次のような文が書いてある。

「祭文」

お付きの人達は夫婦のために“紅花紅傘”をさしかけ、^{くろ}玄い上着に^{あか}朱い前掛けをつけ、前後に楽隊を連れ、山を越え谷を渡り、溪流をまたいで村々を回る。その様子は趣深く、遊郷は最後に“雲台”を通過し、帰りは違う道で祭場に戻らなければならない。

3 4. 籤名押字

籤名押字は遊郷と連続する儀礼である。遊郷から醮壇に戻る途中で、紅顔・黒顔の2人の将軍が現れる。紅顔は醮壇を守護し、黒顔は遊郷の列の後につき、新度師男²³を護る。新度師男は醮壇に戻るのに三つの関門を越えなければならない。書表師が醮壇の外に第一の関門を設けている。紅顔・黒顔将軍が道を塞いで取り調べをし、書表師に火牌を渡して調べさせる。書表師は検査の後に“老君印”を押す。紙縁師は火牌を調べる机を設え、検査後に職位火牌の上に“十”字を描く。これを“押字”と称する。これが第二の関門である。第三の関門は総壇師、同壇師が醮壇の入り口に設けられた机で火牌と押字の検査を行い、これでやっと最後の関門を通過したという事になる。度戒者は醮壇に入り、職位火牌を十二宮の前に座っている主醮師、引度師に渡す。これは度戒者は既に神職に就任して官僚になることの良さを味わったということの意味する。三つの関門を経ている間、検査の時に問答をする者が故意に間違え笑いを誘い、戯れおどけた言葉をはさむのである。突然一同が大笑いをし、雰囲気盛り上がり、厳粛な度戒儀礼の中にあって楽しい趣を与えている。

(訳：広川)

3 5. 升老君職位

新度師男は昇老君職位を通過して、正式に三清の認めた神職を得る。生前には“驅邪打鬼（邪気を追い払って鬼を退治する）”一方の平安を守ることができ、死後には“受人香火（人々から線香や蠟燭を受ける）”一方の正式の神になる。これは新度師男の一生の願望である。

職位火牌は、書表師によって新度師男の生年に基づいて金木水火土という五行と東西南北中央という五位に互いに合致させ、昇職の方位を推定し、昇進の任地（例えば馮法天が水命に属すれば、職位は山西太原の符正印官職に任じられる）を確定し、遊郷の時の職位火牌行を書き出す。しかしまだ、三清の許可をもらっていないと、遊郷から戻って来た後に、再び十二宮門の三清の前で、該当する方位の州名を一つ一つ唱えて、そして1枚の黄色の紙を手を持ち、三清の画像に近づく。もし三清の許可を得れば、黄色の紙はすぐ三清画像の上に貼り付け、職位が成立する。

3 6. 上光

今回の上光は、賀青詞を奏し、神を楽しませる上光を行う。科儀は前の上光と同じである。総壇師、座壇師は上光をして“青詞”を賀す。書表師は“青詞”をそなえ奉る。

²³ 受礼者、度者に同じ

その方法は、規縁師により1羽丸鶏を殺し、5杯の酒を盆に並べて、書表房に持って行き、机の上に置き、今回の受礼者の先代の補充師、加職師に備え奉り、郎位に入らせる。

37. 奏青詞

醮壇の外の長い“文台”の前で、木製の棚を立て、受礼者は自分の“文台”の前の木棚の上に3個の木箱を置く。1個ずつの木箱には米を6升入れて、2箱は“平度”であり、1箱は「陰度」である。陰度用の米箱のうえには、加職、補充男女の陰陽二據、補充黄表、補充誥文、補充・加職迎兵表、補充・加職珠詞、補充黄榜、加職黄榜がある。平度箱に置くものは、男女陰陽二據、老君印、王姥印、1刀（100枚）紙、1本の筆、ひとつの墨がある。

科儀の過程は、主醮師、引度師、証盟師、保挙師が醮壇で経文を唱えて神に訴え、そして“文台”の前に行って大天門を開いて、疏表を宣読する。その後に陰陽二據の中の陽據、老君印を抜き出す。その他の文牒疏表等の物は“疏籠”に納め、線香、そうろう、紙銭と一緒に燃やす。奏青詞は、玉皇宛に詞を奏し、天上に記録を残すのである。そしてまた錢、穀物と任職に必要な用具を天国に送り届けるということである。

38. 上光

今回の上光は、総壇師、同壇師が兵隊を招集し、兵を分けるために行われる。上光科儀は前と同じである。

39. 招兵・分兵

証盟師、保挙師は、先ず“文台”の上で天門を開き、それから“白布の天橋”を架け、兵隊を招集する旗を用い、五方五位五騎營兵を招く。いわゆる“東方九夷兵、九九八十一万兵、南方南蛮兵、八八六十四万兵、西方西戎兵、六六三十六万兵、北方北狄兵、五五二十五万兵、中央中黄兵、三九二十七万兵”を招く。招集にあたって《大旗頭》、《大先鋒歌》を唄う。将兵に賞を与える歌である《賞師歌》を唄う。最後に安兵させる。

安兵は、先ず醮壇の前に捕捉（狩猟）、焼山（焼き山）、墾荒（開墾）、播種（種をまく）、収穫（刈り取る）等の瑶族の生業様式を模した舞踊を行う。それから“禁刀（刀を禁じる）”は足の甲に剣を置いて衆位家先堂に蹴り入れる。“場兵帰壇、場兵帰位（兵を壇に戻し、位に戻る）”という。

分兵は、先ず線香、お茶、お酒を用いて陰兵を供え祀る。その後で、新度師男は醮壇の中央に座り、主壇師、引度師が経文を唱え、神に訴えた後に、米をまいて新度師男にそえる。いわゆる“撒米為兵（米をまくのが兵である）”という。

新度師男は開いた前掛けを用いて米を受け取って、再び米を包んで家へ持ち帰って、先祖の神龕の上に置く。総壇師は各位の師男に1枚の“五旗營兵”という兵旗を授ける。

40. 開齋

開齋科儀は証盟師、保挙師が出場する。先ず規縁師が1匹の小さなブタを殺して、壇で祭る。神に礼拝をし、師に拝した後に、証盟師は《開齋疏》を読んで、“齋期完満、謹当開葷（精進料理を食べる期間が円

満で終わり、謹んで肉食を食べ始める)”を宣言する。

“完齋之礼、虔備財馬醮筵香供之儀、修建保安解齋道場一供、依教加持、淨壇解穢、拝迎衆聖齋臨、獻呈凡供、進礼三行、師童游樂開齋法事、虔備財馬……”を宣言する。

保举師は《開齋黄表》を奏す。もし“心思雑色、千愆万罪、全叩金阙赦除、祈保度戒師男身体清潔、香火興隆、賜祈合家人口均安、耕種大熟、求財遂意、養畜成群”があるならば、三清位の後に保存していた酒甕を開く。

4 1. 合婚合火

度戒儀礼を行う時に、受礼者夫婦は規則を守って、互いに会話ができず、更に一緒に生活はできない。それぞれに清貧なやもめ暮らしをしている。開齋をした後に、忌明けを行い、醮壇のなかで一つの儀式が行われる。これを“合婚合火”と称する。総壇師、同壇師により模擬的な科儀が行われる。

まず1枚の掛け布団を持ち出して醮壇で“合婚”をまねる。受礼者夫妻に三清位の前で改めて結婚を行い、度戒の功德が円満であることを祝し、心を一つにして力を合わせて、再び大きな発展を祈願する。

(訳：李)

4 2. 吃合歛飯

合婚合火儀礼を行った後の1回目の食事は“合勸飯”と称し、また“老君飯”と称する。これは“老君殿”の中で食べる。受礼者夫妻はゴザを敷いて地面に座わる。半月にも及ぶ男女の束縛が解かれると、気持ちは特に晴れやかで、至るところで会話に花が咲く。規縁師は大きな碗に盛られたもち米の飯を各々に配る。夫妻は2人で1羽の丸い鶏を食べる。鶏については別名があり、“開齋鶏”と称する。鶏の頭が出されるという事は度戒の後、ナンバー・ワンの大法師になれることを表す。鶏の両羽は、2本の刃物を表し、疏文を写す際に、紙を切るために用いる。鶏の両モモは、2本の傘を表し、受礼者が家を出て法事をする時にあたって雨風をしのぐ。鶏の爪は、銭を握む手を表し、財を招き宝を入れる。ただし、金があるなしに関係なく法事をするべきである。鶏の腸は法師が法事に行く時背負う風呂敷を表す。鶏の胃は、風呂敷に包んだテキストを表す。鶏の肝は、ひと揃いの古い道具を表す。師に求めれば答え、神に求めると靈験がある。陰陽は自然の道理を表し、それに従えば万事順調にゆく。これは全て受礼者が今後、法師になるにあたっての願望に結びついている。鶏は全て食べなければいけない。飯は各人半分食べ、半分残す。夫妻が半分ずつ残した飯を一つに合わせて1碗にし、持って帰って、一家団欒の食事をする。

4 3. 宣布戒律

吃合歛飯の後でも、受礼者は依然として地面に座っており、引度師が戒律を宣布するのを聞く。戒律は受礼者が度戒儀礼の後、必ず守らねばならない規則である。今回の度戒儀礼で戒律を書いた書物を見つけられなかった。そこで引度師は自分の記憶によって、戒文の内容を話して、受礼者に対して規則を遵守するように戒め諭した。文書を探し出すため、私達はあちこちを訪ね歩いた。最終日に盤法良が彼の伯祖父のおおじの遺した《大戒文》を提供してくれた。その重要な部分を抜書すると：

「祭文」

4 4. 上光

今回の上光は、度戒儀礼の功德が完満する《謝聖黄表》と《削罪黄表》を奏上するために上光を行う。証盟師、保挙師、総壇師、同壇師が共に上光儀礼を行う。

4 5. 奏謝聖黄表

度戒儀礼の功德が満たされると、神送りをする。「奏明鼓楽清醮道場」を行う。これも一日二夜であり、即時に朝度する。夜になると黄道を敷きのぼして迎請する。

「祭文」

最後に証盟師によって、功德円満を啓奏し、駕に謝して天宮に帰す。保挙師は《謝駕黄表》を奏し、鶴の乗り物に乗って帰途につくのを送る。

4 6. 奏赦罪黄表

保挙師が登場し、《赦罪黄表》を奏上する。表の中に以下のように述べる。

「祭文」

《赦罪黄表》を奏すと、書表師の任務は終わり、先に醮壇を離れる。

4 7. 上光

総壇師、同壇師により今期の度戒科儀のため最後のの上光が行われる。度戒儀礼が終わる前に師に拝礼をし、宮門を破り、壇を取り除き、神を送るために、上光を行い神を喜ばせる。

4 8. 酬謝陰陽師傅

総壇師、同壇師は上光で勤めを終えると、花楼前の祖本二師位にお供えをして、紙の馬を焚いて祖本二師、陰陽師父に感謝する。祖本二師に感謝して、今回の度戒儀礼が円満で、順調に儀礼が進み、助法を成功させたことに謝意を奏すのである。

醮壇で師に感謝し、書表師が部屋から出て、孔子の位牌を降ろし、丸鶏、5杯の酒、紙銭を用い、孔子先師、把筆童子、掌稿郎君にお礼をし、“九州学堂”に送り帰す。

(訳：三村)

4 9. 点破宮門

師に感謝した後、総壇師・同壇師が“神杖”を持って十二宮門・十二宮袋を破り、“七官”を招いて榜を取り除くのに＜七官歌＞を唱える。

「祭文」

榜を取り除いた後、総壇師・同壇師は“白鶴水”を勅し、神画を浄化する。神画は1枚1枚きちんと片付けて、所有者は1点1点確認する。最後に醮壇を破り、醮壇の天井を破って壇を片付ける準備をする。

50. 撤壇送聖

茶酒師・執香師・吹笛師・鼓楽師が醮壇を取り除き、〈香炉出世歌〉を唱える。

「祭文」

下ろした榜文・掛吊・花楼・宮門のすべての紙は、全部“庫監”に入れ、“雲台”に担いでいって焼却する。これを“龍鱗火化”という。

証明師は〈紅銭呪〉〈紙馬神呪〉を念じ、白紙と銀錢を勅変させる。〈大運錢〉を念じて、運錢童子に運搬を請い、三清および玉皇の前に運んでもらう。“この日のうちに錢を収めて庫に帰し、馬を送って鞍に帰す”ことですべてが終了する。

51. 開禁壇

主醮師が“衆位家先堂”の下の“禁壇”を開くが、これを“開禁壇”という。埋めていた“紙捻”を取り出して一つ一つ広げるが、これを“打開羅城”という。“落禁壇”を行う時に収めた邪師悪鬼が出てくるので、“紙捻”を白紙・銀錢と共に燃やす。彼らが壇場から離れて異郷の地へ行くようお金を与えて求めるのである。“開禁壇”では〈開禁壇詞〉を念ずる。

「祭文」

禁井を開き、禁壇を撤去して邪師を送り、再び師に謝して神を並べて、紙錢を授領するように念ずる。

52. 拝師拝散

度戒儀礼の功德が達成され満願すると、規縁師が酒席を設けて12名の師父にお礼をする。この席での酒を“起步酒”と称し、酒を三巡させ新しい度師が堂の前に集まり、地に跪き、12名の瑶師に三拝する。師父に度戒が無事終了したことを感謝して拝した後、各自壇を離れる。これが“拝師拝散”である。

(訳：佐川)

53. 帯兵帰壇

受礼者は“拝師拝散”の後、醮壇を離れて帰途に就く。親族が呼んできた鼓楽師が醮壇の外で迎え、親しい友達を伴い、クツツを並べてまさに“一路笙肅一路情”で迎えて家に帰る。道袍を身につけ、「回家火牌」を持った受礼者は親しい友や九親六眷が一斉に凱旋を祝う。三戒師が“三朝門外”で開天門を行い、受礼者を迎える科儀が行われ、その後に家の先祖の位牌の前に立ち、“踢兵帰壇”、“踢兵帰位”を行う。

これは度戒儀礼中に与えられた兵馬を家の神位に配置する意味がある。1回で“師刀”が蹴り入れられたら縁起がよいとされる。その後に五谷の兵隊を招く儀礼を行う。これは度戒儀礼の後に人々が繁栄し、五穀豊穡である事を祈る意味がある。

最後に三戒師から新戒師に祝辞が以下のようにある。

「祭文」

5 4. 送船

度戒の完灯儀礼の後、宗教者を1人招いて度戒儀礼の祭場で“送船”と呼ばれる“清場”の儀礼を行う。参加者は半月に及ぶ度戒儀礼の間、天神や地祇を驚かせ、様々な魂魄を呼び寄せてしまったので、齋場の周囲の村を安寧にするためにもう1度“清場”の儀礼が不可欠である。その儀礼は以下のようなものである。

宗教者は竹籤を編んで小舟を作り、紙銭を乗せ、醮壇のあった地面の上に置き、香や茶や酒を供え、古師を招き、儀礼を行う理由を説明し、“送船”儀礼を助けて貰う。まず、“破武運住貧、虎府伝朝斗”の方位に基づいて罡歩を踏み、勅船する。その後2人がかりで“船”を抱え、村の狐魂や餓鬼を探し、宗教者は勅変の法術で道切りを行い、村内の家々の戸口にお札を貼る。船は村の下手の川べりで桃の符を刺し、路を断って以下のように唱える。

「祭文」

最後に竹ヒゴの船を川辺で燃やし、水によって東海へ向かって流し、孤魂も餓鬼も戻ることは出来なくなる。これで度戒儀礼の全てが終わる。

度戒科儀配列

日時	時刻	科儀名称	順番	所要時間
11月4日	午前	立堂	1	2時間
	午後	落兵	2	2時間
	夜間	封小齋	3	2時間
		一次撥兵	4	2時間
11月8日	夜間	封大齋	5	3時間20分
		二次撥兵	6	1時間30分

11月9日	午後	串壇迎聖	7	2時間30分
	夜間	請初夜聖	8	3時間
		落禁壇	9	1時間30分
		發功曹	10	1時間30分
11月10日	午前	上光・奏表	11	3時間
		請中夜聖	12	3時間
	午後	升刀	13	1時間30分
		攀刀山	14	2時間30分
		磨刀	15	1時間
	夜間	上光	16	3時間
		還四府願	17	2時間
11月11日	午前	上光	18	3時間
		合星拜斗	19	2時間
	午後	補掛三灯	20	2時間
		掛十二皿灯	21	2時間30分
	夜間	開天門	22	2時間30分
11月12日	午前	上光・奏表	23	3時間30分
	午後	請末夜聖	24	2時間
		回四府功曹	25	1時間30分
	夜間	度水槽	26	3時間
11月13日	午前	上刀梯	27	3時間
		拋老君印	28	1時間

	午後	度棘床	29	3 時間
	夜間	捧火石	30	3 時間
11 月 14 日	午前	奏迎兵表	31	1 時間
		游兵游将	32	2 時間
		籤名押字	33	30 分
		升老君職位	34	30 分
	午後	上光・賀詞	35	3 時間
	夜間	奏青詞	36	3 時間

11 月 15 日	午前	上光	37	3 時間
		招兵・分兵	38	1 時間 30 分
	午後	開齋	39	1 時間
		合婚合火	40	1 時間
		吃合歡飯	41	1 時間
		宣布戒律	42	1 時間
	夜間	上光	43	3 時間
		奏謝聖黃表	44	1 時間
		奏謝罪黃表	45	1 時間
11 月 16 日	午前	上光	46	3 時間
		酬謝陰陽師父	47	1 時間 30 分
		点破宮門	48	1 時間

	午後	撤壇送聖	49	3 時間
		開禁壇	50	1 時間
	夜間	拝師拝散	51	1 時間
11 月 17 日	早朝	帯兵帰壇	52	
		送船	53	

(訳：広川)

四、今と昔の科儀の異同

1. 過去の科儀次第の構成

儀式の過程と構成は、伝承されるうちに変異し、ある時は、特殊な原因によって乱れを生じることがある。私たちは趙子鳳、盤日古、盤孝古等八人の師公を採訪し、そして彼らと過去の法事の次第の構成を照合してみると、盤老二は 1989 年に行った法事の次第が以前と同じでないということがわかった。

かなり多くの師公によると、匯源郷の瑶族の度戒儀礼は度生儀礼であるばかりでなく、巫師の出師儀式でもある。その意義と目的は、巫師はこの儀礼を通じて一般人が宗教的意義をもつ“特殊人”になることである。

度生の意義は、瑶族の人々が生きている間に神と陰兵の保護を獲得して、災を免れ、困難を避け、子孫繁栄、五穀豊穰、死後に天に昇り、神と成ることと考えている。巫師の出師儀礼の面からみれば、徒弟が神鬼と通じ、法力をもち、悪鬼をしずめ、邪気を追い払うことができるようになると考えている。

1989 年の法事の次第の構成が以前と同じでない理由は 2 点が挙げられる。

その 1 番目は、匯源郷の瑶族の度戒儀礼は 1957 年に禁止され、1982 年に回復されたが、その間の 26 年間は禁止されていた。1956 年に施主として中心的に祭りを行った巫師は 1982 年には、もう全員が亡くなっていた。1982 年において主醮師を務めた盤老二は、1956 年に行われた儀礼に参加した受礼者の中で年が若くてキャリアが少なかった。1982 年に彼が初めて主宰した度戒儀礼は、1956 年に参加した時の印象と記憶を基にして次第を構成した。また彼は教育レベルの低いことに加えて、儀礼を出来るには出来るが、法事の際の意義や関係を知らなかったため、法事の順序を逆にしたり間違えたりすることがあった。1989 年の法事の順序は主として 1982 年の法事を踏襲するのである。

その 2 番目として、いくつかの法事が逆になっているのは時間的に融通をきかせたからである。例えば、上刀梯は、吉日を選ぶことになっている。1989 年の度戒儀礼を行う際、上刀梯の時間は 11 月 13 日(農曆 10 月 16 日、盤王寿誕生日)午前という日が選ばれた。したがって、その前の法事は済ませておく必要があったため、度棘床科儀を昇老君職位の後にまわされた。

(訳：李)

2. 過去の法事の内容状況

以前の法事の演出と今日の法事の内容は基本的に近く、その相違の箇所は以下の通りである。

- (1) テキストが完全に整っている。以前の老法師は、すべてのテキストを書写し、分類し、編じて、綴じ本にしていた。使用する際の符、呪、訣、牒、疏、文、表、章等は今日より豊富である。今日のテキストの多くは完全ではない。多くの法師によれば、ただ多くは自分が必要としている部分だけであり、文献の寄せ集めで、脈絡が無く、他人が使用できない。だから、総合的な研究と伝承ができない。故に以前の巫師が文献を念じ、神招や神に訴えた時間は今日よりも長い。
- (2) 歌舞が豊富である。巫師が毎回壇を回る時、様々な一連の舞踏が演じられる。毎回の時間は約 40 分である。巫師が神招が終わる時に、木斧、竹刀、竹牌、神杖を別々に持って四方を舞うのは、出兵、入兵の兵士を訓練する動作を表している。
- (3) 模倣が完全に整っている。巫師が合婚合火科儀を行うが、これは夫婦が同床し、枕を並べ、火を起こして食事を作る全過程を模倣したもので、基本的には生活の様子をまねたものである。
- (4) 法術が熟練している。主醮師が上刀梯の時、1 段上がるごとに、刀梯をガンガンゆらし音を立て、“刀梯よ 鎮まれ”と叫ぶ。これを示すことにより、法力を示して邪鬼を鎮めることができる。巫師は熱したレンガを直接持つ。巫師は醮壇に入る際、ついでに牛の角笛を壁の上へ向かって投げると、牛の角笛は自然と壁の上にとくつく。

今日の法事はなぜか昔の法事の整った形式と細かさに及ばないので、主要な原因としては、伝承に障りがあったのである。

3. 今日中止された法事

1989 年の度戒儀礼で演出を中止した法事は 2 場ある。一つ目は、拝師拝散で、すなわち儀礼の場を解散する前に師を拝する儀式である。中止の原因は、儀礼のプログラムを決める規縁師が忘れていたためである。結果として、巫師と受礼者の不満を引き起こした。二つ目の中止された演目は、咬牲頭の法術で、これはこの法術の難度が比較的高く、現在では伝えられなくなった。

4. 法事の費用

度戒儀礼は衆壇から始まり、送船で終わる。全部で 15 日を経て、なかでも封大齋から開禁壇の正式な儀礼の期間は 9 日間である。規定によると、儀礼の入壇と散場の時間は吉日を選定する。故に毎回の伝度儀礼の総時間は 1 日あるいは 2 日の差がある。規制により、時間を短くしても 53 科目をやらなければならない。このような巫師は科儀の演目を急いでやる。三餐で酒を飲む時間を減少させた。儀礼にかかる費用は低く、規定にしたがって、わずかな“規矩銭”を集めるのみであり、これは、“香火銭”とも称する。例えば 1 回の大天門の儀式を行ったら、米 1 斗 2 升（約 8 キロ）と 1 丈 2 尺の白い布を得る。小さな法事ごとに人民元三元六角をもらう。

(訳：三村)

五、法事に対する感想とインタビュー

“三度”はすべて陰界に下らなければならない、上刀梯では足で鋭利な刀を踏んで登り、また熱した石を手持たなければならない。これは法事のすべてが神秘性を有し、この神秘性を理解するために、我々は、法事の継承者と執行者を訪問してインタビューした。

拳刀山、度水槽と度棘床は三度といい、いわゆる三度科儀を受け継ぐことで、受礼者は普通の人ではなくなる。三度すべて陰界に下らなければならず、すでに魂はあの世に至り、陰界は三度の神秘性を有する。本章第1節ですでに三度の儀式の行為と表現について述べた。受礼者は、最初は意識がはっきりしていて、空想上の陰界に入るのを待って、人は意識が遠のく。人は空想上の陰界に入らされると、完全に意識を失う。人は“神聖な空間”を出て、水を飲まされてはじめて覚醒させられる。主醮師盤老二によると、“私は受礼者が陰界に行けと言えれば陰界に行くし、陽界に行けと言えれば陽界に行く。陰の気が重くと思えば重く、軽くと思えば軽く。”つまり“陰が重い”ということは、盤老二が杖で天橋神軸を強く突く、あるいは2回突くと、人は一層強く混濁する。これに反して逆を行うと軽くなる。私達が15人の度戒者に尋ねたところ、すべて一致した回答であった。「どンドン歩いているうちにあの世との境界に至り、両足がガクッと落ちて眠たくなって意識がなくなった。ずっと続く銅鑼の音がすべて聞こえなくなって、まるで別の世界にいるようである。とても静かで目覚めてもいまだ夢を見ているようだ」。私達は以前盤老二に、三度の時度戒者にどのようなことが起こって意識がなくなるのか、どのような奥義があるのか探るように尋ねたが、彼はずっと笑って答えなかった。今に至って私達は、科学的な解釈を加える方法がないのである。

匯源瑶族の刀梯は漢族のそれとは異なり、上刀梯は漢族に比べると難度が少し高い。我々が取材した磨刀師の趙雄国・趙雄飛兄弟によると、磨刀は代々世襲し、彼らの家では九代目の磨刀師ということである。彼らによると、“上刀梯の方術において鍵となるのは磨刀と架刀である。刀の刃はよく研いでなければならず、薄ければ薄い程良い。刃は一つの面に向けて研いでいなければならない。架刀の時、2本の刀を交叉させて平にするが、そうすると人が踏んで上がっていても、角度があるために薄い刃で足が傷つかない。主醮師盤老二は刀梯を行う前は、1000斤の重りを負ったように慎重になった。彼は刀梯を登れなければどうしようかと、それが一番の関心事であった。刀梯を登り終えると、彼は喜々として雲台の上に飛び上がり、大声で叫ぶ。「成功した！」刀梯に登った人によると、“梯を登ろうとする時は、心が緊張していたが、足を踏み出すことは思ってもいなかった。刀を踏んでいる時は、針で刺すように少し足が痛い。”受礼者の普遍性を反映する熱した石を捧げ持つということは、刀梯を登ることほど危険は感じないと言っている。それは先に主醮師や引度師が持っているのも、自分が受け取る時には熱さを感じなくなっているからだ。

遊兵遊将は盛大で厳かであり、法事は熱烈な儀式である。度者は深紅の道衣を身にまとい、手には火牌を持つ。供の男は彼のために紅の傘を広げ、さながら1幅の“天官就職”の絵を見ているかのような様子である。村を廻る様子は、表情や態度を見ると、1人1人が喜びにわきかえり、うれしくて顔がほころんでいる。その後彼ら取材した時、1人1人すべてが一生のうちで過ごしたことがないような、最高の幸福な時を過ごしたようである。

(訳：佐川)

六、度戒のテキスト

1. 書承文献の不統一性

かつて、瑶族には活字印刷されたテキストは無かった。師公たちはテキストを互いに書き写しながら用いてきた。1989年、我々は匯源瑶族の度戒儀礼の間に互いに書き写されたテキストの状況を目の当たりにしたことがある。書き写す過程において、自分の理解に基づいて必要に応じて伝聞を加えて、内容を増やしたり減らしたりして勝手に書き換えたりする。例えば、趙子風が盤老二のテキストを見たところでは自分の持つ物には無い記述があったのですぐに写しとって記述したという。また盤日古のテキストに比べて

ある段が短いので、自分の文献の箇所は長すぎると感じて削ってしまった。また、新しい伝説を根拠にして神の来歴を改めてしまったりもする。このようにテキストは簡単に作られて伝わってゆくため、不統一性が作り出される。師公たちの教育レベルは高いとは言えず、理解能力には限りがある。テキストは漢語を使って瑶語の発音が記されるが、ただ瑶語としての意味が通じれば良いのであって、漢語として文章の筋道が通っているかは求められておらず、それが原因でテキストの中に誤字、あて字、作られた字も極めて多い。我々が彼らにそれを読み聞かせてくれるように頼むと、彼らは瑶語を使って流暢に味わい深く読み上げ、とても詩的な趣きがある。しかし彼らのテキストを漢語で読もうとすると、その趣きは乏しいものになってしまう。そのうえ、一部の保守的な師公は自分のテキストが他人に見て使われるのを怖れて故意に書き誤ったりする。例えば“游兵游将”をテキスト中にはただ“日里午”と記すといった具合で、瑶族以外の者にはこの語を宛てた意味が全く理解出来ない。特に儀礼中の順序や配列通りに全く記されていない。「請聖書」の中に上光の内容があり、「上光書」の中に神請ぎの歌の部分がある。文献の中には、《大発角》、《小発角》、《大先鋒》、《小先鋒》、《大運銭》、《小運銭》が記されている。色々教わって、ようやく大の字のついたものは度戒儀礼の中で用いられ、大の字のついていないものはその他の科儀の場で用いられることがわかった。発角（角笛を吹く）の中の《三声鳴角》《四声鳴角》《七声鳴角》は請聖書の中にすべて記載がある。但し具体的にどのように用いられるのかは師父から弟子への口伝であり、部外の者にはわかり得ない。実質的に“真伝一句話、仮伝一部書（最初に伝えられた事は一言であったのに、字に書くの一部の本になってしまう）”を体現しているのである。我々は9人の師公の37本のテキストを見て訳したが、書かれた内容は順序がそれぞれ同じではないことが明らかになった。ただ、基本的な内容と主要な部分は似通っている。以上のように、民間信仰の不統一性が民間道教の中にも同様に表れるのである。匯源瑶族の度戒儀礼について、昔、どれくらい文献が揃っていたのか、文字の記載が無く、また師公たちの言うことも各々がうので解らないため、我々は敢えて明言を避けることにする。

今日行われる度戒儀式では主要な四種類のテキストがあり、それらは《前度書》、《請聖書》、《上光書》と《書表書》である。我々は師公の保存しているテキストの中から細かい分析を経て、年代的にも比較的古く、内容的にも豊富で、誤字の少ない4本の文献を選んで以下に挙げる。

（担当：広川）

2. 文献の説明と書写

（1）《前度書》

その本は手書きの写本であり、横書き、毛筆書きである。匯源郷荆竹坪村盤貴榮の曾祖父である盤明旺が光緒26年（1900年）の正月に書き写したものである。原本は上下二冊に分かれ、現在はただ上冊のみ現存し、共に54頁に及ぶ。

匯源瑶族の度戒儀礼では、主醮師を前度師とも称する。《前度書》は即ち主醮師が主宰する度戒儀礼の専用書である。

そこには度戒儀礼の日程、法事の次第、経費等を載せてある。記載には主醮師は新度師男を引きつれて“云台”の下に云雷太鼓、銅鑼を鳴らして、五方神を拝し歌う《拝五方歌》、設禁壇で用いる呪符、上刀梯で歌う《上刀梯歌》、勅印で歌う《勅印歌》、犁頭、捧レンガ、打火堂等を含めて用いる法術、雪山法、雪山水の符呪、還四府願で歌う《還願歌》、度水槽、度勅床で用いる《頂条梁》という呪語等を載せてある。

これらの歌はそれぞれ関係する章節も入れて記述されている。

(2) 《請聖書》

その本は手書きの写本であり、横書き、毛筆で記されている。長さ 26 センチ、広さ 14 センチ、厚さ 2 センチ、計 103 頁である。匯源郷荆竹坪村盤貴榮の曾祖父である盤明旺は、清代光緒 22 年（1886）の正月に書き写したものである。

《請聖書》は呪語が多く記されている。また《呪書》と称ずる。これは証盟師、保拳師、総壇師、が“請聖”儀礼を行う時に使用する主要な文献である。趙法明法師が教えてくれたが、この本の前半の 26 頁は《請聖書》である。次に全文を挙げる。

三上香 「祭文」 / 三清呪 「祭文」 / 淨身呪 「祭文」 / 淨口呪 「祭文」
 請真武 「祭文」 / 請李十一 「祭文」 / 北斗呪 「祭文」 / 請黎十六 「祭文」
 請李十二 「祭文」 / 雷廷呪 「祭文」 / 功曹呪 「祭文」 / 元帥呪 「祭文」
 洞中呪 「祭文」 / 山神呪 「祭文」 / 財馬呪 「祭文」 / 玄壇呪 「祭文」
 康元帥呪 「祭文」 / 祖師呪 「祭文」 / 請功曹 「祭文」 / 梅山呪 「祭文」
 請盤王 「祭文」 / 請釜神 「祭文」 / 請龍神 「祭文」 / 請神水 「祭文」
 勅神水 「祭文」 / 勅劍 「祭文」 / 洒法水 「祭文」 / 解穢 「祭文」
 発角 「祭文」 / 大発角 「祭文」 / 三請 「祭文」

十二献：

一献香 「祭文」 / 二献花 「祭文」 / 三献灯 「祭文」 / 四献茶 「祭文」
 五献酒 「祭文」 / 六献粽 「祭文」 / 七献果 「祭文」 / 八献錢 「祭文」
 九献馬 「祭文」 / 十献疎 「祭文」 / 十一献桌 「祭文」 / 十二献人 「祭文」

(訳：李)

(3) 《意者書》

《請聖書》とセットになるのは、《意者書》である。“意者”は瑶語で“表述意思（考えを述べる）”という意味で、専門的な書ではない。法師は法事の具体的な実施状況に合わせて、系統的、かつ全体的に説明して述べたものである。自己紹介をし、法師が自身の身分を記述したところの《御名意者》がある。法師が自ら参加した伝灯度戒儀礼の全過程を示したところの《伝度意者》があり、某地某姓の誰がなぜ法事を行ったのかについて述べてある《碼頭意者》。どのような神にどのような用件を訴えたのかについての《説明意者》がある。また“鬼神名”を列する《大堂神明》、すなわち《大庁意者》がある。これらの書き物は、法師をつとめる人が暗記をして、しっかりと心に刻み、それでこそ祭祀の場で自由自在に用いることが出来るし、その師道に滞りがないことを現せるのである。《意者書》は、すべて“秘蔵（貴重な書物）”として見なされ、秘蔵されている。小さなノートを用いて写し取られ、身につけて他人に見られないようにしている。私たちは調査中に、《意者書》という本の存在を知ったが、ずっと見ることはできなかった。私たちは瑶族の法師と友人になってから初めて、趙法師が彼の《意者書》を出してきた。私たちが書き写したのは彼の《御名意者》と《伝度意者》である。趙法明は別に《碼頭意者》の最初と最後の 2 段の詞章を提

供してくれ、その他に私たちは、彼が学んだ際に暗唱した《請大堂神明》を書き写した。

請大堂神明 「祭文」 / 御名意者 「祭文」 / 伝度意者 「祭文」 / 碼頭意者 「祭文」

(4) 《上光書》

上光科儀は、《上光書》の中にあるように、上光、引光、猜光、勸光、接師接聖、脱童という6段の演目が分けられている。前述したように、上光、引光、猜光、勸光と脱童の五段は、すべて《上光書》の段に記述したので、接師接聖の1段のみ、ただ歌名を記す。ここにあわせて全て記録する。

祖師歌 「祭文」 / 大尉歌 「祭文」 / 李十二歌 「祭文」 / 三清歌 「祭文」
 下壇歌 「祭文」 / 盤王歌 「祭文」 / 三廟歌 「祭文」 / 観音歌 「祭文」
 三壇歌 「祭文」 / 真武歌 「祭文」 / 海番歌 「祭文」 / 雷霹靂歌 「祭文」
 梅山歌 「祭文」 / 楊山歌 「祭文」 / 南嶺歌 「祭文」 / 三元歌 「祭文」
 雲頭歌 「祭文」 / 鑑兵歌 「祭文」 / 黄衣歌 「祭文」 / 竈鬼歌 「祭文」
 家先歌 「祭文」 / 土地歌 「祭文」 / 本命歌 「祭文」 / 土主歌 「祭文」
 元宵歌 「祭文」 / 管干歌 「祭文」 / 上元歌 「祭文」 / 仙娘出世 「祭文」
 公王出世 「祭文」 / 大堂白馬歌 「祭文」 / 白象出世 「祭文」 / 麒麟出世 「祭文」
 獅子出世 「祭文」 / 猛虎出世 「祭文」 / 南蛇出世 「祭文」 / 犀牛出世 「祭文」

賞師運銭、賞師歌と運銭歌の二つを歌う。別に紅銭呪を用い、財馬呪と紙銭を焼く。

賞師歌 「祭文」 / 運銭齋 「祭文」

(5) 書表書

《書表書》は、写本で縦書き、毛筆で書かれており、光緒年間に盤明旺によって手書きされた。原書は上下2冊に分かれており、現在は1冊だけが残っている。《書表書》の全体を把握するために、我々は寧遠県九嶽山瑤族盤法香家から民国年間（1912年）の写本2冊を借りて照らし合わせ、3冊を合わせると334頁になる。

《書表書》には様々な榜、疏、表、詞、関、文、牒、状、牌、聯、禁紮、脚引、封箋等の文書書式が記され、使用時には定められた書式に基づいて姓名、年齢、時間、場所等内容が書き加えられる。すなわち一つの完成した文書となる。その分類は以下のようになる。

A. 榜。伝度請聖黄榜、伝度約束黄榜、曉諭黄榜、補充黄榜、加職黄榜、茶供榜、酒供榜、湯花榜、井露榜、門扇榜。

B. 疏。慶陽疏、賀星疏、還四府願大疏、具伝大疏、星辰大疏、封齋疏。

C. 表。初夜黄表、中夜黄表、末夜黄表、迎兵表、刀山表、賀星表、封齋表、開齋表、補充表、加職表、謝聖黄表、削罪黄表、補職黄表、代替表。

D. 詞。伝度珠詞、補充珠詞、加職珠詞。

- E. 関。四府統関、伝度銭関。
- F. 文。補充誥文、伝度赦文、伝度解齋還願疏文、功德満散化財関文。
- G. 牒。男陽陰二牒、女陽陰二牒、男補充陽陰二牒、女補充陽陰二牒、男加職陽陰二牒、女加職陽陰二牒、糧関牒等。
- H. 牌。花牌、回家火牌。
- I. 状。天府請状、九帝函状、伝度珠詞請助函状。
- J. 聯。各種の聯に対す。

《書表書》は度戒儀礼の重要なテキストである。書表師が順序に基づいて一つ一つ毛筆を用いて度戒文書を書き写していく。一式が1部で構成されていることもあり、また一式が複数の文書で構成されていることもある。一つの度戒には400以上の、様式の異なる文書を書き写す必要がある。

《書表書》と組み合わせる経書には《星辰位》という推算法、《昇職地域名》と《南斗呪》等がある。これらの文献は《書表書》の中にはなく、書表師は小さなノートに書き写して、密かに保存する。我々が現在収集したのは、匯源郷荊竹坪村盤法玉が保存し、彼の師父が彼に引き継いだ清代の写本であり、特に後述する。

- A. 星辰位は書表師が、新しい受礼者が生年月日から北斗七星のどの星位にあるかを推算する方法である。例えば度者が甲戌年の出身の場合、火命に属し、中天東斗第三位木徳星君にあたるということである。

星辰位

B. 昇職地域は、度者の生年によって金木水火土中の属行のどこに属するか、東西南北中央の方位に対応されるものである。すなわち金と西が対応し、木と東が対応し、火と南が対応し、水と北が対応し、土と中央が対応する。これによって度者が職に昇る方位と地域が確定する。盤法玉説によれば、以下に記すように昇職地域は清代に用いたものを現在に踏襲している。

- C. 「南斗呪」は書表師が合星拝斗の中で星の名前を請うものであり、呪文は以下のようである。

(訳：佐川)

(6) 符呪訣罡

度戒儀礼の符呪訣罡とは南の天師道に属する符呪訣罡であり、匯源の宗教者が道壇儀礼の中で獲得するものである。我々が瑶族の宗教者を調査した時には、彼らは皆、かつて伝わっていた七十二符、七十二訣、七十二罡について言及した。瑶族のいうところの七十二はたくさんという意味で、縁起の良い数字でもあり、絶対数ではない。実際上の伝えられた符呪訣罡は彼等の言う縁起の良い数字よりも多く存在する。

A. 罡

このあたりの瑶族のいう罡歩とは、決まったステップの足踏みであって、いわゆる踏罡のことである。我々は調査中にかつては《罡歩書》があったと耳にした。しかし、藍山県の瑶族の居住区では既に失われ

ており、ただ寧遠県九嶷山大坳の趙喬生老人がなお、1冊の《罡歩書》を保存しているのみであるという。我々は山越え谷越え百里の道を歩いて、趙喬生の家を訪ねた。彼は我々を熱烈に歓迎してくれたが、徹底的に探しても、そのテキストを見つけ出すことは出来なかった。このあたりの瑶族は常に七星罡、八卦罡と九九連還罡を使う。

B. 訣

ここでは手訣を指す。両手の十指を用いて様々な手訣を結び、かつて良く使われていた手訣は100種を超える。調査中に聞いたところでは匯源の馮明喜老人は50種類もの手訣を結ぶことができ、それには、全て名前がついていて、我々は直接彼に聞いたかったのだが、残念ながら彼は10年前に亡くなっていた。師父を迎える時に用いる祖師訣、請神訣、梅山訣、身を守るための防身訣、陰兵を招くための招兵訣、陰兵を発するための発兵訣、鬼路を断つのに断路訣、下禁壇の時に用いる五雷訣、銅砸・鉄砸等の訣がある。

C. 符、呪

瑶語で言うところの靈符神呪で、多くの場合符と呪は併用され、また単独で用いられる場合もある。下禁壇符呪、変七星罡符呪、手棒火砖符呪、打火堂符呪があり、また上刀梯の際、頭につける鎮煞符、刀梯の柱に貼る符、十二神を鎮める十二刀符等もある。趙法升法師に取材した時に幸運にも彼の珍藏している《符書》の写本を見ることが出来た。これには82種の符が図示され、度戒儀礼に関係するものや、その他の儀礼で使うものもあった。

道壇科儀の中で使用される靈符神呪は、これ一つとっても煩雑な宗教の秘文に属していて、神秘的な宗教文化が内在していることを現しており、民衆にとっての生や老い、病い、死と関係しており、常用符、秘符、平安符と凶符に分類される。これには祈福禳災（幸福を祈り災いを払う）、逐獸滅鼠（獣をおって鼠を滅ぼす）、鎮鬼降妖（鬼を鎮めて妖魔を降らせる）、驅邪纏煞（邪を追って煞神を治める）、治邪祛病（邪を治めて病をはらう）、超薩亡魂（死者の魂を齋度する）等の用途がある。紙、竹、木、石、水等、同類でない材料が用いられているが、黄紙を用いたものが多く見られる。これには、水銀朱、墨符（墨を用いた絵）、玄符（人差し指や刀の刃を用いて、竹、木、鉄、石、水、あるいは人の身体の一部に対して、空で描き記す身振りをする）の3種類の絵の形式があり、その使用法としては、掛ける、貼る、食べる、洗う、埋める、隠す、身に帯びる等の方式がある。符呪は一般人からすれば望んでも手が届かないもので、道壇儀礼中に割り当てられた手訣や罡歩がどのように組み合わせられているのかには、厳粛性と神秘性が現れている。

（訳：広川）

七、度戒法器、法服、音楽

1. 法器

（1）鼓

昔は太鼓だった。現在は普通に小太鼓を用いる。度戒儀式の始まりの時、先ず鼓を敲かなければならない。いわゆる“云雷鑼鼓（ドンドン太鼓を鳴らす）”で、神々に通告する。法事の進行中にいわゆる鼓を叩くのは悪鬼を駆逐し、邪気をしずめことである。

(2) 銅鑼

大銅鑼、小銅鑼がある。小銅鑼はまた“碗鑼”という。度戒儀礼を行う時には、先ず大銅鑼を敲かなければならず、小銅鑼で伴奏する。いわゆる神々に通告し、迎えるのである。法事の進行中で、いわゆる鼓鑼を鳴らすのは悪鬼を追い払う、邪気を鎮めるためである。また雰囲気を作り出すための打楽器である。

(3) 鈸 (シンバル)

また“シンバル”という。大鈸、小鈸があり、小鈸はまた“吵子”といい、大鈸のを伴奏する楽器である。大鈸がない時に、小鈸で大鈸に代わって使う。この他、シンバルは獅子の咆哮と考える。鈸の声により音頭をとって、地府をやぶることになる。

(4) 噴吶 (チャルメラ)

また“笛”という。吹き口は笛喉といい、銅で作られ、中段のところは笛管といい、木製で八つ穴があり、下部はラッパの形のような銅製のものである。法師は聖を迎え、神を楽しませる。

(5) 牛角

水牛の角で作られ、長さ1尺くらい、水牛の角の頂部を切って小さな穴を一つあけ、吹く時に底を上にする。瑶族の宗教者が法事をやる時、開天門あるいは神兵を招き寄せる時に用いる。

(6) 劍

鉄製、柄のさきに輪をつけ、輪中に3, 5, 7あるいは9個の奇数の小さい鉄の輪がついている。符を描いて過ぎ越すことを命令し、悪鬼を駆逐し、邪気を鎮める法具である。

(7) 銅鈴

瑶族の宗教者が聖を請う時に必ず用いる法器である。また銅はよく魔をよけるといわれる。ゆえに儀式の中に銅鈴が多く使われる。法事のはじめに、常に“銅鈴を鳴らし、神々を驚かす”という言葉がある。また瑶族の宗教者が歌や踊る時に、拍子をとる打楽器である。

(8) 玉簡

またの名を“牙簡”という。官人が君主に拝謁する時手に持つ笏をまねって作られたのである。神々を請う時必ずこれを使う。神権の象徴であり、天神に対する尊敬を示す。

(9) 神杖

またの名は“師公棒”という。木製、長さ2尺4寸、上端は蛇の頭の形である。伝説では南蛇から変化されてきたとされる。“生受玉皇親勅命、南蛇纏頭我為強（玉皇の命令で生まれ、南蛇は頭に巻きつくことで強くなる）”これが神杖で指すのである。瑶族の宗教者が神を請い、兵を動かすための法具である。

(10) 卦具

普通は竹の先で作られ、形は半月形で、正反、陰陽に分かれている両面で神意を占う用具である。一つは表で一つは裏で巽卦であると神は満足したか、あるいは承知したという表われである。両面とも上向きは陽卦といい、両面とも下向きは陰卦という。この陰陽卦二つの両卦の意味は、宗教者が伝承している卦と、宗教者が占う意図及び異なる事件、占いの場合によって解釈は異なってくる。

(11) 珠筆

毛筆で純米酒を用いて調合された銀珠粉をつくる。これを朱筆という。いわゆる悪鬼、邪気を駆逐するための強い効力がある。符を描き、署名をしたり、牒、文、疎、表、榜文等に点をつけることに用いる。度戒をした巫師に限って用いられる。

(12) 印

老君印、王姥印、行印の3種の印がある。木製、正方形である。老君印、王姥印は主醮師により上刀梯を行った後に雲台から受礼者と妻に投げ授けられる。死後に副葬品として一緒に埋葬するものである。行印と老君印は同じで、銀珠を用いて朱肉とする。巫師の牒、表、疎等証書に押す。押印する時に年には印を付け、月にはつけない。州印をつけ、県にはつけない。

(13) 馬棒

長方形の木製の棒であり、長さ30センチ、幅6センチ、4面に四府騎馬の図案を刻んであり、馬棒という。その上に墨を塗った上に、紙をのせて刷る。紙馬という。紙縁師は紙銭を作って、紙馬に添え、セツトとしてまとめて、儀礼の時に神々に謝礼するため、奏した後に燃やして届ける。

(訳：李)

2. 法服

(1) 師公服

深紅色で、藍色の襟がつき、襟が前で衿になっている長衣である。普通の法服であり、巫師はこの服装で科儀を行う。

(2) 背袴

緋色で襟が前で衿になっている短い服。師公服より比較的高い位の法服である。度戒儀礼の巫師のみ、この服装で開天門、崇り神を追い払う儀礼を行う。

(3) 神頭

9つの紙片を繋ぎあわせることによってできている。その中の7枚の紙は、一列に並んでおり、2枚は耳の形のように付けられている。両端の4枚には、それぞれ金童と玉女が描かれており、中間の5枚には、左から右に、太清、玉清、玉皇、上清、北極紫微等の五尊神が描かれている。巫師が科儀を行い、神を招き、開天門を行う際に頭上にかける。“神頭”といい、神性を示す。

(4) 師公帽

または“平頭帽”と称する。人髪で織ったものである。頂点は背骨のような形で、上に小さなおおいをかけ、折りたたむと四角形となる。帽子の峰の両端には、それぞれ約4寸の2枚のリボンがあり、刺繍糸で所有者の生年の十干十二支と法名が刺繍してある。帽子の後には、2本の約1尺2寸のリボンがあり、帽子の上の2辺には対聯が刺繍されている。巫師が師公帽をかぶる時神頭をかけ、深紅の法服を着ることが必要とされる。巫師が神を招き、開天門の際にかぶるものである。

(5) 羅帶

手織り木綿を用いて作る。長さ160センチ。両端に図案が刺繍されていて、48本の紅い絹糸で繋がれた玉が縫い込まれている。巫師が上光の時に神頭の下につける。

3. 音楽

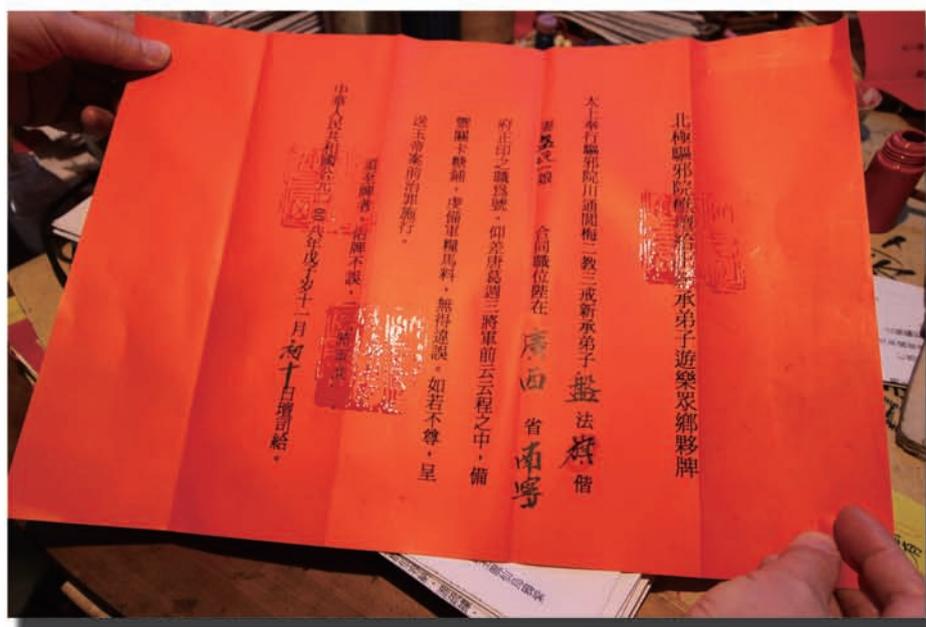
匯源郷瑶族郷の度戒儀礼の音楽は、瑶族の民間宗教の特色を持つ。すべての音楽が、念白（台詞を言う）と念唱（唱え言）の2類に分けられる。念白は、普段本を読む時の読み方と同じように念じる。リズムは比較的単調で、地味であり、伴奏はしない。《意者書》、榜、疏、牒、状を読む際、リズムは同じようにこの節回しを採用している。念唱のリズムは、少し旋律化しており、あるいは間に銅鈴で拍子をとる。神を招き、神を迎える歌や、上刀梯の歌及び、その他の歌に念唱が取り入れられている。念唱は8種の念唱法に分かれ、私たちはその中の3種の唱法を書き写し楽譜にした。下記の如くである。

「祭文」

（訳：三村）

以上 第四章





瑶族文化研究所 通訊 第一号

発行日 2009年3月29日 編集・発行 ヤオ族文化研究所

〒259-1293 神奈川県平塚市土屋2946 神奈川大学 湘南ひらつかキャンパス 1号館238室
廣田研究室内ヤオ族文化研究所

Tel:0463-59-4111 E-mail: hirotr01@kanagawa-u.ac.jp URL: <http://www.yaoken.org/>